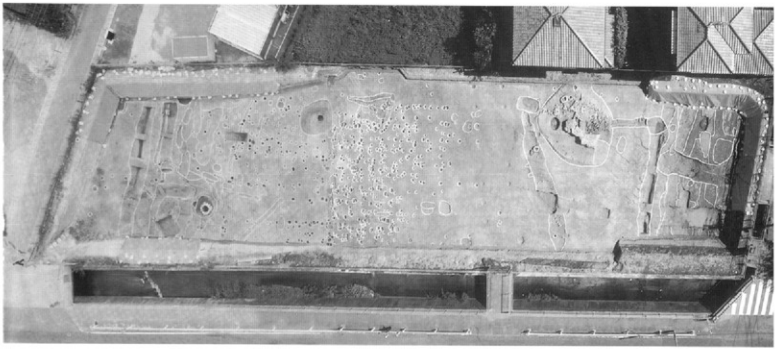
外環状道路関係文化財発掘調査報告書20

野多目A遺跡

－第７次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第754集

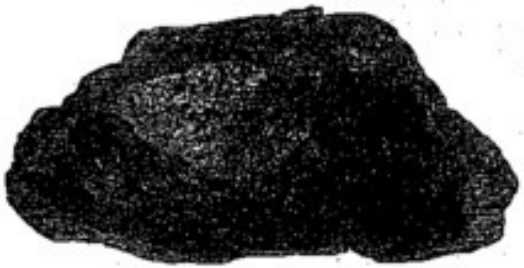


２００３年

福岡市教育委員会

『野多目A遺跡－第７次調査の報告－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 754 集）

※ 正誤表訂正図（２）



81-215（内）
↓
214

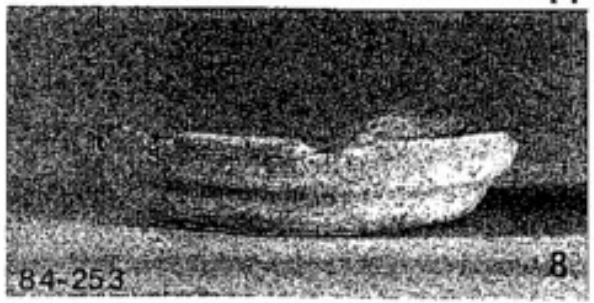
81-215（外）
↓
214

10

PL. 8　出土遺物写真（2）

PL.8　枝番 10　Fig.番号訂正

11 ↰

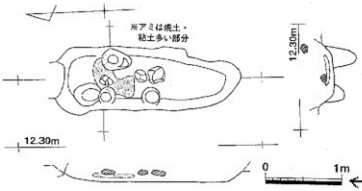


PL.9　枝番追加

PL. 9　出土遺物写真（3）

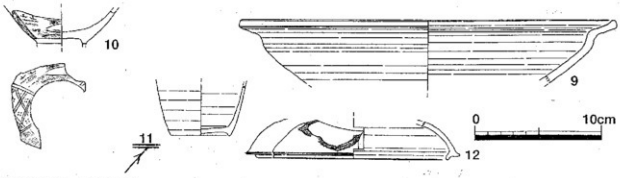
『野多目A遺跡－第7次調査の報告－』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第754集)

※ 正誤表訂正図（1）



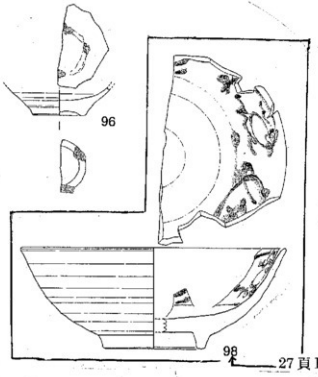
← 7頁 Fig.18 スケール追加

Fig.18 IA区 SX037 実測図（S=1/50）



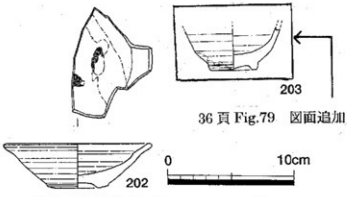
21頁 Fig.68 枝番追加

Fig.68 IA区 SX001出土遺物（1）（S=1/3）



27頁 Fig.72 図面差し替え

Fig.72 IA区 SX001出土遺物（5）（S=1/3）



36頁 Fig.79 図面追加

Fig.79 IA区 土坑（SX,SK）出土遺物（S=1/3）

正誤表　（福岡市埋蔵文化財調査報告書第754集 『野多目A遺跡一第7次調査の報告一』）

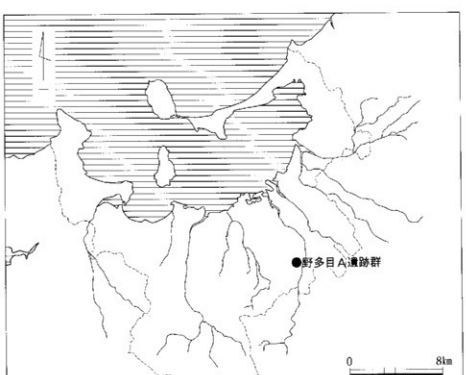
頁	行ほか(図・表・写真)	誤	正
巻頭図版3	(上から2段目中) 8	(Fig.85-249)	(Fig.84-249)
(同上)	(上から3段目左) 9	(Fig.64-249)	(Fig.69-249)
7	Fig.18	※スケール脱落	※訂正図に差し替え
20	1行目	(Fig.右	(Fig.4右
21	Fig.68	※下段中央左図の枝番「11」脱落	※訂正図参照
23	表1・番号8「器種・器形」の項	陶器・土管？	高取または小石原系陶器・陶管
(同上)	表1・番号8「時期」の項	18c？	18c中～後
(同上)	表2・番号8「器種・器形」の項	※空白	肥前系染付磁器・瓶
26	表5・番号76「器種・器形」の項	肥前系陶器・注口付鉢	肥前系陶器Ⅱ期・注口付鉢
(同上)	表5・番号77「時期」の項	17c前～注	17c前～中
27	Fig.72・枝番「98」	※印刷ミスにより線が一部不鮮明	※訂正図参照
29	表7・番号104「整理番号」の項	202	203
36	Fig.79	※右下端枝番「203」遺物図面脱落	※訂正図に差し替え
38	表15・番号197「器種・器形」の項	陶器・擂鉢	肥前系陶器Ⅱ期・擂鉢
42	表18・番号215「備考」の項	※右記一文を追加	巻頭図版3-12
(同上)	表21・番号247「備考」の項	PL.9-8	PL.9-11
PL.1	1	ＩA区西半建物群写真	ＩA区東半建物群写真
(同上)	2	ＩA区東半水田・灌漑	ＩA区西半水田・灌漑
PL.2	1	ＩB区西半溝群写真	ＩB区東半写真
(同上)	3	ＩB区西半溝群	ＩB区東半写真
PL.8	右下枝番10	81-215(内)	81-214(内) ※訂正図参照
(同上)	(同上)	81-215(外)	81-214(外) ※訂正図参照
PL.9	左下84-247	※枝番「11」脱落	※訂正図参照

外環状道路関係文化財発掘調査報告書20

野多目A遺跡

－第７次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第754集



遺跡略号 NMA-7
調査番号 0014

２００３年

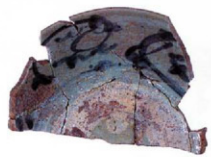
福岡市教育委員会

1．I区全体写真（合成）※上が西側

2．IA区東側～中央写真（空撮）　※上が北

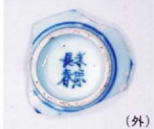
3．IB区全体写真（空撮）　※上が北

4．IA区 SX001青磁碗（Fig.72-93）



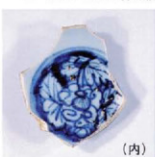
5．IA区 SX001漳州窯系青花鉢
（Fig.72-98）

（内）

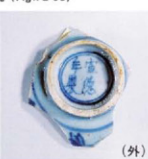


（外）

6．IB区 SE003青花碗
（Fig.84-250）



（内）



（外）

7．IA区 SX001青花碗（Fig.72-95）

8．IB区 SE003青花碗
（Fig.85-249）

9．IA区 SX001肥前系染付皿
（Fig.64-27）

（内）

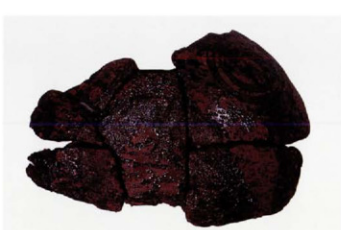
（外）

11．IB区 SD012出土肥前系陶器皿（Fig.92-323）

（内）

（外）

10．IB区 SD006青花碗
（Fig.90-300）



12．IA区 SE021漆塗り木碗（Fig.81-215）

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、数多くの遺跡が残されています。近年、開発の増加が著しく、それらがしだいに失われつつあります。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めております。

本書は福岡外環状道路建設に伴い実施された野多目A遺跡群第7次調査の記録を報告するものです。調査では、主に中世から近世初頭の遺構と遺物が発見されました。これらは、『筑前國続風土記拾遺』に見える「那珂郡野田目村」の「古村」に相当すると考えられます。

本書が文化財保護へのご理解とご認識を深める一助となり、また研究資料としても活用して頂けましたら幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、福岡北九州高速道路公社、国土交通省福岡国道工事事務所をはじめとする関係各位、また地元の皆様のご理解を賜り、ご協力を頂きましたことに対しまして厚くお礼申し上げます。

平成15年3月14日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

例　言

1．本書は、外環状線道路建設に伴い、福岡市教育委員会が2000年度に行った野多目A遺跡第７次調査の報告書である。

2．遺構の呼称は記号化し、SAは柵列、SBは掘立柱建物、SDは溝状遺構、SEは井戸、SKは土坑、SPは柱穴、SXは不明遺構・特殊遺構（不整形土坑を含む）、SSは水田址をそれぞれ示す。遺構番号は、調査区各区（ＩA区、ＩB区、Ⅱ区）ごと、遺構種別ごとに付している。一部、番号表記に混乱があるが、重複や訛謬を除き調査時の名称を用いた。

なお掘立柱建物（SB）の番号については整理時に通し番号で付している。

3．本書の遺構図に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものであるが（Ⅰ区とⅡ区で異なる）、国土座標軸との関係については、Fig.２・３を参照されたい。国土座標軸は写測エンジニアリング株式会社に委託して設置した３級基準点から測量して求めている。レベルについては、野多目小学校に設置している水準点から移動したものである。

4．本書に用いる遺構図は、久住猛雄、横山邦継、池田佑司、阿部泰之、藤 祥子、上方高弘、西堂将夫、津曲大佑、坂口剛殺、坂田邦彦、山口裕平、池田光太、鐘ヶ江賢二、佐野和美、能登原孝道、嵩口裕子、山岡由季、野村 蘭が実測、作成した。遺物実測図は、上方高弘、山口裕平が作成し、久住が一部補った。拓本は成清直子が行なった。製図は、上方、成清、吉田浩之、川鍋紀子、横山香織、久住が行った。また、調査現場写真および遺物写真は久住が撮影した。ただし、現場写真のうちＩA・ＩB区の全景撮影については、写測エンジニアリング株式会社に委託し、ラジコンヘリによる航空撮影を行ない、巻頭図版１のＩ区全景合成写真は、写測エンジニアリング株式会社が作成したものである。

5．本書の16世紀から18世紀の遺物（土器・陶磁器）についての分類と編年・年代観についての遺物観察表や本文中の記述は、以下の各文献等によっている。遺物の報告は上方高弘（埋蔵文化財課整理調査員）と久住が協議して行ない、一部について田中克子氏（埋蔵文化財課整理調査員）の御教示を得た。

大橋康二 1989『肥前陶磁』 ニューサイエンス社

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会

續伸一郎「中世後期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社

森本朝子1990「14世紀以降の輸入陶磁器」『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告　Ⅴ　博多』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第221集）

田中克子1997「野多目A遺跡群第４次調査出土の近世初頭の遺物について」『博多研究会誌』第５号　博多研究会

6．本書の編集・執筆は久住猛雄が行った。遺物観察表の作成は上方高弘が行なった。なお、自然科学分析の報告はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託している。

7．本調査に関わる記録類（図面・写真等）と出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。資料が広く活用されることを望みたい。

本文目次

第１章　はじめに ……1
　１．調査に至る経緯 ……1
　２．調査の組織 ……1
　３．調査地点の立地と環境 ……2
第２章　調査の記録 ……3
　１．調査の経過 ……3
　２．調査の概要 ……5
　３．Ⅰ区の検出遺構 ……6
　（１）ⅠA区SX001 ……7
　（２）井戸（SE） ……11
　（３）土坑（SK,SX） ……12
　（４）溝状遺構（SD） ……13
　（５）水田及び灌漑関係遺構 ……20
　（６）掘立柱建物（SB） ……39
　４．Ⅱ区の検出遺構 ……47
　（１）井戸（SE） ……50
　（２）その他の遺構 ……50
　５．出土遺物 ……54
第３章　自然科学分析報告 ……59
　野多目A遺跡群第７次調査の自然科学
　分析（パリノ・サーヴェイ株式会社） ……59
第4章　調査のまとめ ……71

挿図目次

Fig.1　野多目遺跡群各調査地点位置図 ……2
Fig.2　第７次調査区と外環状線
　建設予定部分 ……折込表
Fig.3　第７次調査ⅠA・ⅠB区
　調査区概要図 ……折込表
Fig.4　ⅠA・ⅠB区全体図 ……折込表
Fig.5　ⅠA区SX001現況測量図 ……折込表
Fig.6　ⅠA区SX001東西ベルト土層図 ……折込裏
Fig.7　ⅠA区SX001南北ベルト土層図 ……折込裏
Fig.8　ⅠA区SX001(塚)礫群平面図 ……折込表
Fig.9　ⅠA区SX001礫群縦断面図 ……折込表
Fig.10　ⅠA区SX001礫群横断面図 ……折込裏
Fig.11　ⅠA区SE021実測図 ……3
Fig.12　ⅠA区SE020実測図 ……3
Fig.13　ⅠB区SE003実測図 ……4
Fig.14　ⅠB区SE002実測図 ……5
Fig.15　ⅠB区SE001実測図 ……5
Fig.16　ⅠA区SK010実測図 ……6
Fig.17　ⅠA区SX002・SX013実測図 ……7
Fig.18　ⅠA区SX037実測図 ……7
Fig.19　ⅠB区SK036実測図 ……7
Fig.20　ⅠA区SX013実測図 ……8
Fig.21　ⅠB区SD005・SD006-Ⅲ区実測図 ……8
Fig.22　Ⅰ区各溝状遺構土層図 ……9
Fig.23　ⅠA区SD003・SX104,SX107杭列平面図 …10
Fig.24　ⅠA区SD101,SX107・SD109,SD003
　土層図・断面図 ……10
Fig.25　ⅠA区SX105平面図 ……11
Fig.26　ⅠA区SX105・SX106断面図・土層図 ……12
Fig.27　SB01実測図 ……14
Fig.28　SB02実測図 ……14
Fig.29　SB03実測図 ……14
Fig.30　SB10実測図 ……14
Fig.31　SB04実測図 ……14
Fig.32　SB06実測図 ……14
Fig.33　SB09実測図 ……15
Fig.34　SB08実測図 ……15
Fig.35　SB05実測図 ……15
Fig.36　SB07実測図 ……15
Fig.37　SB12実測図 ……15
Fig.38　SB41実測図 ……15
Fig.39　SB27実測図 ……15
Fig.40　SB11実測図 ……16
Fig.41　SB18実測図 ……16
Fig.42　SB16実測図 ……16
Fig.43　SB17実測図 ……16
Fig.44　SB15実測図 ……16
Fig.45　SB13実測図 ……16
Fig.46　SB20実測図 ……17
Fig.47　SB30実測図 ……17
Fig.48　SB32実測図 ……17
Fig.49　SB14実測図 ……17
Fig.50　SB36実測図 ……17
Fig.51　SB24実測図 ……18
Fig.52　SB22実測図 ……18
Fig.53　SB25実測図 ……18
Fig.54　SB19実測図 ……18
Fig.55　SB37実測図 ……18

Fig.56　SB42実測図……18
Fig.57　SB28実測図……18
Fig.58　SB21実測図……18
Fig.59　SB35実測図……18
Fig.60　SB31実測図……19
Fig.61　SB26実測図……19
Fig.62　SB40実測図……19
Fig.63　SB23実測図……19
Fig.64　SB38実測図……19
Fig.65　SB34実測図……19
Fig.66　Ⅱ区SE003実測図……19
Fig.67　Ⅱ区全体図……20
Fig.68　ⅠA区SX001出土遺物（1）……21
Fig.69　ⅠA区SX001出土遺物（2）……22
Fig.70　ⅠA区SX001出土遺物（3）……24
Fig.71　ⅠA区SX001出土遺物（4）……25
Fig.72　ⅠA区SX001出土遺物（5）……27
Fig.73　ⅠA区SX001出土遺物（6）……28
Fig.74　ⅠA区SX001出土遺物（7）……30
Fig.75　ⅠA区SX001出土遺物（8）……31
Fig.76　ⅠA区SX001出土遺物（9）……32
Fig.77　ⅠA区SX001出土円筒埴輪……33
Fig.78　ⅠA区SX002土坑出土遺物……35
Fig.79　ⅠA区土坑（SX,SK）出土遺物……36
Fig.80　ⅠA区SE021出土遺物……37
Fig.81　ⅠA区SE021出土木製品……39
Fig.82　ⅠA区SE021・SE020、柱穴（SP）出土遺物……40
Fig.83　ⅠB区土坑（SK）、柱穴（SP）出土遺物…41
Fig.84　ⅠB区井戸（SE）、柱穴（SP）出土遺物…43
Fig.85　ⅠB区SE003出土木製品……43
Fig.86　ⅠB区SE001井戸枠補組板材……44
Fig.87　ⅠB区SE003井戸枠補組板材……45
Fig.88　ⅠA区溝状遺構（SD）出土遺物……47
Fig.89　ⅠB区SD004出土遺物……48
Fig.90　ⅠB区SD004・SD006出土遺物……49
Fig.91　ⅠB区SD006・SD007・SD008出土遺物…51
Fig.92　ⅠB区SD009・SD012出土遺物……52
Fig.93　ⅠB区SD012・SD014・SD015出土遺物…53
Fig.94　ⅠB区SD020・SD004、検出時出土遺物…55
Fig.95　ⅠA区西側水田・灌漑施設出土遺物……56
Fig.96　ⅠA区SX105出土木杭……56
Fig.97　Ⅱ区出土遺物……58
Fig.98　Ⅱ区出土石器……58
Fig.99　ⅠA区SX002出土石製品……58
Fig.100　ⅠB区SK036出土遺物補遺……72

表目次

表1．Fig.68出土遺物観察表……23
表2．Fig.69出土遺物観察表……23
表3．Fig.69出土遺物観察表（2）……26
表4．Fig.70出土遺物観察表……26
表5．Fig.71出土遺物観察表……26
表6．Fig.71出土遺物観察表（2）……29
表7．Fig.72出土遺物観察表……29
表8．Fig.73出土遺物観察表……29
表9．Fig.74出土遺物観察表……34
表10．Fig.75出土遺物観察表……34
表11．Fig.76出土遺物観察表……34
表12．Fig.77出土遺物観察表……34
表13．Fig.78出土遺物観察表……34
表14．Fig.78出土遺物観察表（2）……38
表15．Fig.79出土遺物観察表……38
表16．Fig.80出土遺物観察表……38
表17．Fig.80出土遺物観察表（2）……42
表18．Fig.81出土遺物観察表……42
表19．Fig.82出土遺物観察表……42
表20．Fig.83出土遺物観察表……42
表21．Fig.84出土遺物観察表……42
表22．Fig.84出土遺物観察表（2）……46
表23．Fig.85出土遺物観察表……46
表24．Fig.86出土遺物観察表……46
表25．Fig.87出土遺物観察表……46
表26．Fig.88出土遺物観察表……46
表27．Fig.89出土遺物観察表……46
表28．Fig.89出土遺物観察表（2）……50
表29．Fig.90出土遺物観察表……50
表30．Fig.91出土遺物観察表……54
表31．Fig.92出土遺物観察表（2）……54
表32．Fig.92出土遺物観察表（2）……57
表33．Fig.93出土遺物観察表……57
表34．Fig.94出土遺物観察表……57
表35．Fig.95出土遺物観察表……57
表36．Fig.96出土遺物観察表……57
表37．Fig.97出土遺物観察表……57
表38．Fig.97出土遺物観察表（2）……58

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

福岡外環状道路は、昭和44年度に都市計画決定された延長26.4kmの都市計画道路で、西区姪の浜から粕屋郡粕屋町戸原に至る。国土交通省（旧・建設省）施工の福重・月隈間の16.2kmの区間は、一般国道202号外環状道路と呼称される。

平成元年度から３年度にかけて、建設省（現・国土交通省）福岡国道事務所より、福岡外環状道路路線内の埋蔵文化財の有無についての調査願いが埋蔵文化財課に提出された。これを受ける形で、埋蔵文化財課は、第Ⅰ工区の立花寺から第Ⅳ工区の野芥・福重間において遺跡の有無および遺構の遺存状態の確認のため、用地内において平成２年度より断続的に試掘調査を実施した。本書で報告する南区野多目２丁目地内の野多目A遺跡群は、すでに５度の発掘調査を周辺で行ない遺跡の存在が明らかになっていた。そのため工事用地内で平成11年度に試掘調査を行ない、中世から近世初頭の柱穴や溝を確認し、道路工事に先立ち、記録保存のための発掘調査を必要とすることが判明した。

発掘調査は、外環状道路第Ⅱ工区のうち野多目工区については、福岡北九州高速道路公社が工事主体であり、調査委託の協議も福岡北九州高速道路公社と埋蔵文化財課の間で主に行なったが、実際には福岡北九州高速道路公社、福岡国道事務所、福岡市土木局外環状道路推進部と埋蔵文化財課の４者で、発掘調査願から調査委託契約などで協議を重ね、工事工程に合わせて平成12年度に発掘調査を行なうことで合意を得て、平成12年５月より調査を開始した。

なお、整理作業は平成13年度から14年度にかけて行ない、平成14年度３月に報告書を刊行した。

２．調査の組織

発掘調査年度（平成12年度）および整理年度（平成13・14年度）にあたっての組織は以下の通りである（事前審査は平成11年度より記述した）。

調査委託　福岡北九州高速道路公社
　　建設省（平成13年度より国土交通省）九州地方整備局福岡国道工事事務所

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　文化財部埋蔵文化財課　課長　山崎純男（平成11年度～）
　　調査第１係長　山口譲治（平成11年度～平成13年度）
　　力武卓治（平成14年度～）

調査庶務　文化財部文化財整備課　宮川英彦（平成12年度～平成13年度）
　　川村浩旭（平成14年度～）

事前審査　埋蔵文化財課事前審査係　宮井善朗（～平成11年度）
　　瀧本正志（平成12年度～平成13年度）
　　大塚紀宜（平成14年度）

調査担当　埋蔵文化財課調査第１係　久住猛雄（平成14年度より事前審査係）

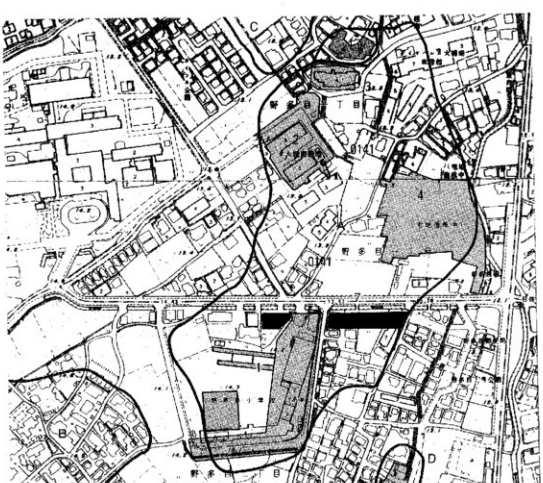
今回の調査にあたっては、福岡北九州高速道路公社、建設省（現・国土交通省）九州地方整備局福岡国道工事事務所の方々には、調査に至る条件整備、調査中の工程調整などについて、深いご理解と多大なご協力を頂いた。調査が円滑に進行し、無事終了することができたのは、近隣および地元の方々のご理解とご協力があったことに加え、何よりも炎天下の中で発掘作業に従事して頂いた多くの発掘作業員、発掘調査員の方々のおかげである。また、調査終盤では図面作成などで埋蔵文化財課の同僚、先輩の方々のご助力も頂いた。また整理作業過程では整理調査員や多くの整理作業

員のご協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

3．調査地点の立地と環境

野多目A遺跡群は、福岡平野を北流する那珂川西岸に形成された河岸段丘上に位置する。那珂川西岸には、浸食による残丘や沖積微高地が多く形成され、近年の発掘調査や試掘調査によりこれらの上に大小の遺跡群が存在することが明らかになっている。野多目A遺跡群は（Fig. 1）、野多目小学校建設に伴う調査を端矢として、現在までに6次にわたる調査が行なわれている（注）。

第1次調査（野多目前田遺跡）では、奈良～平安時代の溝、13～14世紀の水田（溝、堰、柵）を確認した（福岡市報告書第85集）。古墳時代の祭祀遺物群（内行花文鏡鏡片、ミニチュア土器、土製模造鏡、土製玉類）、古代の瓦類・墨書土器などの出土が特筆される。内行花文鏡は、約4分の1の破片だが、斜角雷文帯が反転し、銘が異例であること、鏡胎が厚いことから、中国鏡に酷似するが倣製鏡とみられ（弥生時代終末か）、前原市平原遺跡の「大官子孫」内行花文鏡と類似が指摘される重要な資料である。**第2次調査**では、弥生時代早期（突帯文期）の水田（水路、井堰、木口など）、中世の集落（溝、掘立柱建物）を確認した（市報第159集）。本田農耕開始期の資料として重要である。**第3次調査**では、中世の集落（掘立柱建物、道路、溝）、近世の溝を確認した（市報第263集）。次の第4次調査と同一の段丘上に立地する。**第4次調査**では、弥生時代後期後半から古



A 野多目A遺跡群　B 野多目B遺跡群　C 三宅B遺跡　D 野多目D遺跡群

Fig. 1　野多目遺跡群各調査地点位置図（1/4000）
（遺跡内の番号は各遺跡の調査次数を示す）

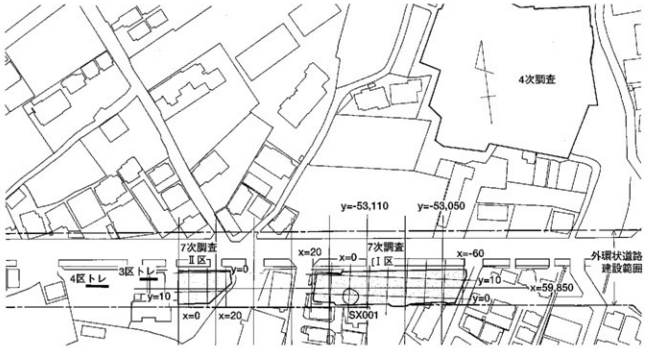


Fig.2　第7次調査区と外環状線建設予定部分（S=1/2000）

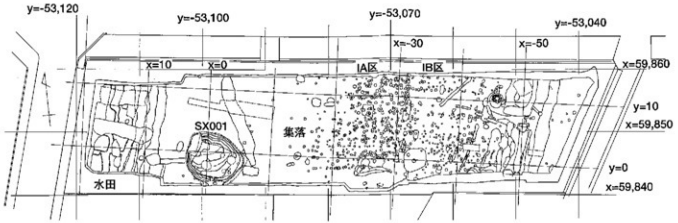


Fig.3　第7次調査IA・IB区調査区概要図（S=1/600）

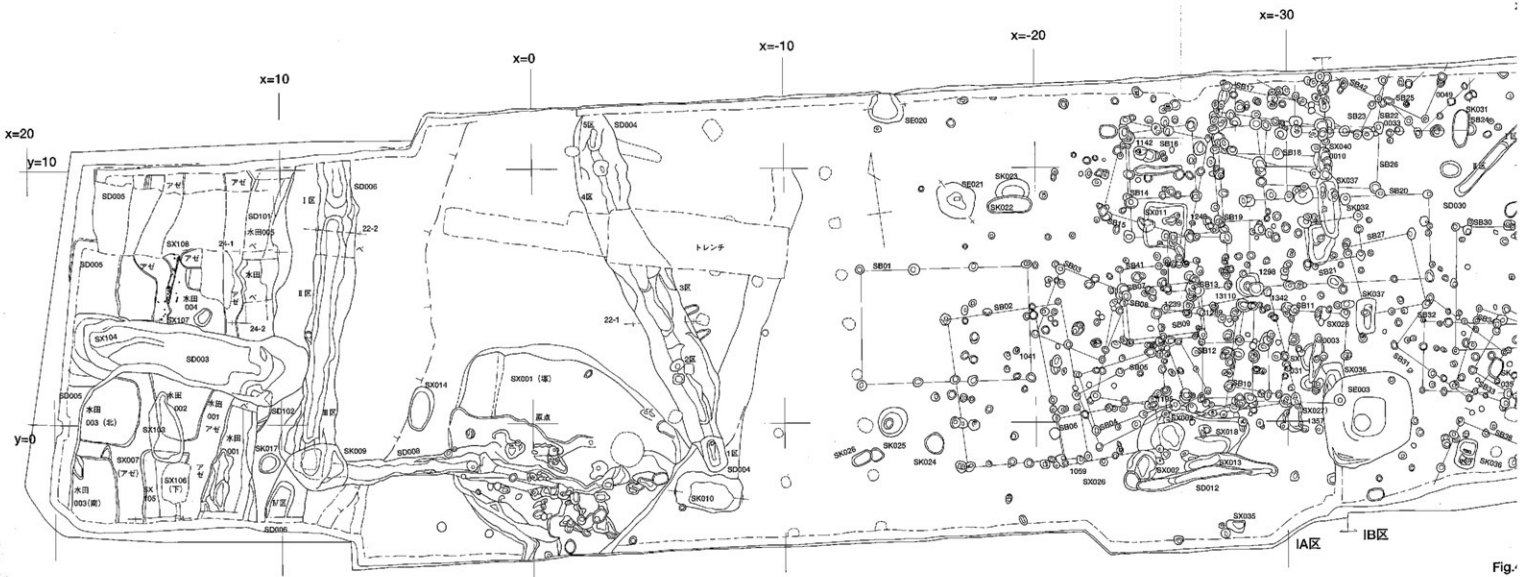


Fig.

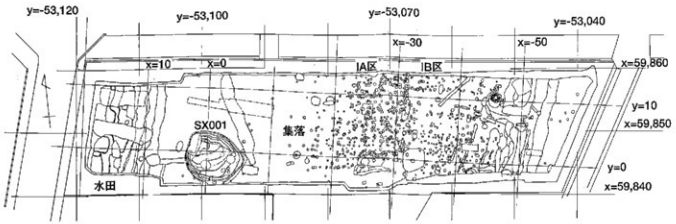


Fig.3　第7次調査IA・IB区調査区概要図（S=1/600）

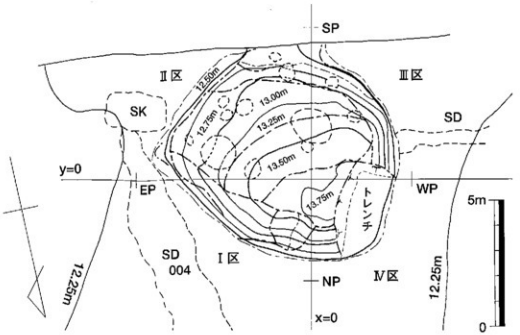


Fig.5　IA区 SX001 現況測量図（S=1/150）

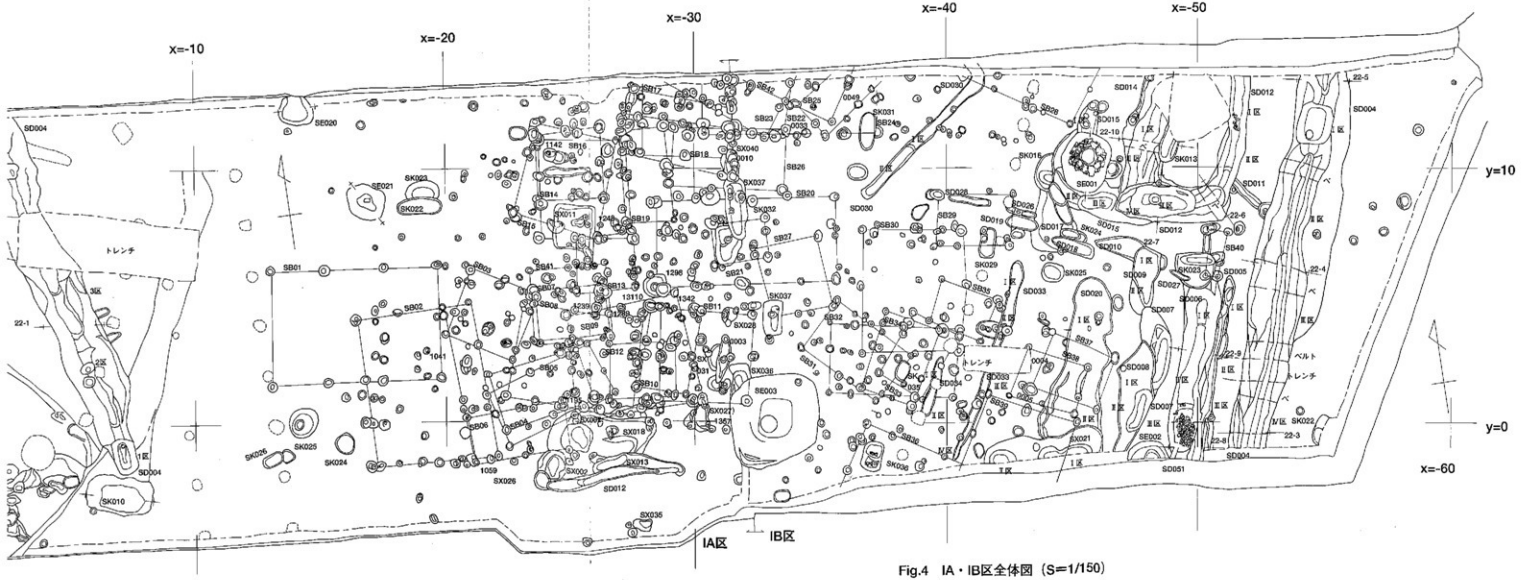


Fig.4　IA・IB区全体図（S=1/150）

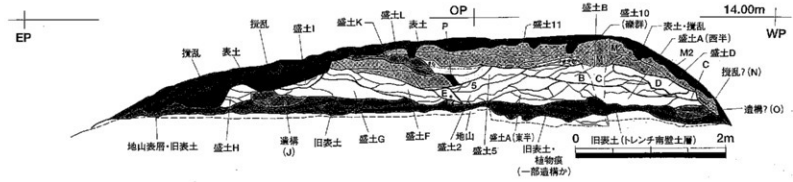


Fig.6　IA区　SX001　東西ベルト土層図（S=1/50）

盛土A群　Fig.7（南北土層）の盛土2群の前段階。にぶい褐色シルトに灰黄褐色粘質シルトブロックを含む盛土（西半）、またはにぶい黄褐色～にぶい黄橙色シルトの盛土(東半)。西半は砂礫あまり含まず、東半は含む。各層かたくしまる。

盛土B群　盛土2群に続く一連の層群。主ににぶい黄橙色（一部はにぶい黄褐色～明黄褐色）粘質シルト。砂礫多い層と少ない層あり。灰黄褐色粘質シルトブロック含む層多い。一部、黒灰褐色粘土ブロックを少し含む層あり。各層かたくしまる。

盛土C群　盛土B群と一連の層。にぶい橙色～にぶい褐色シルトの各層の盛土。砂礫わずか。各層かたくしまる。

盛土D　灰黄褐色～褐灰色粘質シルト。非常にかたい層。砂礫なし。

盛土E　にぶい黄褐色粘質シルト。砂礫含む。各層かたくしまる。盛土E、F～I群は盛土1群（下部礫群）に続く盛土層群（1群→G群→F群→E群→2群）。

盛土F群　にぶい黄橙色土、にぶい褐色土、にぶい黄褐色土の各層の盛土。砂質～粘質シルト。砂礫多く含む層が多い。各層かたくしまる。

盛土G群　にぶい黄橙色粘質シルト。灰白色粘土ブロックを含む。砂礫、炭粒を含む。各層かたくしまる。

盛土H群　上半は、にぶい褐色シルト土に灰白色粘土ブロックを含む層。下半は、にぶい黄褐色砂質シルト土。上下層とも砂礫を多く含む。各層かたくしまる。

盛土I群　橙色～にぶい橙色砂質シルト。砂礫多く含む（小礫も含む）。各層かたくしまる。

J層群　上層は、明褐色土に砂礫を多く含む層。下半層は、にぶい黄褐色土で砂礫・炭粒を少し含み、灰白色粘土ブロックも含む層。盛土というより途中の遺構覆土か。

盛土K群　盛土9群（Fig.7）に対応か。明黄褐色シルト。各層かたくしまる。炭粒少し含む。砂礫多く含む。

盛土L群　盛土9群上部ないし盛土10群(上部礫群層)に対応。橙色～にぶい橙色砂質シルト。砂礫多く含む。（小）礫を含む。各層かたくしまる。

盛土M群　M1層群は黄橙色～にぶい橙色シルト土（一部は灰白色粘質シルト土）で炭粒を少し含み、砂礫を含む。M2層群は盛土11群の絞まで、にぶい橙色～橙色土、砂礫含み、炭粒を多く含む。各層かたくしまる。

N層群　やや暗いにぶい褐色シルト。褐灰色粘質シルトブロック含む。砂礫多い。

O層群　にぶい褐色粘質シルト。砂礫多く、炭粒少し含む。かたくしまる。遺構覆土か。

P層　黒色、腐食炭化した有機質土。斜め下方に突き刺さっている感じ（Fig.7のP層へ）。

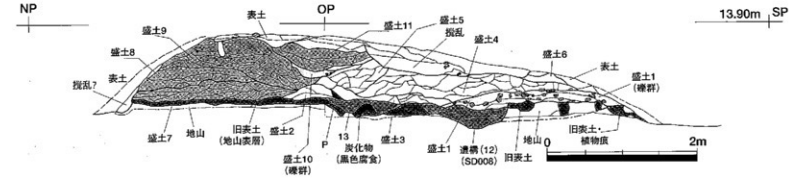


Fig.7　IA区　SX001　南北ベルト土層図（S=1/50）

盛土1群　旧地表面上に盛土。下部礫群を含む層。にぶい黄褐色～灰褐色粘質シルト。遺物を含む。かたくしまる。

盛土2群　にぶい黄褐色土～にぶい黄橙色土（やや粘質のシルト）。かたくしまる。P層はFig.5のP層の絞まで、木質の炭化層（枕状）。

盛土3群　にぶい橙色土、ないし（にぶい）褐灰色～灰褐色土、一部は明黄褐色土の各層。粘質シルト、一部砂質気味のシルト。砂礫含む層が多い。各層かたくしまる。

盛土4群　黄褐色～にぶい黄橙色土、ないし灰褐色土～褐灰色色土、一部は明褐色土の各層。主に粘質シルト。各層かたくしまる。砂礫含む層と含まない層あり。

盛土5群　にぶい褐色土、明褐色土、（にぶい）黄褐色土の各層。主に粘質シルト。各層かたくしまる。砂礫含む層が多い。炭粒少し含む層やや多い。しまりあり。

盛土6　にぶい黄褐色～にぶい黄橙色粘質シルト土。

盛土7群　主に、にぶい褐色粘質シルト土（一部は砂質シルト土）。砂礫含む層が多い。しまりあり。一部は、にぶい橙色土の層。

盛土8群　主に、にぶい褐色土、粘質シルト土層と粗砂礫の混じる砂質土層が混在。砂礫含む層が多い。各層かたくしまる。

盛土9群　にぶい褐色土、にぶい黄褐色土、にぶい橙色土の各層。砂質シルト～中間的なシルト土。砂礫含む層が多く、砂礫多い層がやや多い。各層かたくしまる。一部に灰白色粘土ブロックを含む。

盛土10群　上部礫群を含む層（10層群の上端面に礫を多く含む）。にぶい黄褐色～明黄褐色粘質シルト。遺物を含む。しまりあり。

盛土11群　上部礫群を埋めた層群。明黄褐色土ないし、にぶい褐色土、一部はやや暗いにぶい黄橙色土の各層。砂質シルト～粘質シルト。しまりあり。砂礫やや多く含む層と含まない層が混在。

12層群　SX001下部遺構SD008の覆土。灰褐色粘質シルト、一部は褐色土ないしにぶい黄褐色土シルト。しまりあり。砂礫は含むが少ない。

13層群　灰黄褐色土、にぶい黄橙色土の各層。一部は黒褐色土。炭化有機物黒色土層を含む。

旧表土・地山表層　主に灰褐色～にぶい黄橙色粘質シルト。下部の地山層よりわずかに暗く、にぶい色調。しまりあり。

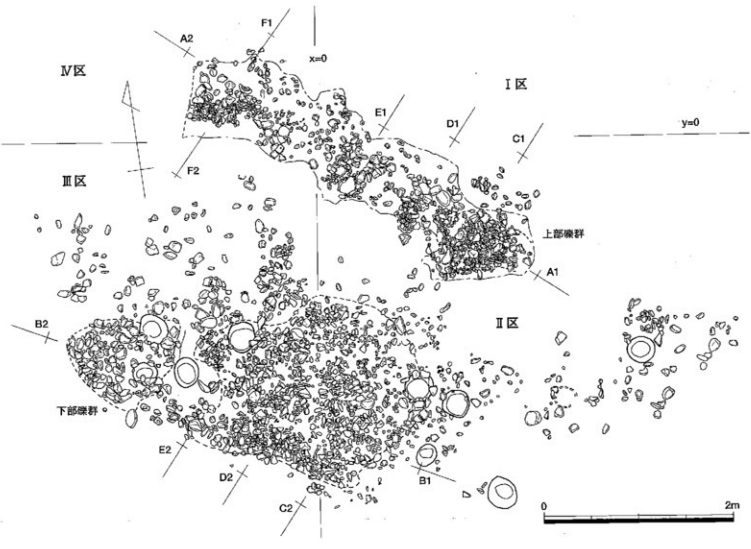


Fig.8　IA区　SX001（塚）礫群平面図（S=1/40）

Fig.7 IA区 SX001 南北ベルト土層図（S=1/50）

盛土1群　旧地表面上に盛土。下部礫群を含む層。にぶい褐色～灰褐色粘質シルト。遺物を含む。かたくしまる。

盛土2群　にぶい黄褐色土～にぶい黄橙色土（やや粘質のシルト）。かたくしまる。下層はFig.6のP断の結まで、木質の炭化層（粒状）。

盛土3群　にぶい褐色土、ないし（にぶい）褐灰色～灰褐色土、一部は明黄褐色土の各層。粘質シルト～砂質質味のシルト。砂礫含む層が多い。各層かたくしまる。

盛土4群　黄褐色～にぶい黄褐色土、ないし灰褐色土～褐灰色色土、一部は明褐色土の各層。主に粘質シルト。各層かたくしまる。砂礫含む層と含まない層あり。

盛土5群　にぶい褐色土、暗褐色土。（にぶい）黄褐色土の各層。主に粘質シルト。各層かたくしまる。砂礫含む層が多い。炭粒少し含む層やや多い。しまりあり。

盛土6　盛土7群　にぶい黄褐色～にぶい黄橙色粘質シルト上下に、にぶい褐色粘質シルト土（一部は砂質シルト土）。砂礫含む層が多い。しまりあり。一部は、にぶい褐色土の層。

盛土8群　主に、にぶい褐色土、粘質シルト土層と褐砂礫の混じる砂質土層が混在。砂礫含む層が多い。各層かたくしまる。

盛土9群　にぶい褐色土、にぶい黄褐色土、にぶい橙色土の各層。粘質シルト～弁質的なシルト土。砂礫含む層が多く、砂礫多い層がやや多い。各層かたくしまる。一部に灰白色粘土ブロックを含む。

盛土10群　上部礫群を含む層（10層群の上端面に礫を多く含む）。にぶい黄褐色～明黄褐色粘質シルト。遺物を含む。しまりあり。

盛土11群　上部礫群を埋めた層群。明黄褐色ないし、にぶい褐色土。一部はやや暗いにぶい黄橙色土の各層。砂質シルト～粘質シルト。しまりあり。砂礫やや多く含む層と含まない層が混在。

12層群　SX001下部遺構SD008の覆土。灰褐色粘質シルト。一部は褐色土ないしにぶい黄褐色上シルト。しまりあり。砂礫は含むが少ない。

13層群　灰質褐色土、にぶい黄橙色土の各層。一部は黒褐色土。炭化有機物質色土層を含む。

旧表土・地山表層　主に灰褐色～にぶい黄橙色粘質シルト。下部の地山層よりわずかに暗く、にぶい色調。しまりあり。

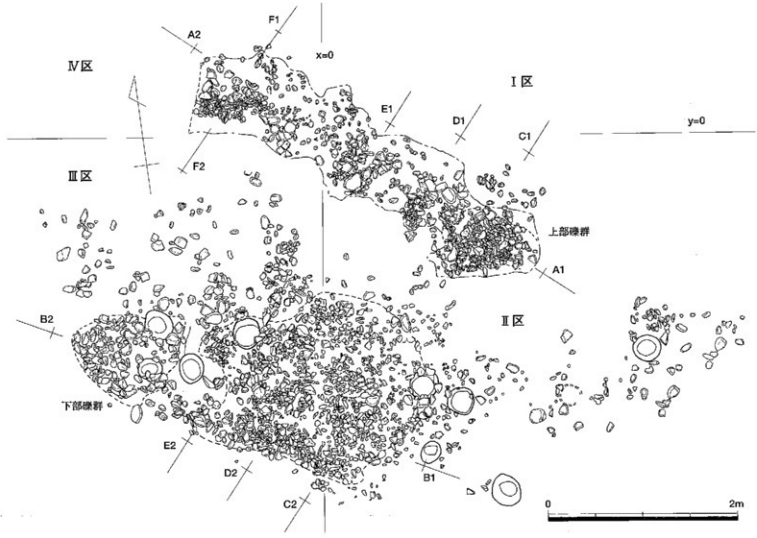


Fig.8 IA区 SX001（塚）礫群平面図（S=1/40）

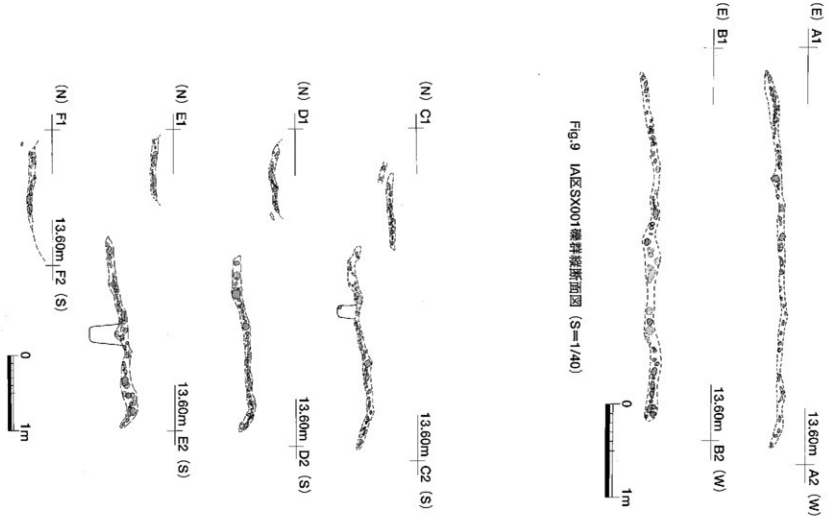


Fig.9 IA区SX001礫群縦断面図（S=1/40）

Fig.10 IA区 SX001 礫群横断面図（S=1/40）

墳時代前期中頃の集落（竪穴住居、方形区画溝、掘立柱建物）、飛鳥時代から平安時代初期までの溝・テラス状遺構、中世前期（12～14世紀）と中世末期～近世前期（16世紀後半～17世紀）の集落（掘立柱建物、溝、土坑など）を確認した（市報第527集）。弥生時代後期後半～終末の鍛冶（鉄器生産）遺物群が注目される。古墳時代前期の方形区画溝は、近接する**和田B遺跡群**第１次調査A区の前期古墳群（「野多目台」市報第413集）の首長層の居館であろう。また16～17世紀の集落は、本報告の第7次調査の集落と連続するものであり、遺構や出土遺物の様相が類似する。**第６次調査**は、中世前期（13世紀前後）の集落（掘立柱建物、溝、土壙墓、集石遺構）、旧石器時代後期（細石器刃文化期）の遺物を確認した（市報第603集）。また、第７次調査とは旧地形の谷部をはさんで南南東に位置する**野多目Ｄ遺跡群**第１次調査（野多目古屋敷遺跡）では、古代の溝（杭列、井堰）、17世紀の溝を確認した（市報第103集）。溝からは遺構の時期ではないが５～７世紀の各時期の須恵器が出土している。また、17世紀の遺物の様相は本報告の集落のそれに近い。

（注）福岡市埋蔵文化財調査報告書第609集『野多目遺跡５』表５に記す「第５次調査」は周辺の別の遺跡群の調査の誤りであり、今回の「第７次調査」は実は６回目の調査である。したがって「第５次調査」は欠番とする。

第２章　調査の記録

１．調査の経過

平成12年５月22日より、ＩＡ区の重機による表土掘削（～５月26日）から発掘調査を開始した。５月26日からはⅡ区の表土掘削と廃土搬出を６月１日まで行なった（Ⅱ区の廃土は現場から300m西の、外環状線道路建設予定地調査不要区にトラックで移動した）。５月25日には調査機材の搬入を行なった。５月末から作業員によりＩＡ区の遺構検出を行ない、現場作業を開始した。６月１日からは野多目小学校設置の水準点からのレベル移動と、ＩＡ区の測量杭設置を行なった。６月12日には、平成11年度に未試掘であった、２区より西側の「３区」、「４区」について試掘調査を行なうが（Fig.２）、地山面が深く、削平により遺構が存在しないことを確認した。３・４区ともに現状GLから地山まで２mないし３m前後あり、近世以降に谷部を埋め立てたものと判断した。ここまでは比較的順調であったが、６月中旬以降、８月初旬までは断続的に雨の多い日が

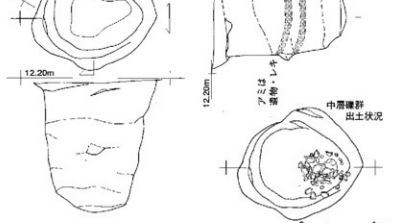


Fig.11　IA区 SE021 実測図（S=1/50）

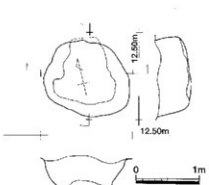


Fig.12　IA区 SE020 実測図（S=1/60）

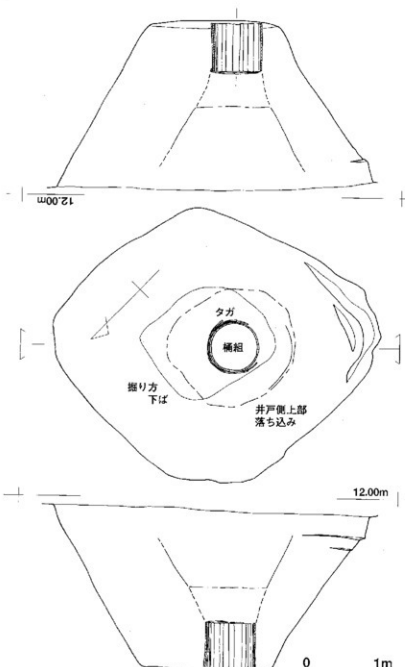


Fig.13　IB区 SE003 実測図（S=1/50）

続き、調査区の水はけが悪く、全面が湛水状態になることがたびたび重なり（PL.1-3）、調査の進行に支障を生じた。また、ⅠA期東側の柱穴群が予想以上に濃密であったこと（PL.1-1）、またⅠA区SX001が性格不明であったため調査に慎重を期した上に、2層にわたり礫群が存在したためにその記録作業に時間を要した（図版屏2参照）。ただし、1A区の調査では、建物の抽出を目的に柱穴を全て半截して土層を観察したが、このことも工程を遅らせる理由の一つになった。これらのために、当初はⅠA区の作業を8月上旬に終了させ、Ⅰ区の反転を8月中旬までには行なう予定であったが、ⅠA区の全景空撮（写測エンジニアリング株式会社に委託）を行なったのは8月4日となった。

その後、全体の平面図作成等の記録作業や、SX001の礫群の取り外しと下層遺構の調査、さらにはⅠA区西側の湛水施設を新たに下層から検出したために、さらに作業時間を要することになり、ⅠA区の埋戻しとⅠB区の表土掘削を行なったのは8月18日から8月29日である（ⅠA区西側湛水施設とSX001下部遺構の調査のためにⅠA区の埋戻しをこの途中で中断している）。Ⅱ区の調査は、ⅠA区の調査に集中していたため、表土掘削以来ほとんど中断していたが、8月末に再開し、9月13日には全景を撮影し、9月18日から19日にかけて埋戻した。ⅠB区の調査は、8月下旬より開始したが、調査終了予定の9月末日まで時間が無く、調査工程に危惧を生じた。幸い、遺構密度はⅠA区東側の続きで比較的濃密であったが、柱穴の深さの残存度がⅠA区よりも悪く、また遺構の半截は必要最小限にとどめて掘削作業が早く進行し、また図面作成についても、埋蔵文化財課の同僚職員や他の外環状線現場従事の発掘調査員の応援を得ることができたため、さらには休日の一部も作業を行ない、天候にも恵まれたの

で何とか予定期日に間に合う見通しとなった。9月21日には全景の空撮を行ない、9月25日には遺構精査や記録などの作業を終了した。9月28日には現場と調査事務所の機材の撤収を行ない、同日から9月29日にかけてⅠB区を埋戻して全ての作業を終了した。

2．調査の概要

調査は、野多目小学校（第1次調査地点）の東側になる85m長のⅠ区と、野多目小学校北門の西側30m長のⅡ区に分かれる（Fig.2）。Ⅰ区は廃土処理の都合上、反転して調査した（西半をⅠA区、東半をⅠB区）(Fig.3)。Ⅱ区は表土掘削の廃土を搬出し、一度に全面を調査している(Fig.67)

ⅠA区（Fig.4左半）は、その西側（SD006とSX001の間の地山地形傾斜変換線から西）は旧現地表が高く（道路面と同じ）、GL－100cm強の客土下に近年の旧水田層があり、その下のGL－130～150cm前後で、旧河道谷と考えられるシルト・砂の落込みを検出したが、その堆積土面に水田、溝状遺構などを検出した。またその下部から、杭列・井堰遺構や、竹を裁断加工し厳状に組んだ護岸遺構（SX105）などの灌漑関連施設を検出した。なお遺構検出面はⅠA区中央から西側にかけて標高が低くなる。ⅠA区中央から東半では（巻頭図版2）、現地表が周囲の道路面より1m前後低く、周囲の水田と同レベルであったが、近年の水田耕作土・床土の直下のGL－30cm前後で明黄褐色シルト（調査区中央）または礫混じりの明灰色砂質シルトの地山（東側）となり、この上面で多数の遺構を検出した。ⅠA区中央西側（SX001とSD004を中心とした部分）では、溝状遺構、柱穴、土坑を検出した。また、調査前から水田中に島状に存在した径10m弱、高さ1.2mの塚状遺構SX001があったが（Fig.5）、近世前期（17世紀中頃）から近世中期（18世紀）にかけて形成された人工盛土遺構であることが判明した。また南北溝SD004は集落の西限であろうが、この外側にSX001がある。ⅠA区東半（SB01から東）では、多数の柱穴、溝状遺構、土壙20基以上、井戸を検出した（PL.1-

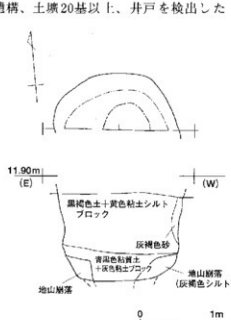


Fig.14 IB区 SE002 実測図（S=1/50）

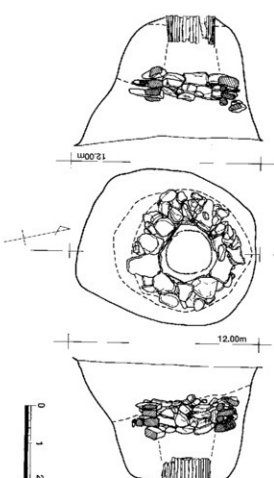


Fig.15 IB区 SE001 実測図（S=1/50）

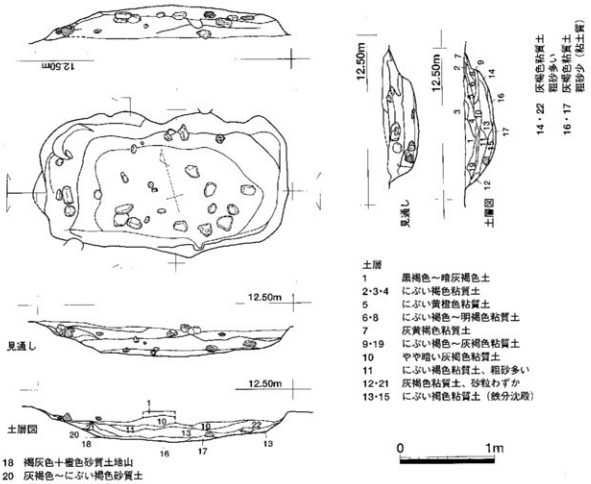


Fig.16 IA区 SK010 実測図（S=1/40）

1)。柱穴群からの建物の復元は柱穴が多すぎてかえって困難だが、同様な位置の柱筋に柱穴が重複するものが多く、建替が考えられるものがある。調査中の検討と整理時の図上復元によりＩＢ区も含めて40棟以上の建物を復元した。調査区内には同時存在で10棟前後の建物が想定できる。

ＩＢ区（Fig.4右半）は、やはり水田耕作土・床土直下のGL－50～120cm前後で礫混じり灰色シルトないし砂礫層の地山となり（東側に向かって地表下の客土が厚くなる）、この上面でＩＡ区から続く多数の柱穴群、土坑12基前後、溝状遺構15条、井戸３基を検出した（PL.2-1,2）。検出面は東に向かって低くなるが、柱穴はＩＡ区よりも残りが悪く全体的に浅いので、水田開墾時の削平も考えられ、集落存在時の地形を反映するものかは疑問がある。ＩＢ区西半（SD033より西側）では建物を構成する柱穴が多く、東半では溝状遺構や土坑が多い。調査区東縁では南北溝SD004よりも東側は遺構が激減する。集落の東限であろう。ＩＡ・ＩＢ区ともに、ほとんどの遺構は、水田や灌漑施設を含めて16～17世紀のものと考えられる。

Ⅱ区（Fig.67）は、地表下は客土、旧耕作土と続き、その下のGL－0.6～1.0m前後で黄褐色粘質シルト（鳥栖ロームの再堆積？）となり、遺構を検出した。調査区北西部には薄く黒褐色の包含層が認められた。検出した遺構は、柱穴（時期不明が多い、一部古墳時代）、溝状遺構（古墳時代か）、井戸（近世）があり、その他自然遺構として風倒木痕を検出した（PL.7-1）。

3．Ｉ区の検出遺構

以下、ＩＡ区・ＩＢ区に関わりなく、特殊遺構（SX）、井戸（SE）、土坑（SK・SX）、溝状遺構

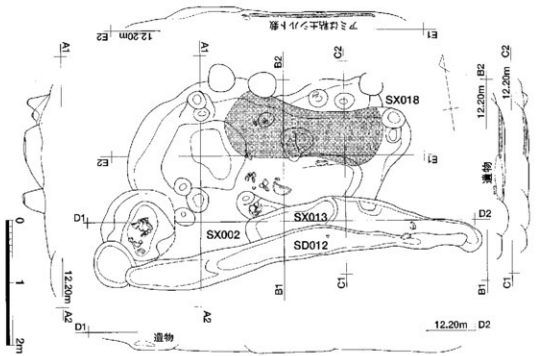


Fig.17　IA区 SX002・SX013 実測図（S=1/60）

（SD）、水田（SS）、灌漑関連遺構（SX）、掘立柱建物（SB）の順に説明する。なお紙幅の関係上、ＩＡ区SX001のみ詳述するが、他の各遺構についての詳しい記述はできないことを申し上げておく。ご寛恕されたい。また、遺構番号は全ての通し番号ではなく、ＩＡ区とＩＢ区は各々別に、また遺構種別ごとに001以下の遺構番号を現場において付加していったので、分かりにくい部分もあるが、調査時における呼称で報告することとする。

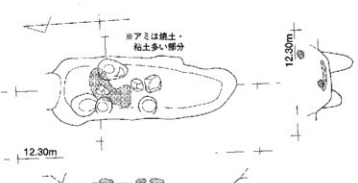


Fig.18　IA区 SX037 実測図（S=1/50）

（1）ＩＡ区SX001（折込みFig.4～10）（図版扉2、PL.2-4～PL.4-3）

ＩＡ区中央西側に調査以前から存在した塚状盛土（PL.2-4）。地山の残丘ともみられていたが、試堀調査時に北西側に重機でトレンチを入れた際に陶磁器や礫が検出されたため調査対象となった（PL.2-7）。水田の中に島状に存在し、8m強×9m強の不整円形をなす。調査時現況地表から1.2m前後の、地山面から1.5m前後の高さである。等高線（Fig.5

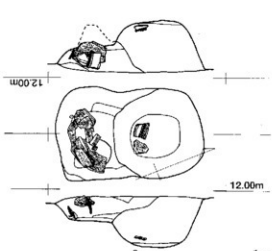


Fig.19　IB区 SK036 実測図（S=1/30）

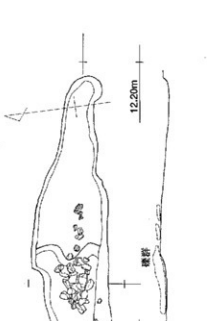


Fig.20　IA区 SX(SD)013 実測図(S=1/50)

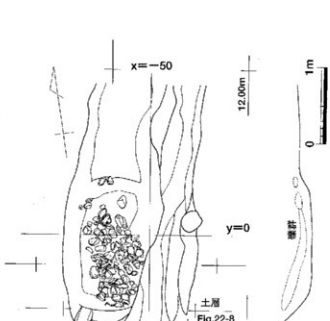


Fig.21　IB区 SD005・SD006-Ⅲ区 実測図(S=1/50)

は表土除去状況）から、南側と西側の斜面が急で、南側が緩やかだが、どちらが本来かは決め難い。下記のように盛土遺構の南北の差によるものとも考えられる。

調査は、盛土据り下げ途中で祭祀施設や埋葬施設が検出されることも想定し、頂部を中心に4区に区分し、古墳の調査に準ずる方法で行なった。表土除去後、「遺構」を検出したが（PL.6-6）、これらは出土遺物や覆土のしまりかたから近世後期以降のものであろう。次にベルトを残して盛土を下げると、頂部から−40cm前後で舟底状に礫が分布する4m＋α長×1m幅の面が広がった（**上部礫群**）。古墳の礫槨のような施設とも考えたが、副葬品らしきものはなく、遺物も破片が礫に混じり若干出土するのみであり、時期が新しいので人骨の痕跡も残ってよいが存在せず、墓ではないと判断した。盛土の構築過程の観察からは（特に南北土層）、新旧の盛土の間を埋めるように礫が敷かれたようである。また、盛土の南半側の盛土基底部、旧表土直上にも礫を敷き詰めた範囲を検出した。この**下部礫群**は、3.8m×1.8mの不整楕円状の範囲（Fig.8の点線内）に礫が集中し、この北−西側と東側では礫が散漫に分布する。遺物の出土状況は上部礫群と同じである。なお上下の礫群は、そのレベル差からも、明らかに別の時期ないし異なる段階での構築である（Fig.9・10）。盛土はいくつかの層群にまとめられるが、全体的によくしまって堅い。大きくは2回の盛土群に分かれ（Fig.6・7）、まずある時期までに下部礫群を基底部として、南側に偏って東西約7m×南北約5mの楕円形か隅丸長方形の塚が築かれ、次のある時期に主に南側に盛土され（途中で上部礫群層を形成）、最終的な姿となったと考えられる。また、周溝は無いが、当初の盛土の際に、南側では地山整形があった可能性がある（北側のわずかな段差は後世の造作よるものか）。なお、出土遺物（Fig.68〜77）については別章で、それらもふまえた本遺構の時期と性格についてはまとめにおいて後述したい。

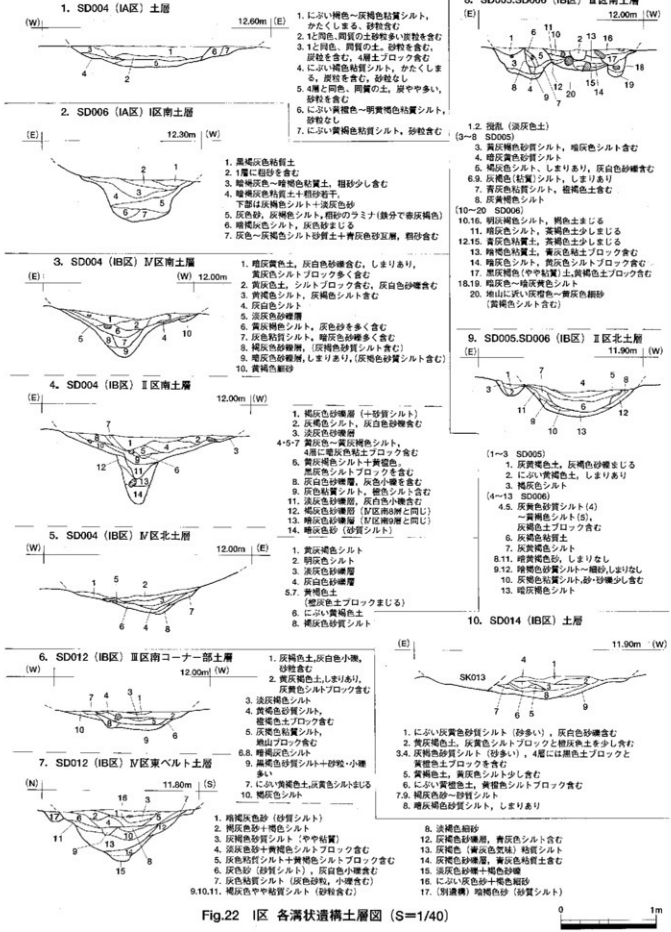


Fig.22 I区 各溝状遺構土層図（S=1/40)

0 1m

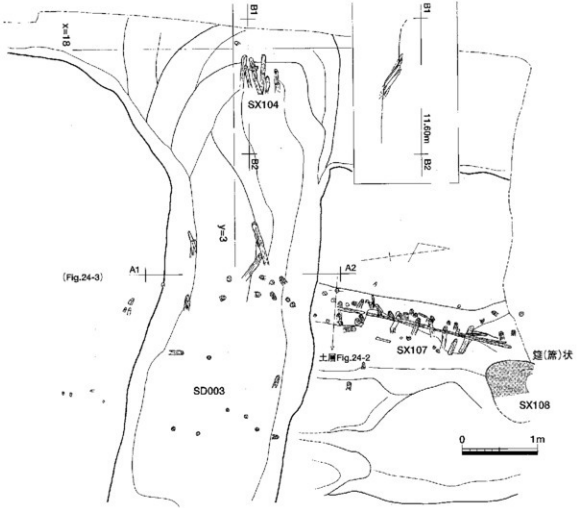


Fig.23 IA区 SD003・SX104, SX107 杭列平面図（S=1/50）

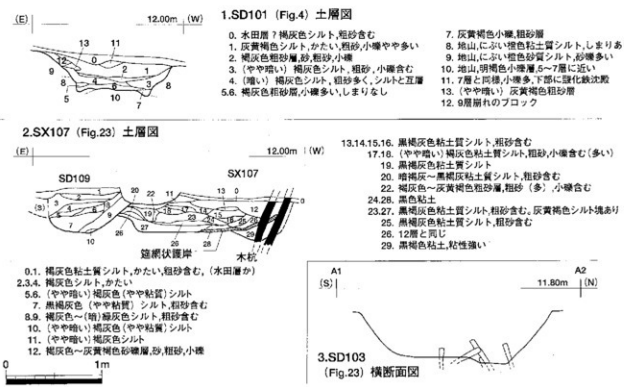


Fig.24 IA区 SD101,SX107・SD109,SD003 土層図・断面図（S=1/40）

（2）井戸（SE）（3～5頁）

・ＩＡ区SE021（Fig.11）（PL.5-1～3）は、径1.6mの不整円形、深さ180cmを測る素掘りの井戸。中層に遺物・礫の集中出土層が2層ある。底面で湧水する。遺物から（Fig.79-197～Fig.82-260）、17世紀中頃の廃棄か。

・ＩＡ区SE020（Fig.12）（PL.4-5）は、径1.4×1.3mの不整円形、深さ60cmを測る素掘りの井戸（？）。他より浅く、湧水わずかであり、井戸ではない可能性あり。鉄製品が出土（Fig.82-229～231）。時期の分かる遺物少ないが、16世紀末頃か。

・ＩＢ区SE003（Fig.13）（PL.4-6・7）は、4.4×3.7mの菱形に近い楕円形、深さ220cmを測る、井戸側が桶組の井戸。かなりの湧水がある。井戸側は最下段のみ残り、桶組周囲に竹材による細いタガを数条巡らす。桶組板材は、幅が5～10cm代とばらつきがある（Fig.87）。遺物の出土は多くない。遺物から（Fig.84-246,247,249,250）、17世紀初頭頃の廃棄か。

・ＩＢ区SE002（Fig.14）は、調査区壁際で検出し完掘できていないが、径1.7mの円形、深さ120cm以上。土層と下部の湧水から井戸であろう。遺物は少ないが、14～15世紀頃の可能性がある。

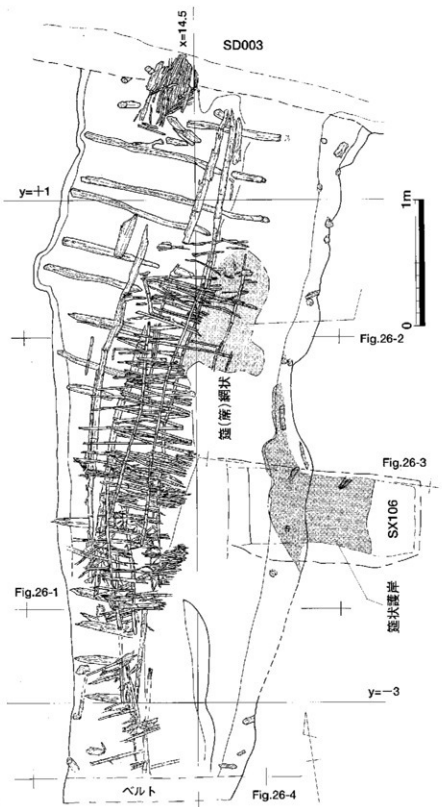


Fig.25　IA区 SX105 平面図（S=1/30）

・ＩＢ区SE001（Fig.15）（PL.5-4、裏表紙写真）は、2.3×2.1mの不整楕円形、深さ170cmを測る、石積桶組の井戸。中層で径1.6mの範囲を多角形状に石を5段に積み、最下部は桶組の井戸側となる。

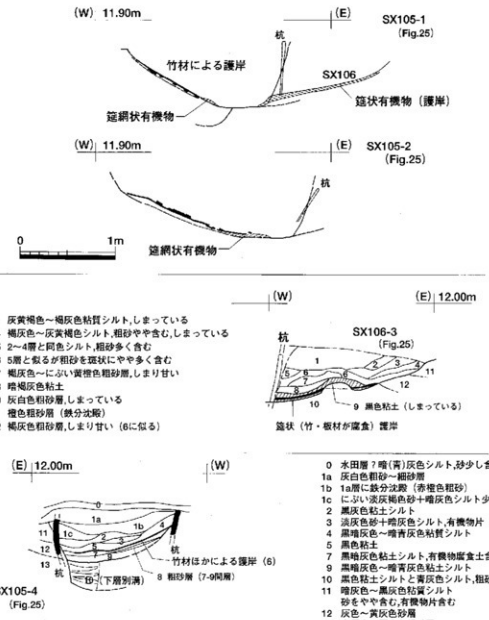


Fig.26　IA区 SX105・SX106断面図・土層図（S=1/40）

湧水が認められる。石積は、上部に石材が若干落込んでいたので、もう数段あったものか。井戸側も、初めから最下部のみであったかは疑問。桶組板はかなり細い幅のものである（Fig.86）。遺物から（Fig.84-240～243,248）、17世紀中頃の廃棄か。

（3）土坑（SK、SX）（Fig.16～19、6～7 f(

・ＩＡ区**SK010**（Fig.16）（PL.5-5・6）は、SX001の東に接し、SD004の南に接する、2.6×1.5mの隅丸長方形、深さ40cmの土坑。墓の可能性も考えたが、礫がまばらに落込み、最下層にもあるが意図的な配置とは思えない。副葬品も無く、板材の痕跡や釘なども無く、少なくとも木棺墓ではない。遺物から（Fig.79-188,189）17世紀中頃の埋没。

・ＩＡ区**SX002**（Fig.17）（PL.5-8）は、4.5×3.0m前後の不整形の土坑。単一の土坑ではなく、複

数の土坑であろうが判別し難かった。少なくとも、西側の径1.2mの円形土坑と、中央から東側の粘土敷の土坑とは異なる。SX013とSD012に切られる。覆土には焼土・炭化物・粘土ブロック・焼礫を含み、遺物も多く、瓦質土器の大きな破片が目立つ。中央から半欠の石臼が出土（Fig.99）。遺物から（Fig.78、Fig.79-177～186）、16世紀後半から17世紀中頃までの幅のある遺構である。

・**ＩＡ区SX037**（Fig.18）は、ＩＡ区東端で検出し、一部ＩＢ区にかかる（ＩＢ区SK032）。2.5×0.8mの隅丸長方形、深さ20cm強。下部の柱穴は伴わない。覆土には焼土・炭化物・粘土ブロック・礫を含む。遺物はやや少なく、時期は不明確だが17世紀前半か。

・**ＩＢ区SK036**（Fig.19）（PL.5-7）は、1.2×0.7mの隅丸長方形、掘方は段掘りで北側の深さは40cmを測る。南側テラス下の柱穴は伴わない。瓦質土器の大甕の破片（Fig.98）などを出土。遺物から（Fig.83-233,235～237）、16世紀後半～17世紀初頃か。

（４）溝状遺構（SD）（Fig.20～22、8～13頁）

・**ＩＡ区SD(SX)013**（Fig.20）（PL.5-9）は、ＩＡ区SX002と重複する、3.8m長、1.0m幅、深さ20cm弱の溝。西半がやや深く、礫が集中するが、あるいは暗渠状の施設か。遺物は少ないが、17世紀前半か（Fig.83-234）。なおSD013を切るＩＡ区**SD012**は、SD013とほぼ重なり（Fig.17参照）、建物群（屋敷地）の区画溝の重複とすることもできる。遺物からもほぼ同時期である。

・**ＩＢ区SD005・SD006**（Fig.21、Fig.22右列上2段）（PL.2-1、PL.5-10）は、ほぼ同方位で重複する溝。重複関係が不明確であったが、SD006の方が新しいと判断した。**SD005**は30～40cm幅、深さ15～30cmを測るが、調査区南側へ延びる。土層の検討から板塀溝の可能性がある。**SD006**は、1.0～1.3m幅、深さ20～50cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形で、調査区南側で立ち上がり長さ７mとなる。南側が土坑状に深くなり（Ⅱ区）、下層上部に礫が集中する。上層から一度は溝浚えされている。遺物は比較的多いが、上層ではSD005も「SD006」として取り上げてしまった。遺物から（Fig.90-298～303、Fig.91-304～310）、17世紀中頃の廃棄・埋没であろう。なお、ＩＢ区**SD004・SD005・SD006・SD007～SD009・SD020・SD033・SD012・SD014**はほぼ同方位であり（磁北－18－25°－E前後）、重複もあるが、ある時期幅の屋敷地の方位を示す可能性が高い。

・**ＩＢ区SD004**（Fig.４右半、Fig.22左列中３段）（PL.2-1・3、PL.5-11）は、ＩＢ区東端を南北に走行し、南北とも調査区外に延びる。1.5～3.0m幅、深さ40～80cmを測り、断面形は場所によるがＹ字形ないし広いＶ字形。北側でやや浅くなる部分がある。上層から一部に掘り直しが考えられる。遺物は比較的多く（Fig.89、Fig.90-296,297）、17世紀前半の遺物が主体で、17世紀中頃の埋没であろう。集落の東限で、集落の廃絶とともに埋没したのであろう。

・**ＩＡ区SD006**（Fig.４左半、Fig.22左列２段）（PL.6-1）は、ＩＡ区SX001と西側の木田部分を画するような溝で、地山緩斜面の中間にある。1.2～2.0m幅、断面逆台形ないし箱形で、深さ40～70cmを測る。北側と南側で陸橋状にやや浅くなる部分がある。覆土は砂、砂質シルトで、水路か。遺物は少なく時期不詳だが、SX001下部のＩＡ区**SD008**と連結し、17世紀前半までのものか。

・**ＩＡ区SD004**（Fig.４左半、Fig.22左列上段）は、磁北－12°－Wの方向で走行する、1.5～2.0m幅、深さ15～30cmの浅くゆるい掘り込みの溝。北側が細くなるのは削平とみられるが、南側は幅50cm前後となり浅い小土坑状となり、SK010の手前で終わる。遺物の出土は散漫で少ない。遺物の時期幅から（Fig.88-270～277）、16世紀末から17世紀中頃の溝であろう。集落の西限か。

・**ＩＢ区SD012**（Fig.４右半、Fig.22左列下２段）（PL.2-1・3）は、L字状に曲がる溝で、南北部分（Ⅰ・Ⅱ区）は、35～50cm幅で浅いが、東西部分（Ⅲ・Ⅳ区）は土坑状に深くなり、70～80cm幅、深さ45～55cmとなる。同様のＬ字状溝SD014を切る。コーナー部外側に、門柱の可能性のある

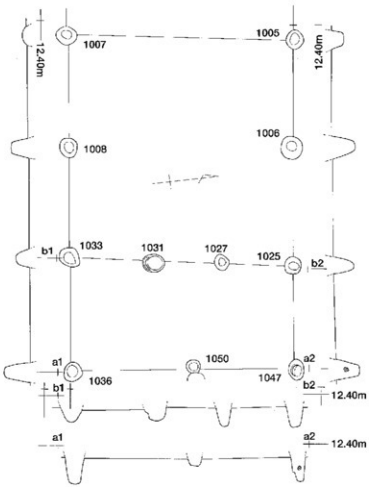


Fig.27 SB01 (S=1/75,1/60)

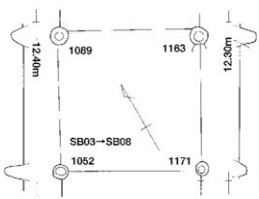


Fig.29 SB03 (S=1/75,1/60)

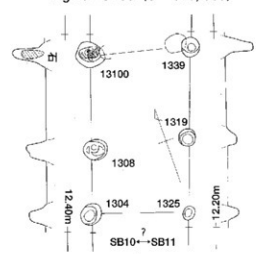


Fig.30 SB10 (S=1/75,1/60)

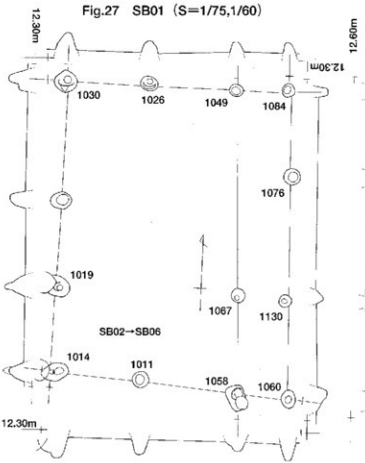


Fig.28 SB02 (S=1/75,1/60)

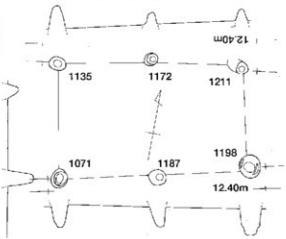


Fig.31 SB04 (S=1/75,1/60)

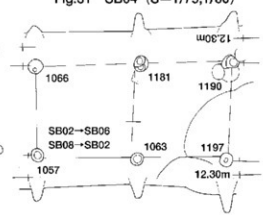


Fig.32 SB06 (S=1/75,1/60)

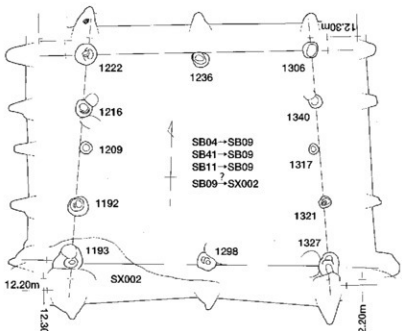


Fig.33 SB09 (S=1/75,1/60)

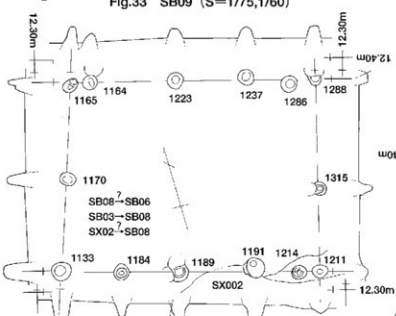


Fig.34 SB08 (S=1/75,1/60)

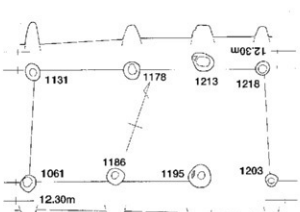


Fig.35 SB05 (S=1/75,1/60)

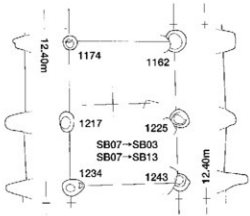


Fig.36 SB07 (S=1/75,1/60)

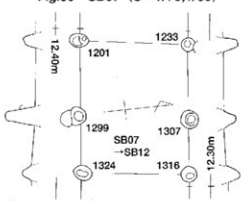


Fig.37 SB12 (S=1/75,1/60)

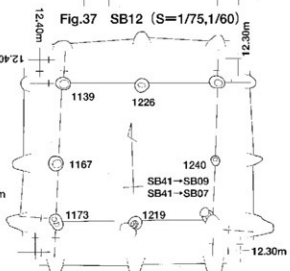


Fig.38 SB41 (S=1/75,1/60)

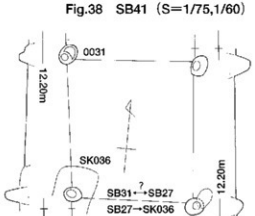


Fig.39 SB27 (S=1/75,1/60)

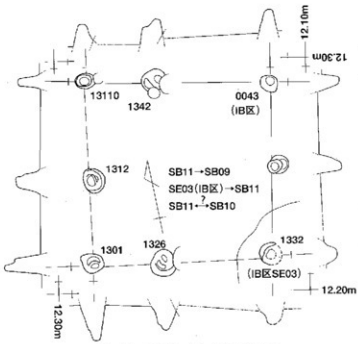


Fig.40 SB11 (S=1/75,1/60)

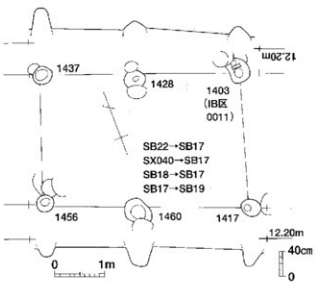


Fig.43 SB17 (S=1/75,1/60)

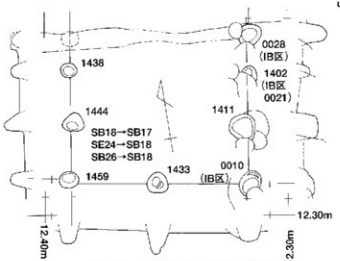


Fig.41 SB18 (S=1/75,1/60)

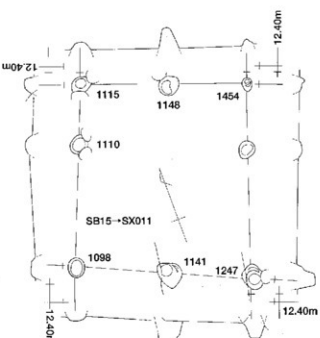


Fig.44 SB15 (S=1/75,1/60)

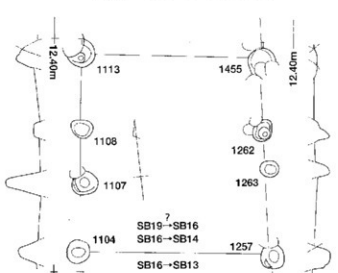


Fig.42 SB16 (S=1/75,1/60)

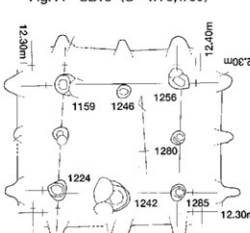


Fig.45 SB13 (S=1/75,1/60)

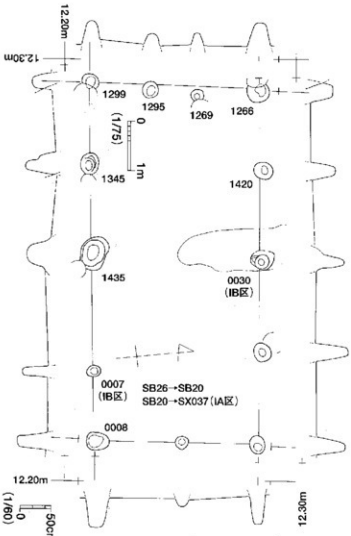


Fig.46 SB20 (S=1/75,1/60)

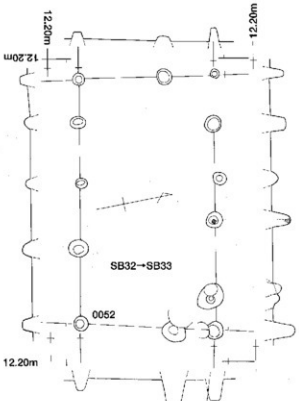


Fig.48 SB32 (S=1/75,1/60)

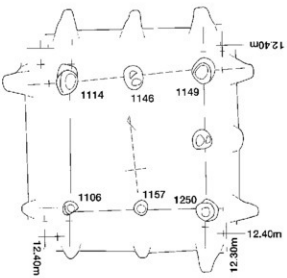


Fig.49 SB14 (S=1/75,1/60)

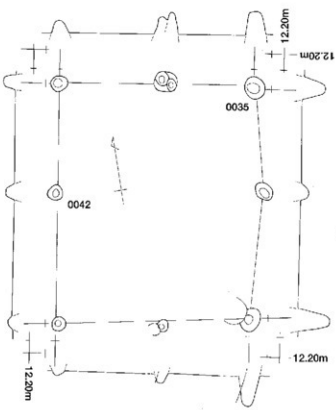


Fig.47 SB30 (S=1/75,1/60)

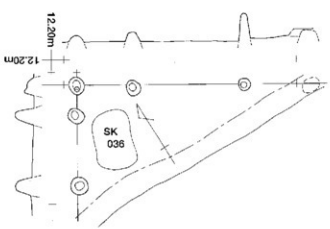


Fig.50 SB36 (S=1/75,1/60)

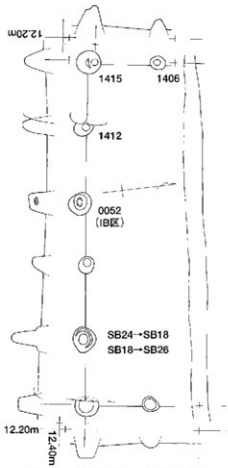


Fig.51 SB24 (S=1/75,1/60)

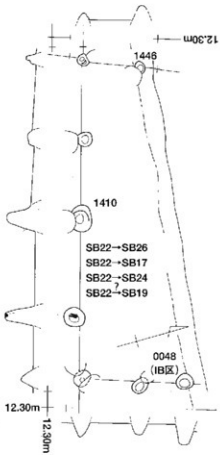


Fig.52 SB22 (S=1/75,1/60)

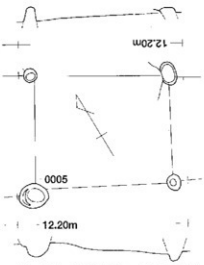


Fig.55 SB37 (S=1/75,1/60)

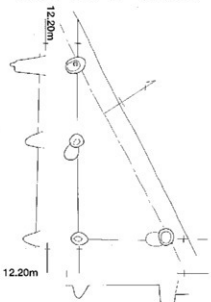


Fig.56 SB42 (S=1/75,1/60)

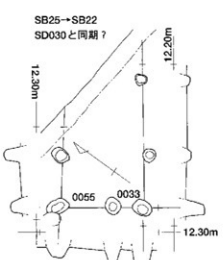


Fig.53 SB25 (S=1/75,1/60)

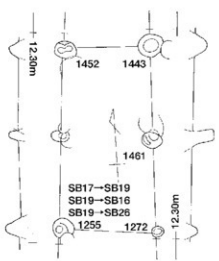


Fig.54 SB19 (S=1/75,1/60)

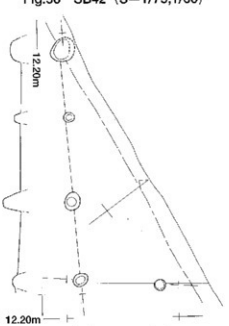


Fig.57 SB28 (S=1/75,1/60)

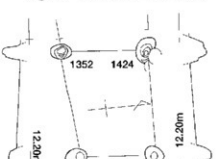


Fig.58 SB21 (S=1/75,1/60)

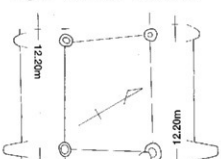


Fig.59 SB35 (S=1/75,1/60)

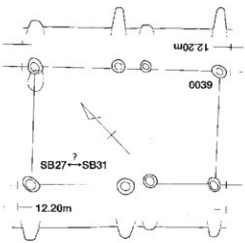


Fig.60 SB31 (S=1/75,1/60)

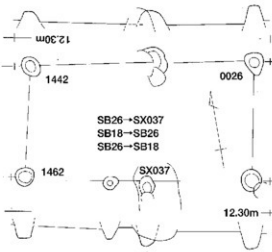


Fig.61 SB26 (S=1/75,1/60)

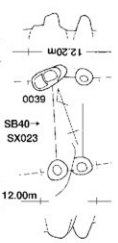


Fig.62 SB40 (S=1/75,1/60)

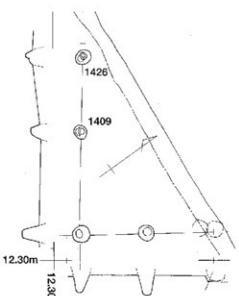


Fig.63 SB23 (S=1/75,1/60)

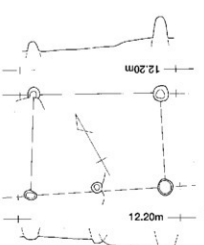


Fig.64 SB38 (S=1/75,1/60)

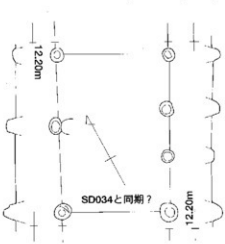


Fig.65 SB34 (S=1/75,1/60)

SB40があり、SB40はSD012南北溝部分の延長方向のSD006と挟まれ、集落縁辺の複雑な入口部分を示すか。遺物は比較的多く(Fig.92-316～324、Fig.93-325～330)、17世紀前半～中頃。

・ＩＢ区SD014（Fig.4右半、Fig.22右列下段）（PL.2-1）は、ＩＢ区SD015と連結し、SD012と同様なL字状溝となる（SD015-Ⅰ区は別遺構か）。1.5～2.0m幅、深さ15～30cmを測る。SD012とSK013に切られ、SD015と同一ならばSE001にも切られている。南北溝部分（SD014）の延長方向に間をおいてＩＢ区SD020がある。遺物から（Fig.93-331～333）、16世紀末～17世紀前半であろう。

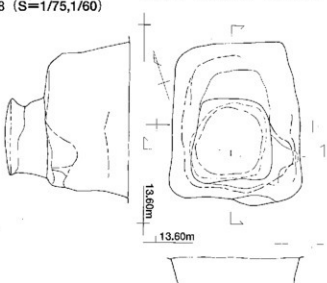


Fig.66
Ⅱ区 SE003実測図
(S＝1/60)

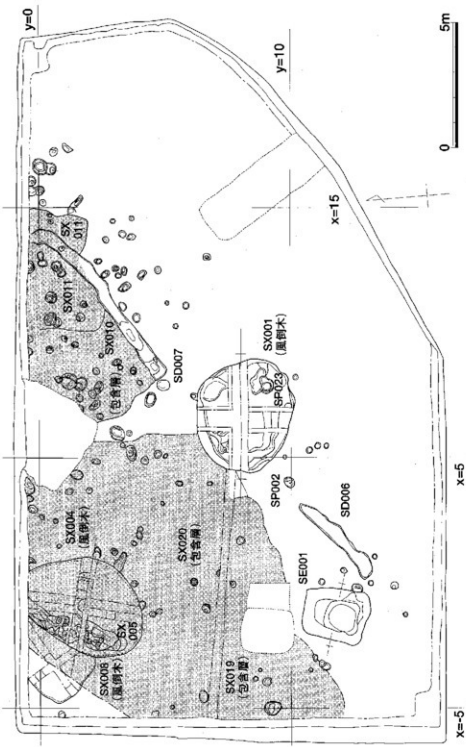


Fig.67　Ⅱ区全体図（S=1/150）

・ＩＢ区**SD030**（Fig.右半）（PL.2-2）は、15～27cm幅で、削平によりきわめて浅い溝。調査区北縁で曲がるようである。SB25と同方位（磁北－54°－E）でこれを囲む区画溝であろう。遺物は少なく、時期不明だが、他の溝や建物と方位を異にし、やや古いものか。

・ＩＢ区**SD033**（Fig.4右半）（PL.2-2）は、15～25cm幅で、削平によりきわめて浅い、8m長の溝。磁北－26°－Eで、SB37、SB38、SB39（重複関係）、SB34、SB35等と方位がほぼ一致する。遺物少なく、時期不詳だが方位の類似からＩＢ区SD004やSD006等と近い時期であろう。

・**ＩＢ区SD007～009**（Fig.4右半）（PL.2-1）は、ほぼ同方位で切り合う連続土坑状の溝。いずれも浅い溝でSD009とSD008は最深10cm、SD007は最深16cm程度。遺物から（Fig.91-311～31、Fig.92-314～315）、17世紀初頭～中頃の遺構の重複。

・**ＩＡ区SD020**（Fig.4）（PL.2-2）は、上記のSD007－SD009とSD033に挟まれた部分にある溝。1.2～2.5m幅と広いが、プランが不整形で、きわめて浅く（最深16cm）、底面が一定しないので、溝と言うよりは地山の凹みの整地層の可能性がある。中央の覆土に炭化物が多い部分がある。遺物から（Fig.94-334～339）、16世紀末～17世紀初頭か。また南側のＩＢ区**SX021**は、SD020を切るが、不整形で底面が一定せず全体に浅いことなど様相が類似し、連続する整地層の可能性がある。

（５）水田および灌漑関連遺構（Fig.23～26、10～12頁）

・**ＩＡ区水田（SS001～004）**（Fig.4左半）（PL.6-2）は、ＩＡ区西側で検出した。畦畔の残りが悪

く、また水田耕作土層も薄くしか残らない部分が多かったため、下層の溝などを掘り進めてしまったところもある。検出した水田は、ＩＡ区SD003・SD005に切られ、SD101やSX105・SX106護岸遺構より新しい。水田区画は南北に長い狭小な小区画であり、谷部地形に合わせたものであろう。これらが水田であることについては、**SS003**や**SS001**において砂の入った足跡や稲株痕跡があること、花粉分析と植物硅酸体分析の結果（自然科学分析の章を参照）から明らかである。なおSS001は、他の区画に比べてやや低く、凹凸が顕著であるので、一枚下層の面を検出した可能性がある。時期は不明だが、**ＩＡ区SD006**との方位の一致からこれと同時期で、東側の集落（16世紀後半～17

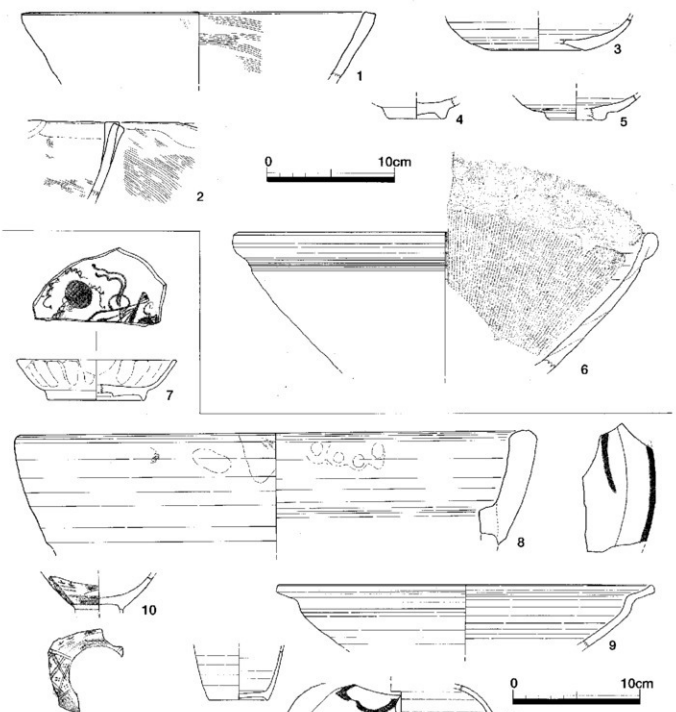


Fig.68　IA区 SX001出土遺物（１）（S=1/3）

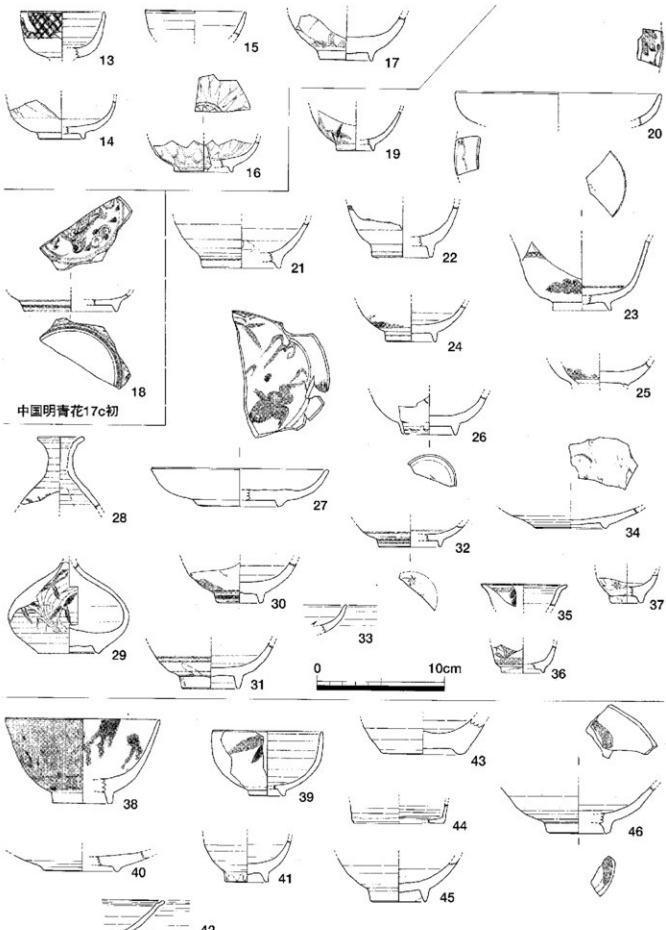


Fig.69 IA区 SX001出土遺物（2） (S=1/3)

表1．Fig.68出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
1	330	ⅠA	SP1505 (SX001)		瓦質土器・捏鉢	(28.0)			(5.3)	精良・やや軟質	10YR8/3浅黄橙		
2	171	ⅠA	SP1058 (SX001)		土師質土器・片口捏鉢				(6.1)	2㎜程度の石英・長石を少量含む・精良	10YR5/4～7/4鈍い黄橙		
3	318	ⅠA	SP15027 (SX001)		肥前系陶器・鉢			(7.3)	(2.6)	10YR4/8赤褐・やや粗	灰茶色不透明釉		
4	317	ⅠA	SP1501 (SX001)		陶器・碗			4.7	(1.65)	10YR8/3浅黄橙・精良・やや軟質	10Y9/1灰白透明釉・氷裂		
5	316	ⅠA	SP1436?		肥前系陶器Ⅱ期・皿			(4.7)	(2.05)	2.5Y8/2灰白・やや粗	2.5Y8/2灰白不透明釉・やや緑っぽい	17c前	
6	040	ⅠA	SX001Ⅲ区下層礫土中		肥前系陶器Ⅳ期・擂鉢	(33.7)			(10.85)	10YR8/3浅黄橙・やや粗い	2.5YR3/3暗赤褐～2.5YR5/4鈍い赤褐不透明釉(土灰釉)	17c末～18c初	
7	050	ⅠA	SX001	Ⅰ区礫層下	肥前系染付磁器・輪花型皿	(12.6)		(7.7)	3.2	5Y8/1灰白・精良	2.5GY8/1灰白透明釉厚くかかる・大きく氷裂	18c	
8	7	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区上部礫群下	陶器・土管?	(41.3)			(9.1)	5YR5/4鈍い橙・精良だが大きめの砂粒をわずかに含み軟質	5YR2/3極暗赤褐不透明釉	18c?	
9	144	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下部礫群中	肥前系陶器Ⅳ期・[illegible]鉢	(30.0)			(5.0)	5YR6/6橙・精良・外面釉下白化粧	外7.5YR5/2灰褐半透明釉　内2.5YR5/2灰黄透明釉・氷裂	17c末～18c	
10	037	ⅠA	SX001内SX007	上～中層	肥前系染付磁器・碗			4.0	(2.85)	2.5Y8/1灰白・精良	灰白色透明釉	18c?	山水文
11	179	ⅠA	SX001	表土?	肥前系白磁・[illegible]			4.6	(4.0)	N8灰白・精良	青味を帯びた灰白色透明釉	18c前～中	
12	023	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	肥前系染付磁器・段重	(15.3)	受部(17)		(3.05)	N8灰・精良	灰白色透明釉		

表2．Fig.69出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
13	189	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半下部礫群	肥前系染付磁器・丸碗	(6.6)			(3.7)	N8明灰・精良	明灰色透明釉	18c	斜格子文
14	131	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半下部礫群	肥前系染付磁器・丸碗			(3.7)	(3.1)	N7明灰・精良	7.5Y8/1灰白不透明釉	18c	
15	056	ⅠA	SX001	Ⅰ区盛土礫群	肥前系染付磁器・丸碗	(7.9)			(2.1)	N8灰白・精良	5GY8/1灰白透明釉	18c	
16	035	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	肥前系染付磁器・丸碗			(4.7)	(2.6)	5Y8/1灰・精良	5YG7/1オリーブ灰透明釉・細かく氷裂	18c前	二重網目文
17	124	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半礫群中	肥前系染付磁器・丸碗			4.2	(3.65)	7.5Y8/1灰白・精良	5GY8/1灰白透明釉・大きく氷裂	17c後～18c?	草花文
18	061	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土礫群上	染付磁器(青花)・皿			(7.4)	(1.4)	7.5Y8/2灰白・精良	青っぽい灰色透明釉・外面細かく発泡	17c初	龍? PL.7-3
19	029	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	肥前系染付磁器・丸碗			(3)	(3.2)	N8灰白・精良	灰白色透明釉	17c後?	草花文
20	012	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区上部礫群下	肥前系染付磁器・鉢	(16.4)			(2.6)	10YR8/1灰白～5YR7/4鈍い橙	2.5Y8/2灰白透明釉・外面は二次焼成を受け剥がれる	17c後	草花文
21	022	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	肥前系染付磁器・碗			(6.3)	(3.8)	7.5Y8/1灰白・精良	7.5GY8/1明緑灰透明釉	17c後	
22	110	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区上部礫群東・Ⅲ区礫群中	肥前系染付磁器・丸碗			(4.9)	(4.15)	2.5Y8/1灰白・精良	5Y7/1灰白透明釉	17c後	
23	027	ⅠA	SX001	Ⅱ区盛土中	肥前系染付磁器・碗			(4.7)	(5.6)	5Y8/1灰白・精良	10Y7/1灰白透明釉	17c後	山水文
24	081	ⅠA	SX001	Ⅱ・Ⅲ区	肥前系染付磁器・丸碗			4.0	(3.0)	2.5Y8/1灰白・精良	2.5GY8/1灰白透明釉	17c前?	山水文?
25	130	ⅠA	SX001	南北ベルト(南)下部礫群	肥前系染付磁器・碗			(4.6)(高台部)	(2.05)	N8灰白・精良	2.5GY8/1灰白透明釉	17c後～18c	山水?
26	113	ⅠA	SX001	Ⅱ・Ⅲ区礫群集中	肥前系染付磁器・丸碗			(4.4)	(3.2)	N8灰白・精良	7.5GY8/1明緑灰透明釉	17c中～後	
27	072	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群A集中(下部)	肥前系染付磁器・皿	(14)		(6.7)	3.0	7.7Y8/1灰白・精良	7.5GY8/1明緑灰透明釉・大きく氷裂	17c	呉 PL.7-4
28	062	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土(礫群上)		3.6			(5.75)	2.5Y8/2灰白・精良	青っぽい灰色透明釉・大きく氷裂	17c中	
29	036	ⅠA	SX001内SX108	上	肥前系染付磁器・瓶		(9.5)	4.8	(7.2)	7.5Y8/1灰白・精良	2.5GY8/1灰白透明釉・内面無釉	17c前	草花文 PL.7-5
30	134	ⅠA	SX001	Ⅰ区下部礫群	肥前系染付磁器・碗			(3.7)	(3.25)	5Y8/1灰白・精良	10Y8/1灰白半透明釉	17c前～中	山水
31	160	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下部礫群中	肥前系染付磁器・碗			4.6	(3.7)	7.5Y8/1灰白・精良	わずかに青味を帯びた灰白色透明釉	17c前	
32	153	ⅠA	SX001	盛土中	肥前系染付磁器・碗			(5.0)	(1.85)	N8灰白・精良	10Y7/1灰白透明釉	17c中	「○○年製」銘
33	196	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群B集中(下部)	肥前系染付磁器・皿				(2.2)	5Y8/1灰白・やや粗	淡灰色透明釉	17c?	
34	058	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土(礫群上)	肥前系染付磁器・皿			(5.8)	(1.7)	2.5Y8/1灰白・精良	2.5Y8/2灰白不透明釉(二次焼成受ける)	17c中～後	
35	121	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半礫群中	肥前系染付磁器・皿	(6.8)			(1.8)	N8灰白・精良	灰白色透明釉	17c中	
36	132	ⅠA	SX001	南北ベルト下部礫群	肥前系染付磁器・皿			(3.4)	(2.2)	5Y8/1灰白・精良	わずかに青味を帯びた灰白色透明釉	17c前	草花文
37	31	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土	肥前系染付磁器・皿			(2.6)	(2.45)	7.5Y8/1灰白・精良	わずかに青味を帯びた灰白色透明釉	17c中?	
38	95	ⅠA	SX001	盛土中	肥前系磁器・碗	(12.2)		(4.6)	6.7	2.5Y8/1灰白・精良	外茶褐色半透明釉流し掛　内7.5GY8/1明緑灰・大きく氷裂	17c中	
39	29	ⅠA	SX001	Ⅰ区盛土	肥前系色絵磁器・碗	(8.7)		2.9	5.15	5Y8/1灰白・精良	7.5Y8/2灰白透明釉・細かな氷裂	17c	
40	93	ⅠA	SX001	Ⅲ区	肥前系青磁・皿			(5.9)	(1.65)	5Y8/2灰白・精良	10GY7/1明緑灰透明釉	17c中～後	
41	70	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群A集中(下部)	肥前系磁器・碗			3.4	(3.4)	灰白色・精良	外:茶褐色不透明釉(鉄釉)　内:灰白色透明釉・大きく氷裂	17c前～中	
42	98	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区上部礫群	肥前系白磁・皿				(3)	5Y8/1灰白・やや粗い	5Y8/1灰白透明釉		
43	111	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区上部礫群東・Ⅲ区礫群中	肥前系白磁・碗			6.5	(2.9)	5Y8/1灰白・精良	10G7/1明緑灰透明釉・大きく氷裂	17c中	
44	97	ⅠA	SX001	盛土中	肥前系白磁・香炉			(7.1)	(1.6)	2.5Y8/1灰白・精良	7.5Y8/1灰白透明釉		

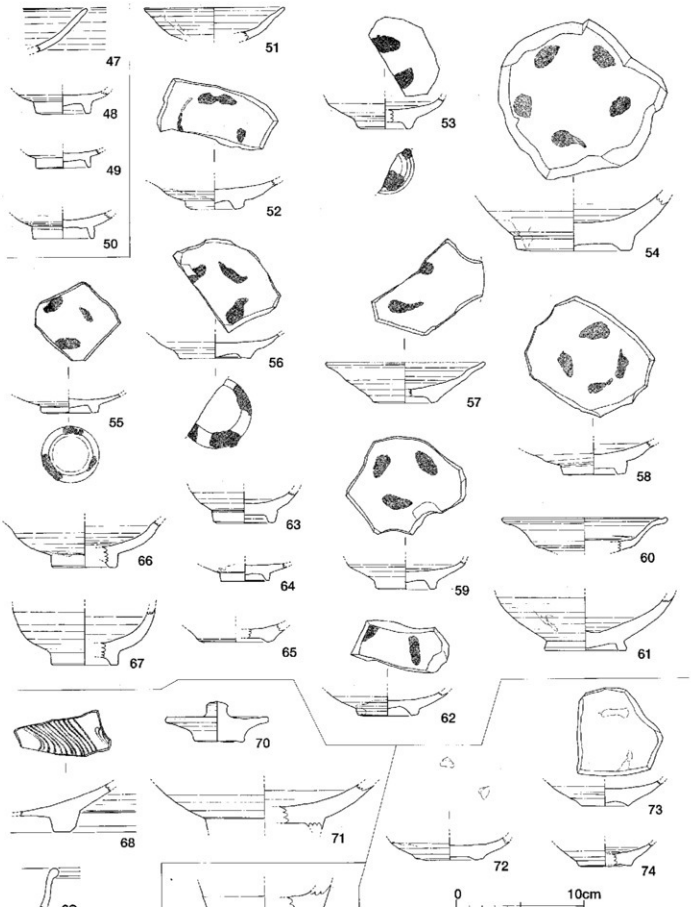


Fig.70　IA区 SX001出土遺物（3）（S=1/3）

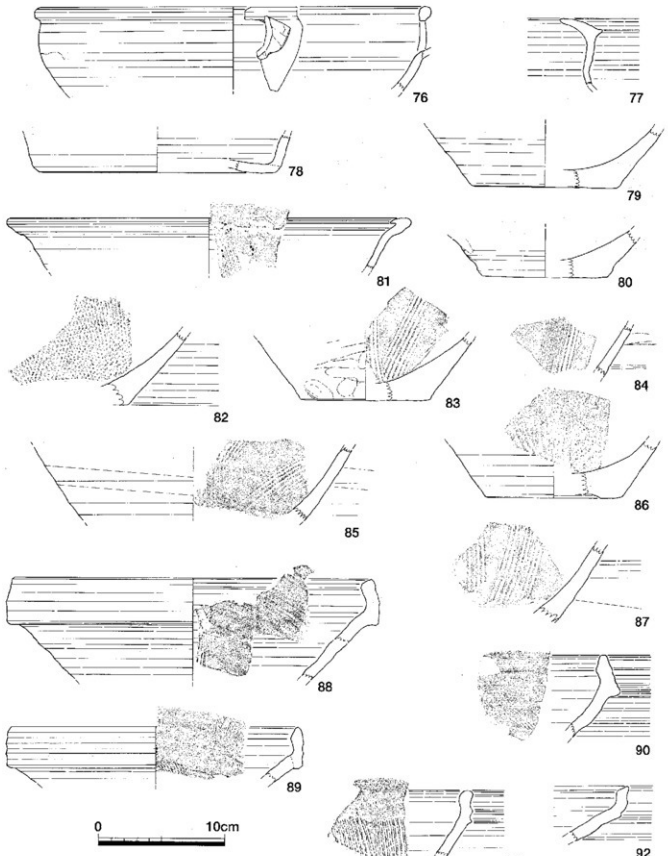


Fig.71　IA区 SX001出土遺物（4）（S=1/3）

世紀中頃）に伴う可能性が高いと考える。

・ＩＡ区SD003・005、SX104（Fig.23、10頁）（PL.6-2）は、一連の遺構と考えられ、上述の水田

表3．Fig.69出土遺物観察表(2)

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
45	181	ⅠB	SX001	Ⅱ区西半下部礫群	肥前系白磁・皿			4.5	(3.45)	10YR8/2灰白・ややざらつく	7.5Y8/1灰白透明釉・氷裂	17c前	高台内砂粒と溶着物の砂付着
46	99	ⅠB	SX001	盛上中	肥前系白磁・碗			(5.0)	(3.9)	7.5Y8/1灰白・精良	7.5GY8/1明緑灰透明釉・大きく氷裂	17c前	見込・高台内砂目

表4．Fig.70出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
47	140	ⅠA	SX001		肥前系陶器・皿				(3.5)	2.5Y7/2灰黄・精良	10YR5/3にぶい黄褐透明釉・氷裂		
48	24	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛上	肥前系陶器Ⅱ期・碗			4.3	(1.85)	5Y8/1灰白・精良	7.5Y7/1灰白透明釉(石灰釉)	17c前～中	
49	195	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群B集中(下部)	肥前系陶器Ⅲ期・碗			4.3	(1.45)	5YR7/6橙・精良	2.5Y8/1灰白不透明釉	17c中～後	
50	2	ⅠA	SX001	Ⅲ区1層(～2層)(表上)	肥前系陶器Ⅲ期・碗			4.8	(2.05)	7.5Y7/1灰白・精良 外面露胎部鉄錆塗り?	外:暗褐色不透明釉 内:灰緑色透明釉(石灰釉)細かな氷・やや発泡	17c中～後?	
51	180	ⅠA	SX001	Ⅰ区	肥前系陶器Ⅱ期・皿	(11.1)			(2.6)	7.5YR5/6明赤褐	7.5Y7/2灰白透明釉	17c前～中	
52	90	ⅠA	SX004	Ⅲ区下部礫群B集中(下部)	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.6	(2.35)	10YR7/4にぶい黄橙・精良	2.5Y7/1灰白半透明釉(長石釉?)	17c前～中	見込砂目
53	73	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群A集中(下部)	肥前系陶器Ⅱ期・皿			(4.4)	(2.5)	5Y8/2灰白・精良	5Y7/3浅黄透明釉(石灰釉)細かな氷裂	17c前～中	見込・高台内砂目
54	91	ⅠA	SX001	Ⅱ・Ⅲ区ベルト(中央礫群以上)	肥前系陶器Ⅱ期・鉢			9.2	(4.5)	10YR8/3浅黄橙・精良	7.5Y7/1灰白不透明釉(長石釉?)	17c前～中	見込砂目
55	89	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群B集中(下部)	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.5	(1.5)	2.5Y8/2灰白・精良	7.5Y6/1灰透明釉(石灰釉)	17c前～中	見込・高台内砂目
56	145	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半礫群中	肥前系陶器Ⅱ期・皿			5.7	(1.95)	10YR5/1褐灰・精良(露胎部7.5YR5/3にぶい褐)	7.5YR4/1褐灰～7.5Y8/1灰白不透明釉(長石釉?)	17c前～中	見込・高台内砂目
57	142	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下部	肥前系陶器Ⅱ期・皿	(12.6)		5.1	3.25	2.5YR5/6明赤褐・精良	10YR1.7/1黒不透明釉	17c前～中	見込砂目
58	146	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下部礫群中	肥前系陶器Ⅱ期・皿			5.0	(2.6)	2.5YR4/6赤褐・精良	7.5Y7/1灰白不透明釉(長石釉?)	17c前～中	見込砂目
59	3	ⅠA	SX001	Ⅲ区1層(～2層)	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.8	(2.3)	10YR7/3にぶい黄橙・精良だがやや軟質	10YR7/1灰白不透明釉・細かく氷裂	17c前～中	見込砂目 PL.7-5
60	104	ⅠA	SX001	Ⅱ・Ⅲ区ベルト1層	肥前系陶器Ⅱ期・皿	(13.2)			(2.75)	2.5Y8/3浅黄・精良で良く締る	5Y8/2灰白不透明釉	17c前～中	
61	154	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半礫群中	肥前系陶器Ⅱ期・鉢			6.5	(4.4)	10YR7/4にぶい黄橙・精良・やや軟質	7.5YR7/1明褐灰不透明釉	17c前～中	
62	54	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛上(礫群上)	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.7	(1.9)	7.5YR5/2灰褐・やや粗い	5Y7/2灰白不透明～透明釉(石灰釉)	17c前～中	見込砂目
63	4	ⅠA	SX001	Ⅲ区1層(～2層)	肥前系陶器Ⅱ期?・碗			(4.9)	(2.5)	2.5Y7/2灰黄・精良	10Y7/1灰白透明釉(石灰釉)・細かな氷裂・内面やや発泡	17c前～中?	
64	107	ⅠA	SX004	Ⅲ区礫集中	肥前系陶器Ⅱ期?・皿			3.8	(1.4)	10Y6/1灰・精良で堅く締る	5YR3/3暗赤褐不透明釉	17c前～中?	見込蛇の目釉剥ぎ
65	198	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群B集中(下部)	肥前系陶器Ⅱ期・皿			(5.9)	(1.45)	7.5YR6/4にぶい橙・精良・軟質	2.5Y8/2灰白不透明釉	17c前～中	
66	182	ⅠA	SX001	Ⅲ区礫群	肥前系陶器Ⅱ期・皿			(5.2)	(3.7)	10YR7/4にぶい黄橙・精良	2.5Y8/2灰白不透明釉(長石釉)	17c前～中	
67	5	ⅠA	SX001	Ⅲ区1層(～2層)	肥前系陶器Ⅱ期?・碗			(5.2)	(4.55)	2.5Y7/2灰黄・精良	5Y7/2灰白透明釉(石灰釉)・氷裂	17c前～中?	
68	178	ⅠA	SX001	南北ベルト(南)下部礫群	肥前系陶器・刷毛目鉢				(3.85)	2.5YR5/4にぶい赤褐・やや粗	(2.5Y8/3浅黄)白化粧土刷毛塗り後透明釉	17c中～18c後	
69	183	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下部礫群下	肥前系陶器?鉢				(3.8)	5YR4/4にぶい赤褐・やや粉っぽい	5YR?/2灰白不透明釉・口縁部釉拭き取り		
70	85	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群B集中(下部)	肥前系陶器?蓋	摘み部 1.7	受部 (8.2)	4.05	3.2	5YR6/6橙・精良	5YR2/2黒褐不透明釉(土灰釉)		
71	10	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅲ区ベルト上部礫群下	陶器・鉢			(9.7)	(3.65)	2.5YR6/6橙・精良	2.5YR4/6赤褐不透明釉(土灰釉?)		
72	46	ⅠA	SX001	Ⅰ区1層	肥前系陶器Ⅰ期・皿			(5.4)	(1.8)	2.5Y8/2灰白・精良	5Y5/2灰オリーブ不透明釉(灰釉)	16c末～17c初	見込胎土目
73	42	ⅠA	SX001	Ⅰ区礫群上	肥前系陶器Ⅰ期・皿			3.7	(2)	2.5Y6/2灰黄・精良 露胎部灰褐色	5Y5/2灰オリーブ半透明釉(灰釉?)・氷裂	16c末～17c初	見込胎土目 PL.7-8
74	108	ⅠA	SX001	Ⅱ・Ⅲ区下部礫群東	肥前系陶器Ⅰ期?皿			(4.2)	(1.8)	2.5Y8/3浅黄・やや粗く軟質	2.5Y8/2灰白半透明釉(長石釉?)	16c末～17c初?	見込胎土目
75	162	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下部礫群中	中国陶器B群?蓋(長頸?)			(8.4)	(2.95)	2.5Y8/2灰白・精良・やや軟質	緑茶色不透明釉(破片では内面のみ)		

表5．Fig.71出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
76	194	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群B集中(下部)	肥前系陶器・片口付鉢	(31.3)			(6.7)	2.5Y5/1黄灰・精良	鉄釉の上に灰褐色透明釉 口縁部釉拭き取り		
77	127	ⅠA	SX001	南北ベルト(南)下部礫群	肥前系陶器Ⅱ期・甕				(5.3)	2.5YR5/3にぶい赤褐・精良	7.5YR3/3暗褐不透明釉(土灰釉)	17c前～中	
78	193	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群B集中(下部)	陶器・壺あるいは甕			(19.3)	(3.1)	2.5Y7/2灰黄・やや粗	7.5YR3/3暗褐不透明釉		
79	13	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅲ区ベルト上部礫群下	陶器・擂鉢			(11.4)	(4.85)	精良	無釉・2.5YR7/6橙		
80	41	ⅠA	SX004	Ⅰ区礫群(上)	陶器・擂鉢?			(10)	(3.75)	7.5YR7/2明褐灰色・精良	無釉・外7.5YR7/2明褐灰 内10YR3/1褐灰		
81	15	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛上中	肥前系陶器Ⅱ期・擂鉢	(31.9)			(4.1)	10YR5/1褐灰・精良やや粉っぽい	10R/3暗赤褐不透明釉(鉄釉)	17c前～中	
82	14	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	陶器・擂鉢				(5.8)	精良	無釉・外10YR6/3にぶい黄橙 内10YR5/1褐灰		

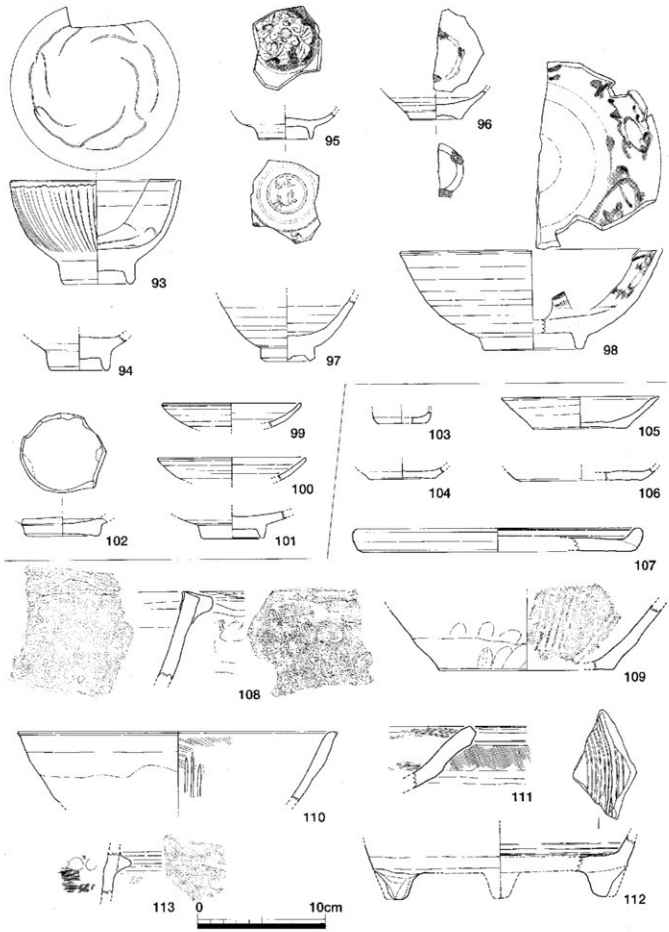


Fig.72　IA区 SX001出土遺物（5）（S=1/3）

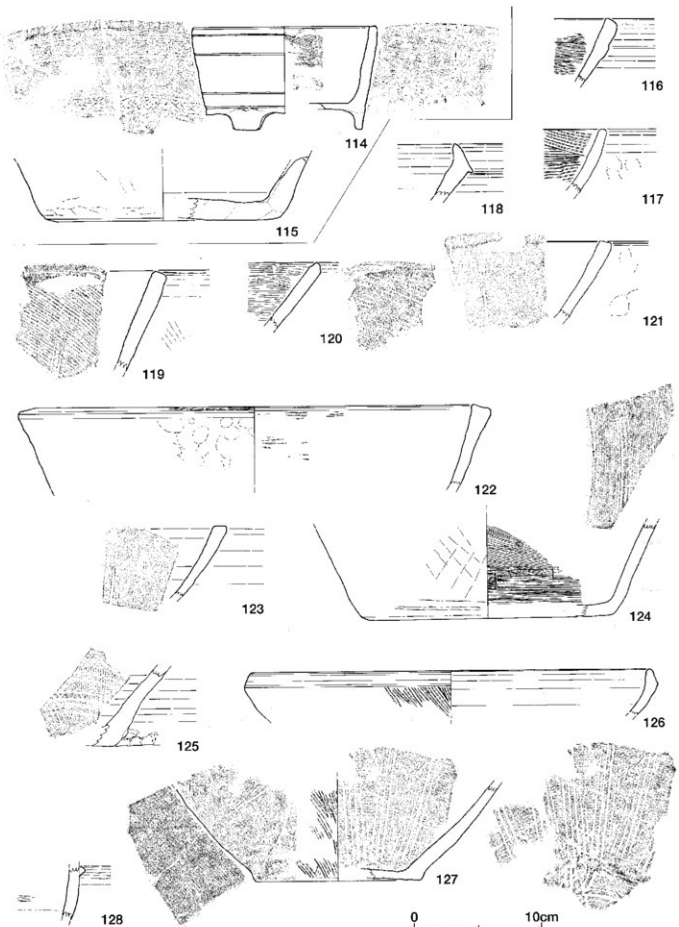


Fig.73 IA区 SX001出土遺物（6） (S=1/3)

表6．Fig.71出土遺物観察表(2)

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残存 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
83	32	ⅠA	SX001	Ⅱ区西半下部礫群下層	陶器・擂鉢			(10.3)	(5.1)	精良	無釉・7.5YR5/1褐灰		
84	92	ⅠA	SX001		陶器・擂鉢				(3.9)	精良	無釉・2.5YR6/6橙		
85	94	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区ベルト上	陶器・擂鉢				(5.3)	精良	無釉・5YR6/6橙		
86	6	ⅠA	SX001	Ⅱ区下部礫群B集中(下層)	陶器・擂鉢			(10.8)	(4.6)	精良	無釉・5YR5/3にぶい赤褐		
87	86	ⅠA	SX001	Ⅱ区下部礫群(下)	陶器・擂鉢				(6.6)	精良	無釉・5YR5/6明赤褐		
88	147	ⅠA	SX001	Ⅱ・Ⅲ区下部礫群	備前陶器Ⅴ期・擂鉢	(28.5)	最大径(29.3)		(8.0)	精良	無釉・2.5YR5/6明赤褐	16c以降	
89	141	ⅠA	SX001	Ⅱ区南半下部礫群中	備前陶器Ⅴ期・擂鉢	(23.1)			(4.45)	2.5YR5/4にぶい赤褐・白色微粒わずかに含みやや粗	無釉・外2.5YR3/3暗赤褐 内N4灰	16c以降	
90	192	ⅠA	SX001	Ⅱ区西半下部礫群	備前陶器Ⅴ期・擂鉢				(6.6)	5Y7/1灰白・やや砂っぽい	無釉・2.5YR6/4にぶい橙	16c以降	
91	155	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半礫群中	備前?陶器・擂鉢				(5.3)	2.5YR5/6明赤褐・精良・石英砂粒含む	無釉・5YR5/3にぶい赤褐		
92	199	ⅠA	SX001	Ⅱ区下部礫群B集中(下層)	陶器・擂鉢				(4.35)	2.5Y7/1灰白・やや砂っぽい	無釉・外2.5YR4/2灰赤 内N5灰		

表7．Fig.72出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残存 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
93	39	ⅠA	SX001	排石Ⅲ区1層(~2層)	龍泉窯青磁Ⅴ類・碗	14.3		5.9	8.15~8.3	7.5YR8/1灰白・精良	7.5GY6/1緑灰透明釉	16c後	見込花文(ヘラ描き) PL.8-2
94	21	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	龍泉窯青磁Ⅴ類・碗			4.8	(2.8)	2.5YR7/4淡赤橙・精良やや軟質	10GY6/1緑灰透明釉厚くかかる・大きく氷裂	16c後	
95	49	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅳ区ベルト上層(礫群上)	染付磁器(青花)・碗			4.3	(2.1)	N8灰白・精良	10GY7/1明緑灰透明釉・外面細かく貫入	16c後	高台内[illegible] PL.7-9
96	68	ⅠA	SX001	Ⅲ区増土最下層~Ⅲ面上	李朝陶器・碗			(4.2)	(2.4)	2.5Y7/3浅黄で良く焼るが砂っぽい	2.5GY5/1オリーブ灰透明釉・鈍い光沢	17c	見込・高台内砂目 PL.8-?
97	17	ⅠA	SX001	Ⅱ区北半礫群中	龍泉窯青磁?碗			4.3	(5.15)	5Y8/1灰白・精良・一部火ぶくれ	5Y6/2灰オリーブ透明釉・氷裂	16c?	PL.8-3
98	1	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	染付磁器(漳州窯系青花)・鉢	(20.9)		(6)	12.95	5YR7/1灰白・粗く砂っぽい	10Y7/1灰白半透明釉・細かく氷裂	16c末~17c初	見込蛇の目釉剥ぎ PL.7-7
99	59	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土(礫群上)	白磁Ⅲ類小皿	(11)			(2)	7.5Y8/1灰白・精良	2.5GY8/1灰白透明釉		
100	30	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	白磁Ⅲ類平底皿	(11.8)			(1.85)	7.5Y8/1灰白・精良	7.5Y8/1灰白透明釉		
101	63	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土(礫群上)	白磁・碗			(5.0)	(2.2)	2.5YR8/2灰白・精良・黒色粒子を含む	2.5YR8/2灰白透明釉		
102	64	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土(礫群上)	白磁・再加工品(面子)			5.8	(1.5)	2.5Y8/3淡黄・精良	2.5Y8/3淡灰透明釉・細かな氷裂		
103	102	ⅠA	SX001		土師器・皿			(4.9)	(1.0)	精良	7.5YR7/6橙		
104	202	ⅠA	SX001	Ⅰ区西半下層	土師器・皿			(6.3)	(0.9)	細かな石英、長石を含む・精良	外7.5YR5/6~6/6明褐~橙 内7.5YR6/6~7/6橙		
105	177	ⅠA	SX001	Ⅰ区下層	土師器・坏	(12.6)			(2.5)	灰白色・やや砂っぽい	10YR8/2灰白~10YR7/3にぶい黄橙		
106	55	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土(礫群上)	土師器・坏			(9.7)	(0.9)	精良(石英・長石・金雲母微粒わずかに含む)	7.5YR7/4にぶい橙		
107	74	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群A集中(下部)	土師質土器・焙烙?	(23)		(22)	1.9	金雲母微粒を含む・精良	外7.5Y4/1灰 内10YR6/2灰黄褐		
108	77	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群A集中(下部)	土師質土器・擂鉢				(7)	石英・長石・金雲母粒含む・精良	灰~茶灰色		
109	174	ⅠA	SX001	南北ベルト(南)下層	土師質土器・擂鉢			(13.8)	(5.1)	黒褐色・1mm程度の砂石含む・やや粗	7.5YR7/6橙		
110	148	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下部礫群	土師質土器・擂鉢	(34.0)			(5.6)	灰黄褐色・精良	7.5YR6/4にぶい橙		
111	150	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下部礫群	土師質土器・鍋				(6.7)	10YR7/3にぶい黄橙・やや砂っぽい	10YR7/3~7/4にぶい黄橙		
112	175	ⅠA	SX001	Ⅰ区西下礫群	土師質土器・火舎				(5.6)	10YR5/3鈍い黄褐・ややざらつく	5YR6/6橙		
113	67	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群B集中(下)	土師質土器・釜?				(3.2)	2.5Y4/1黄灰・精良	10YR6/4鈍い黄橙		

表8．Fig.73出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残存 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
114	122	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半礫群中	土師質土器・火舎	(14.7)		(12.5)	8.2	粒子細かく精良	5YR4/6赤褐		PL.8-4
115	48	ⅠA	SX001	Ⅰ区1層	土師質土器・鍋			(16.5)	(4.93)	2~3mm程の石英・長石・金雲母をやや多く含み粗い	外10YR5/1褐灰 内10YR7/4明黄褐		
116	44	ⅠA	SX001	Ⅲ区礫群(上)	瓦質土器・擂鉢				(5)	精良(石英・金雲母小粒含む)	10YR8/1灰白		
117	79	ⅠA	SX001	Ⅰ区下部礫群A集中(下部)	須恵質土器・捏鉢				(5.1)	精良(大型の石英粒わずかに含む)	10YR7/2にぶい黄橙		
118	36	ⅠA	SX001	Ⅱ区墳丘下	須恵質土器・擂鉢				(4.2)	1~2mmの石英・長石粒を少量含みやや粗い	5Y5/1灰		
119	172	ⅠA	SX001	南北ベルト下礫群	瓦質土器・擂鉢				(8.3)	ややざらつく	外2.5YR8/2灰白 内2.5Y8/2灰白		
120	83	ⅠA	SX001		瓦質土器・擂鉢				(6.3)	精良・やや軟質	10YR8/2灰白		
121	76	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群A集中(上部)	瓦質土器・擂鉢				(6.05)	精良(金雲母粒やや多く含む)	N4灰		
122	75	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群A集中(下部)	瓦質土器・捏鉢	(37.3)			(6.4)	7.5YR8/3浅黄橙・石英砂粒を少量含みやや軟質	2.5YR6/1黄灰		
123	43	ⅠA	SX001	Ⅰ区1層	瓦質土器・擂鉢				(5.6)	精良	5Y7/1灰		
124	208	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土	瓦質土器・火舎?			(19.0)	(7.4)	2.5Y8/1灰白・精良	外5Y6/1灰 内2.5Y8/1灰白色		
125	6	ⅠA	SX001	Ⅰ区1層	須恵質土器・擂鉢				(6.1)	細かな砂粒をわずかに含む・精良	2.5Y5/1黄灰		
126	67	ⅠA	SX001	Ⅲ区墳丘最下層~Ⅲ面上	瓦質土器・捏鉢	(32.6)			(3.7)	精良(細かな石英・長石、金雲母粒わずかに含む)	10YR8/2灰白		
127	209	ⅠA	SX001	盛土中	瓦質土器・擂鉢			(13)	(7.3)	きめ細かく精良	2.5Y6/1黄灰		
128	176	ⅠA	SX001	Ⅱ区南?層	瓦質土器・湯釜?				(4.0)	2.5Y5/1黄灰・やや砂っぽい	2.5Y5/1~6/1黄灰		

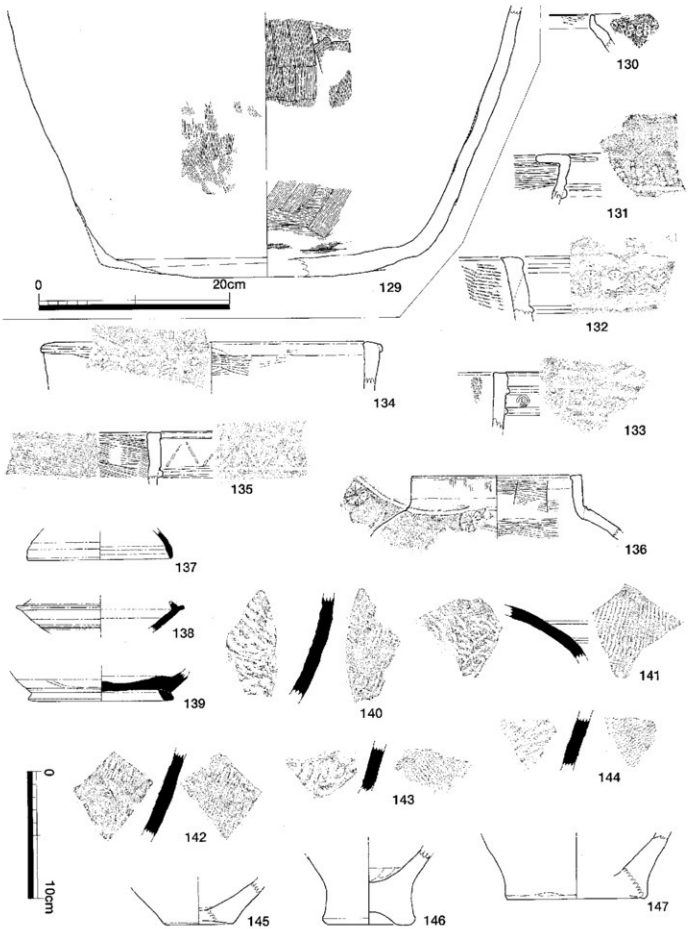


Fig.74　IA区 SX001出土遺物（7）（S=1/3,一部S=1/4）

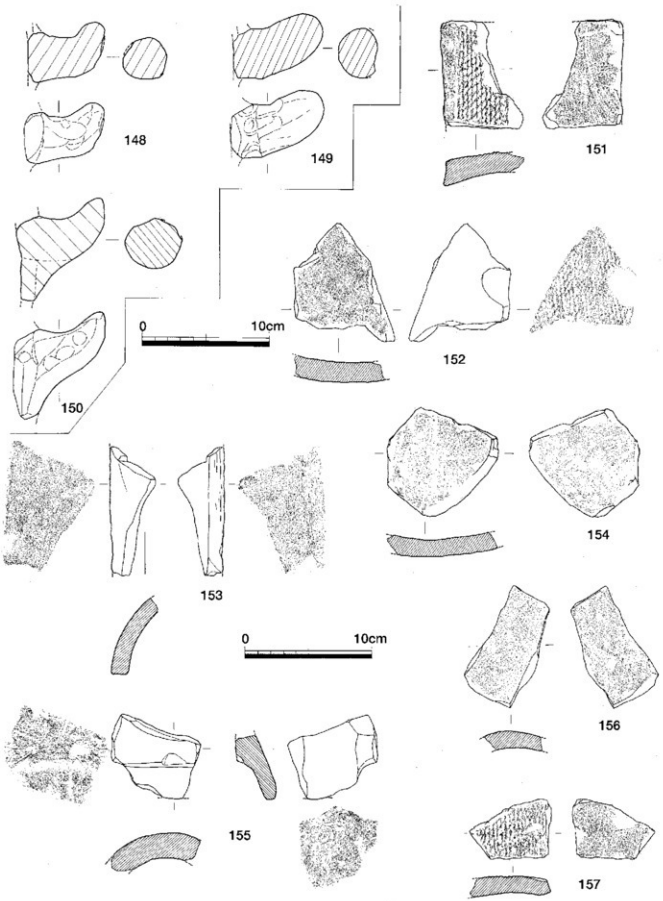


Fig.75　IA区 SX001出土遺物（8）（S=1/3）

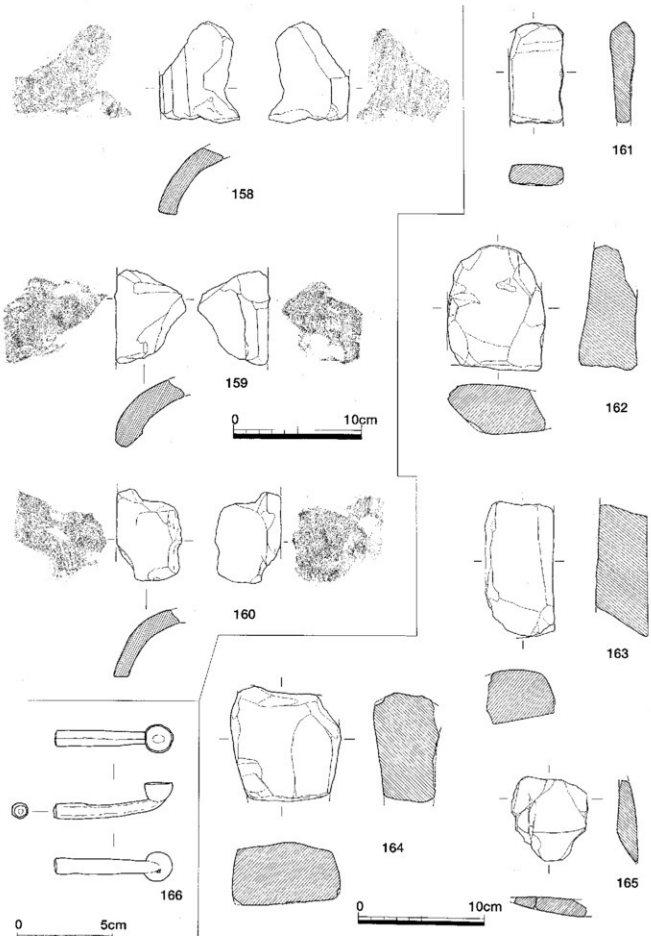


Fig.76　IA区 SX001出土遺物（9）（S=1/3,一部S=1/2）

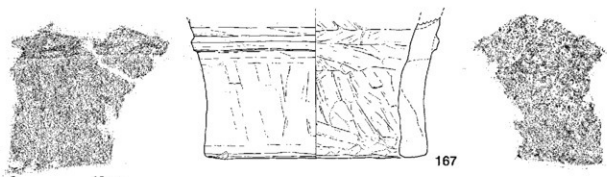


Fig.77　IA区 SX001出土円筒埴輪（S=1/4）

面を切り、またⅠA区SD006を切る。**SD003**は、幅2.0～2.5m、深さ50～60cm前後の溝で、SD005と交わる側にSX104がある。**SX104**は、SD003の立ち上がりに沿うように並べられた杭群だが、おそらく井堰の一部であろう。SD005は非常に浅いが、本来の河道は西側とみられるので、SD003を溜井状に使用して、東側に成立した新しい水田に水を引くためのものと考える（東側への引込み溝は削平されたものか）。またSD003中央に直行して杭列があるが、垂直に近い打ち込みのものは上部が失われているが、SX107杭列の続きの基部の残存であろう。中央の斜めに入る杭は、残りがわずかであるがSD003に伴う井堰の一部と考えられる。また東半にも残りの悪い杭があるが、これは伴うかもしれない。なおこれらに伴う水田面は明らかではない（これらの本来の遺構面はさらに上部と考えられる）。重複関係から近世前期ないしそれ以降であろう。

・**ⅠA区SX105・SX106**（Fig.25～26、11～12頁）（PL.6-3～5）は、水田SS002の下部、畦畔SX007の東側で検出した。**SX105**は、斜面に沿って斜めに打ち込まれた木杭を基底とし、この上に竹材を縦横に組んで葦状とし護岸状にしたものである。一部に、腐食して分かりにくくなっているが、竹材の下に、葦刷状の有機物が敷かれた部分が残る。これの東側対岸は、はじめSS001西側畦畔西縁に沿った杭列部分としていたが（確かにこの東西で埋土が異なる）、トレンチを設定すると腐食してはっきりしないがSX105と同様の葦状護岸の痕跡を検出した（竹材は使用していたようだが斜めの木杭は無いのがSX105とは異なる）。これが**SX106**であるが、調査期間の関係で広げることができなかった。これはSD003の南側壁面でも続きの層を確認している。土層の検討から（Fig.26）、本来はSX105とSX106は一連で、幅2.5～3.0mの水路の護岸であったが、途中で中央を境界に杭列が打たれ（本来はこれに沿って板などで仕切られたはずだがその痕跡はないものの、この東西で覆土が異なるのは事実）、東側をシルトで埋め、西半分は一時期水路として保持されたが、これも砂で埋まった後に上部が一連の水田となったという過程を想定したい。なおSX105のうち、SX007畦畔に沿った垂直の杭列（一部のみ残る）、むしろ水田畦畔に伴い、次の**SX107**杭列の続きであろう。なおSX105護岸の水路としての利用については、珪藻分析（自然科学分析の章参照）からも問題はない。SX106の埋土からは16世紀末の遺物があり（Fig.95-348）、水路の時期を示すか。

・**ⅠA区SX107**（Fig.23、Fig.24下段、10頁）（PL.6-6）は、水田SS004で検出したもの。**SX107**は、SS004西側の畦畔外側に沿ってやや傾いて打ち込まれた杭列で、比較的密に打ち込まれている。畦畔東縁ラインに沿って、杭列外側に絡むように横木が設置されている。おそらく水田畦畔の補強のための杭列であろう（SS004西側畦畔東縁ラインとは微妙にずれるので、より上層の水田面から打

表9．Fig.74出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
129	156	ⅠA	SX001		瓦質土器・大甕	(31.9)			(29.75)	1～3mmの石英、長石少量含む・やや粗	2.5Y8/3淡黄～5Y5/1灰		
130	149	ⅠA	SX001	Ⅲ区南下部礫群	瓦質土器・湯釜				(1.7)	良・やや軟質	灰色		
131	173	ⅠA	SX001	Ⅲ区(1層～2層)	瓦質土器・火舎				(3.5)	2.5Y7/4浅黄・やや軟質	2.5Y5/1黄灰		
132	80	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群A集中(下部)	瓦質土器・火舎				(4.5)	2.5Y7/3浅黄・やや軟質	5Y4/1灰		
133	117	ⅠA	SX001	Ⅱ区北半部	瓦質土器・火舎				(4.7)	10YR7/3にぶい黄橙・精良・やや軟質	2.5Y5/1黄灰		
134	106	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区一部Ⅱ区東部集中	瓦質土器・火舎	(27.0)			(3.3)	精良	2.5YR8/2灰白		
135	96	ⅠA	SX001	盛土	瓦質土器・火舎				(3.7)	淡灰色・精良・やや軟質	灰色		
136	168	ⅠA	SX001	Ⅰ区盛土中	瓦質土器・湯釜	(13.4)			(5.6)	丸い黄色っぽい褐色・精良	10YR3/1黒褐～10YR5/2灰黄褐		
137	125	ⅠA	SX001	南北ベルト盛土下層	須恵器(Ⅳ)・坏蓋	(11.2)			(2.5)	7.5YR6/2灰褐・精良	外5YR5/3にぶい赤褐 内2.5Y7/1灰白	7c前	
138	35	ⅠA	SX001	Ⅱ区南半下部礫下	須恵器(Ⅳ)・坏身	受部(13.2)			(2.4)	精良	N6灰	7c前	
139	84	ⅠA	SX001	Ⅲ区下礫集(下)	須恵器・高台付坏			(11.5)	(2.3)	粒子細かいが、ややざらつく	N6灰	8c	
140	11	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区ベルト上部礫群	須恵器・甕				(8.0)	精良	7.5Y6/1灰		
141	158	ⅠA	SX001	Ⅲ区南下部	須恵器・甕				(6.6)	精良	5Y5/1灰		
142	47	ⅠA	SX001	Ⅰ区1層	須恵器・甕				(5.9)	精良	外2.5Y7/1灰黄 内N5灰		
143	65	ⅠA	SX001	Ⅱ区盛土	須恵器・甕				(5.0)	精良	5Y6/1灰		
144	66	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土(礫上)	須恵器・甕				(4.0)	10R5/1赤灰・精良	N4灰		
145	18	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土	弥生土器・甕			(5.5)	(5.3)	石英粒をやや多く含む	10YR8/2灰白	中期	
146	170	ⅠA	SX001	Ⅱ区東半礫群盛土下層	弥生土器・鉢			6.8	(6.0)	1mm程度の石英・長石含み粗	10YR7/4にぶい黄橙	中期前半	
147	78	ⅠA	SX001	Ⅲ区下礫群A集中(下)	弥生土器・甕			(10.8)	(4.6)	石英・長石粒をやや多く含む	7.5YR7/4にぶい橙	中期	

表10．Fig.75出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
148	119	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半部	土師器・鍋把手	幅(6.6)			(4.9)	細かな砂粒をやや多く含む	7.5YR7/4にぶい橙		
149	137	ⅠA	SX001	Ⅲ区南半下礫群	土師器・鍋把手	幅(7.2)			(5.16)	精良・やや軟質	10YR8/2灰白		
150	129	ⅠA	SX001	南北ベルト	土師器・鍋把手	幅(7.2)			(8.5)	淡灰色・精良	5YR6/6橙を基調		
151	167	ⅠA	SX001	Ⅲ区南下部礫群	平瓦	長(8.6)	幅(6.5)	厚1.6～2.0		10YR7/2にぶい黄橙・精良	10YR8/1灰白～10YR7/2にぶい黄橙		
152	106	ⅠA	SX001	Ⅱ区南下部礫群中	平瓦	長(9.4)	幅(8.6)	厚1.6		精良	2.5YR8/1～8/2 灰白 外面煤付着		
153	105	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区上礫東Ⅱ区礫集中	丸瓦	長(10.2)	幅(3.6)	厚1.3		2.5Y8/3淡黄・精良・やや軟質	N4灰		
154	52	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土中	平瓦	長(8.6)	幅(8.8)	厚1.4		精良	2.5Y8/1灰白		
155	69	ⅠA	SX001	Ⅲ区下礫群A集中(下部)	丸瓦	長(6.7)	幅(7.1)	厚2.1		石英・長石・金雲母をやや多く含む・精良	10YR6/3にぶい黄橙		
156	20	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土	丸瓦	長(9.85)	幅(6.85)	厚1.45		10YR7/4にぶい黄橙・精良やや軟質	N3暗灰		
157	204	ⅠA	SX001	Ⅱ区下礫群	平瓦	長(4.8)	幅(6.55)	厚1.5		精良	N5灰		

表11．Fig.76出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
158	115	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区上部礫群	丸瓦	長(8.1)	幅(6.3)	厚1.4～1.6		精良・やや軟質	5Y8/1灰白		
159	205	ⅠA	SX001	南北ベルト(南)下部礫群	丸瓦	長(7.4)	幅(5.6)	厚1.8～2.0		10YR8/3浅黄橙・精良	外10YR3/1黒褐 内10YR7/3にぶい黄橙		
160	206	ⅠA	SX001	Ⅲ区下	丸瓦	長(8.3)	幅(5.2)	厚1.5		2.5Y8/1灰白・精良	N6灰		
161	1029	ⅠA	SX001	Ⅲ区北半下部礫群中	砥石	長(8.0)	幅4.4	厚1.95		石材:砂岩	わずかに茶色味を帯びた灰色・粒子細かく密		
162	1028	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区東西下部礫群	砥石	長(10.0)	幅(7.75)	厚4.6		石材:砂岩	灰褐色・0.1mm程度の粒状・石英、長石砂粒を主体とする		
163	1027	ⅠA	SX001	Ⅱ区南半下部礫群	砥石	長(10.75)	幅(5.5)	厚(4.1)					
164	1030	ⅠA	SX001	Ⅲ区下部礫群	砥石	長(9.2)	幅8.65	厚5.2		石材:砂岩	黄灰色・粒子細かい		
165	1025	ⅠA	SX001	Ⅰ・Ⅱ区下半(中央礫群以下)	砥石	長(6.75)	幅(6.1)	厚1.6		石材:石英粗面岩?	淡茶褐色・粒子細かい・流状構造		
166	1066	ⅠA	SX001	Ⅱ区北半下部礫群	青銅製煙管・雁首	径0.85	火皿径1.3	長6.25	高2.0				竹製と思われる羅宇の一部が残存する

表12．Fig.77出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
167	169	ⅠA	SX001	Ⅲ区盛土	(円筒?)埴輪		胴部(26.1)	(23.5)	(14.9)	2mm程度の石英・長石粒を多く含む	5YR7/6～7.5YR7/6橙	6c後半	外・板ナデ,内・ナデ

表13．Fig.78出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
168	324	ⅠA	SX002		瓦質土器・火舎	(41.1)	(42.1)	(31.4)	(14.85)	1mm前後の石英、長石少量含む・精良	10YR8/2灰白～10YR5/1褐灰		PL.8-7
169	214	ⅠA	SX002		瓦質土器・鉢	(19.9)	(21.5)		(18.75)	2.5Y8/2灰白・1mm前後の石英、長石少量含む・精良	5Y8/1灰白～N5灰		
170	210	ⅠA	SX002		瓦質土器・擂鉢				(6.2)	精良	外5Y4/1灰 内2.5Y6/1黄灰		

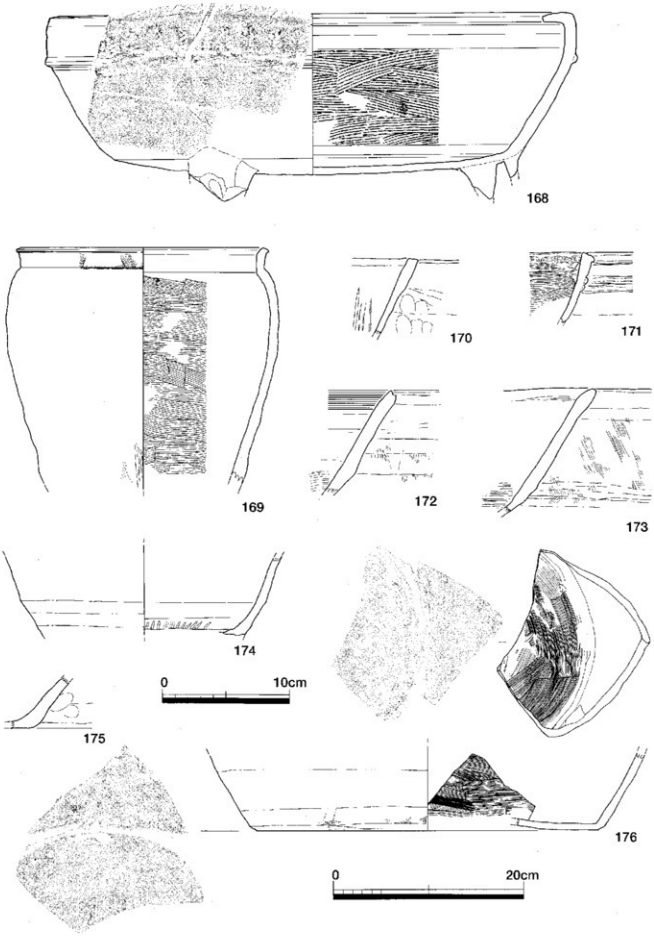


Fig.78　IA区 SX002土坑出土遺物（S＝1/3,一部 S＝1/4）

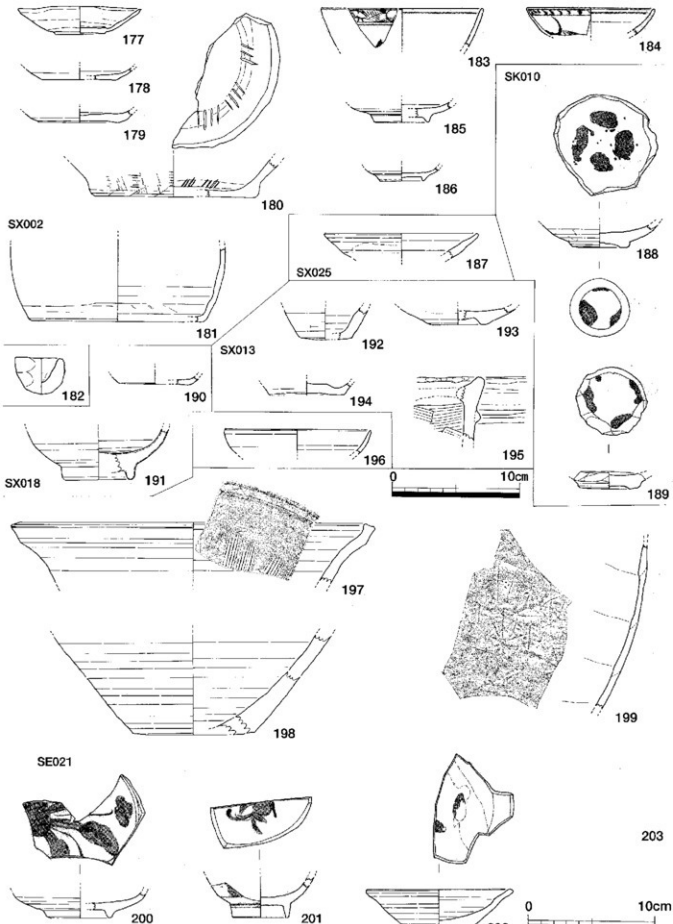


Fig.79　IA区 土坑（SX,SK）出土遺物（S=1/3）

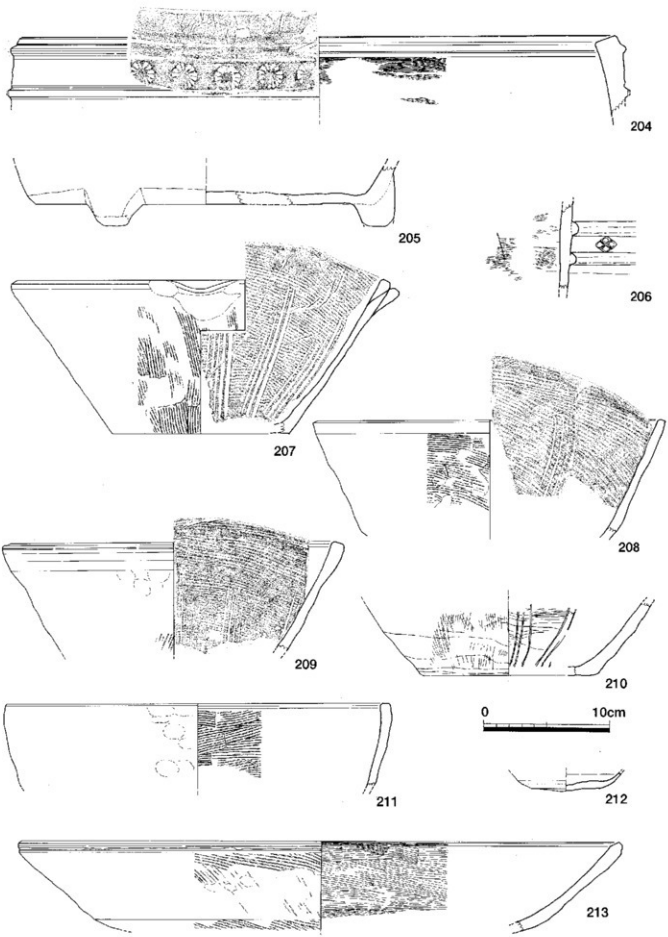


Fig.80　IA区 SE021出土遺物（S=1/3）

表14. Fig.78出土遺物観察表(2)

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
171	211	ⅠA	SX002	Ⅲ区	瓦質土器・火舎				(7.5)	5Y8/1灰白・精良	外2.5Y8/1灰白～2.5Y5/1黄灰 内2.5Y5/1黄灰		
172	222	ⅠA	SX002	最上	瓦質土器・鉢(捏鉢?)				(9.7)	1mm前後の長石粒含む・やや粗く軟質	外10YR6/1褐灰～2.5YR4/1黄灰 内2.5YR4/1黄灰		
173	221	ⅠA	SX002	No.6	土師質土器・鉢(捏鉢?)				(11.1)	0.5mm前後の石英、長石を多く含む・精良	外10YR6/1褐灰～2.5YR4/1黄灰 内2.5YR4/1黄灰・10YR4/2～10YR6/2灰黄褐		
174	215	ⅠA	SX002	Ⅳ区	瓦質土器・擂鉢				(6.3)	1mm前後の石英、長石を多く含み粗	2.5YR4/1黄灰～2.5YR3/1黒褐 部分的に10YR8/2灰白		
175	223	ⅠA	SX002	最上	瓦質土器・火舎?				(4.0)	石英、長石を含みやや粗	外10YR8/2灰白 内10YR8/1灰白		
176	211	ⅠA	SX002	Ⅲ区	瓦質土器・火舎			(36.1)	(8.2)	5Y8/1灰白・精良	外2.5Y8/1灰白～2.5Y5/1黄灰 内2.5Y5/1黄灰		

表15. Fig.79出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
177	225	ⅠA	SX002	Ⅳ区	土師器・坏	(9.4)		(3.9)	2.1	精良	10YR8/7にぶい橙		
178	220	ⅠA	SX002	上層	土師器・皿			(5.6)	(0.9)	精良	7.5YR7/4にぶい橙～7.5YR8/4浅黄橙		
179	226	ⅠA	SX002	Ⅲ区	土師器・坏			(6.4)	(1.0)	精良・1mm前後の石英含む	7.5YR7/4にぶい橙		
180	212	ⅠA	SX002	No.3	陶器・擂鉢			(12.6)	(3.1)	褐灰色・精良	5YR6/6橙色		
181	216	ⅠA	SX002	上層	須恵質土器(金剛?)・壺			(13.6)	(5.8)	精良	外N5～N3灰～暗灰 内N4灰 断面7.5YR4/2赤灰		
182	213	ⅠA	SX002	No.4	ミニチュア土器・鉢	2.6			2.95	石英、長石多く含み粗	5YR7/6橙		
183	227	ⅠA	SX002	Ⅳ区	肥前系?染付磁器・碗	(12.9)			(3.1)	N8灰白・やや粗	7.5GY8/1明緑灰透明釉		
184	217	ⅠA	SX002	上層	染付磁器(青花)・皿	(10.2)			(2.15)	10YR8/1灰白・やや粗	5Y7/2灰白透明釉・氷裂	16c末～17c初	
185	224	ⅠA	SX002	最上	肥前系?陶器・碗			(4.4)	(1.6)	2.5Y7/1灰白・やや粗く砂っぽい	くすんだ暗緑灰色透明釉・氷裂・やや[illegible]		
186	218	ⅠA	SX002	上層	肥前系?白磁・皿			3.5	(1.15)	N8灰白・精良	わずかに青味を帯びた灰白色透明釉	17c前～中	
187	288	ⅠA	SX025 (SP1258?)		肥前系陶器Ⅱ期・皿	(12.2)			(2.0)	2.5YR5/6明赤褐・やや粗	7.5YR5/2灰褐をベースに5Y8/1灰白の流れ多く入る不透明釉	17c前～中	
188	286	ⅠA	SK010	No.1	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.7	(1.85)	5YR6/4にぶい橙・精良	10YR7/2にぶい黄橙不透明釉(全灰釉?)・粗っぽく剥がれやすい	17c前～中	見込・高台内砂目四ヵ所
189	285	ⅠA	SK010	下層	肥前系陶器Ⅱ期・皿(溝?)			4.6	(1.35)	5YR6/6橙・精良	2.5Y8/3淡黄不透明釉・ざらつく	17c前～中	見込砂目
190	236	ⅠA	SX018	上層	土師器・皿			(5.6)	(0.7)	精良	7.5YR6/3にぶい褐		
191	237	ⅠA	SX018	上層	龍泉系青磁V類・碗			(5.7)	(3.95)	N8灰白・精良・緻密	緑灰色透明釉・高台内釉[illegible]	16c末～17c初	
192	230	ⅠA	SX013	中層	陶器・壺?			(4.1)	(2.35)	N8灰白・精良	無釉・2.5YR4/2灰赤(鉄釉塗り?)		
193	228	ⅠA	SX013	下層	肥前系陶器Ⅱ期・皿			(4.5)	(1.35)	2.5YR5/4にぶい赤褐・粗	10YR6/1灰不透明釉・外面露胎	17c前～中	
194	232	ⅠA	SX027 (SP1357)		土師器・皿			(6.0)	(1.0)	精良・2mm前後の長石、雲母含む			
195	231	ⅠA	SX027 (SP1357)		土師質土器・火舎?				(5.1)	精良	外10YR8/4浅黄橙 内10YR6/1褐灰		
196	233	ⅠA	SX038	西	土師器・坏	(11.5)			(1.9)	精良	外10YR5/2灰黄褐 内10YR5/2灰黄褐		
197	253	ⅠA	SE021	掘上層帯	陶器・擂鉢	(28.7)			(4.8)	淡灰色・やや粗・露胎部赤褐色	暗赤褐色不透明釉(土灰釉)		
198	262	ⅠA	SE021	下層(中～下)	陶器・擂鉢			(9.6)	(7.9)	N7灰白・粗・やや軟質	無釉 10YR4/3赤褐		
199	246	ⅠA	SE021	樋下(下層上)	陶器・壺				(13.0)	緻密	黒褐色不透明釉 内 黄褐色		
200	263	ⅠA	SE021	下層(中～下)	肥前系染付磁器・皿			5.0	(2.15)	N8灰白・やや粗	10GY8/1明緑灰透明釉	17c前～中	
201	252	ⅠA	SE021	下層壁(西)	肥前系染付磁器・碗			4.5	(3.3)	2.5Y8/1灰白・精良・軟質	7.5Y8/1灰白半透明釉・内面氷裂	17c中～後	
202	261	ⅠA	SE021	下層(中～下)	肥前系陶器Ⅱ期・皿	(11.7)		4.8	3.5	2.5YR4/6赤褐・やや粗	2.5YR4/1赤灰不透明釉・外面露胎	17c前～中	
203	246	ⅠA	SE021	(南)中下層(礫)	肥前系陶器Ⅱ期・碗			(3.8)	(3.35)	5YR8/1灰白・やや粗・露胎部明褐色	10Y7/1灰白不透明釉・細かな氷裂	17c前～中	見込砂目

表16. Fig.80出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
204	257	ⅠA	SE021	下層(中～下)	瓦質土器・火舎	(42.2)	(49.1)		(6.45)	5Y8/1灰白・精良	N3暗灰		
205	249	ⅠA	SE021	下層(中～下)	瓦質土器・火舎			(26.7)	(4.8)	5Y6/1灰・精良	N4灰		
206	245	ⅠA	SE021	樋下(下層上)	瓦質土器・火舎				(6.9)	石英、長石、金雲母混ざる	外10YR7/1～7/3にぶい黄橙 内5Y7/1灰白		
207	254	ⅠA	SE021		瓦質土器・擂鉢	(29.9)		(14.0)	12.2	2.5YR7/1灰白・やや粗	外5Y7/1灰白 内5Y5/1灰		
208	255	ⅠA	SE021	樋下(下層上)	瓦質土器・擂鉢	(28.0)			(9.05)	2.5YR6/4にぶい橙・精良	10YR7/2にぶい黄橙～5YR7/4にぶい橙		
209	251	ⅠA	SE021		瓦質土器・擂鉢	(36.9)			(8.7)	2.5Y7/1灰白・やや粗く砂っぽい	N4灰		

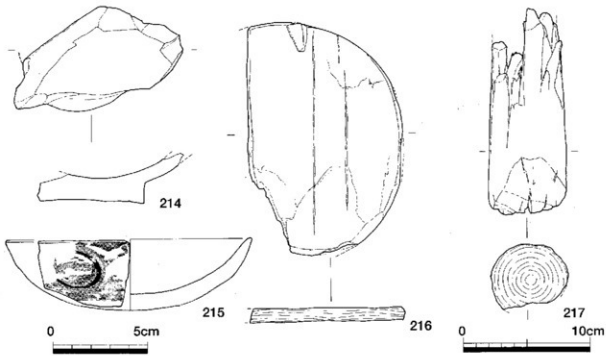


Fig.81　IA区 SE021出土木製品（S=1/2,杭 S=1/3）

ち込まれた可能性もあるが、その場合も畦畔に関連すると考えてよいだろう）。土層を観察すると（Fig.24下段）、杭列がSX106等と同様の蔀網状護岸遺構（腐食して不明確）層を切っている。これは位置的にSX105の延長である可能性があるが、竹材や斜めの木杭は明らかではなく、全く同じものかやや疑問がある。この層（遺構）の続きの一部とみられるものがSS004北側下部で平面的に検出しているが（Fig.23のアミ部分）、竹材ではなく草状のものを重ねた蔀網状のものである（**SX108**）。この東側対岸は不明で、土層では本田面の前に溝があり（**SD109**）、この平面的広がりは捉え切れなかった。ただし少なくとも、SD109は南側のSX106方向までは延びない。

・ＩＡ区**SD101**（Fig.4左半、Fig.24上段、10頁）は、SS005の下層で検出した。幅1.2～1.5m、深さ60～70cm、断面逆台形の溝である。重複するSD003の反対側の**SD102**（SS001より古い）と続くものか。覆土の多くは砂であり、灌漑水路であろう。これに伴う水田面は不明である。

これらＩＡ区東側の水田と灌漑関連施設は、度重なる雨により水没を繰り返したためと、工程的に余裕がなかったために（特にSX105などはＩＡ区の作業を終了させようとした頃に検出した）、十分な精査ができず、よく分からないままの部分も少なくない。検出した水田面の下層にも、灌漑施設の存在からより古い水田面が存在した可能性が高いが、調査できなかった。ただ、東側の中世末から近世前期の集落と同時期前後の生産遺構を確認できたことは一つの成果であろうと考える。

（６）掘立柱建物（SB）（Fig.27～65、14～19頁）

掘立柱建物は、現場において検討したものもあるが、特にＩＡ区では柱穴が多すぎて建物がかえって不明であった。そのため大部分は柱筋の検討により整理過程で図上復元したものである。ただし、柱穴は大部分の覆土を観察・記録したので（ＩＡ区は多くを半截して観察、ＩＢ区は一段下げ状態で観察）、覆土の色調や質が類似したもの（ＩＡ区は柱痕や抜き痕のあり方も含む）をおおむね選んでいる。また柱筋からは建物状でも、柱穴の深さが異なり建物として疑問なものもあるが、集落の景観復元のために積極的に提示しておきたい。ただし、束柱や庇、縁側などについては柱を拾いきれていないと考えられる。また、棚列状に復元できる柱筋もあるが、今回は提示しなかった。なお各図面（Fig.27～65）では、平面（1/75）と断面（1/60）とで縮尺が異なるので注意されたい

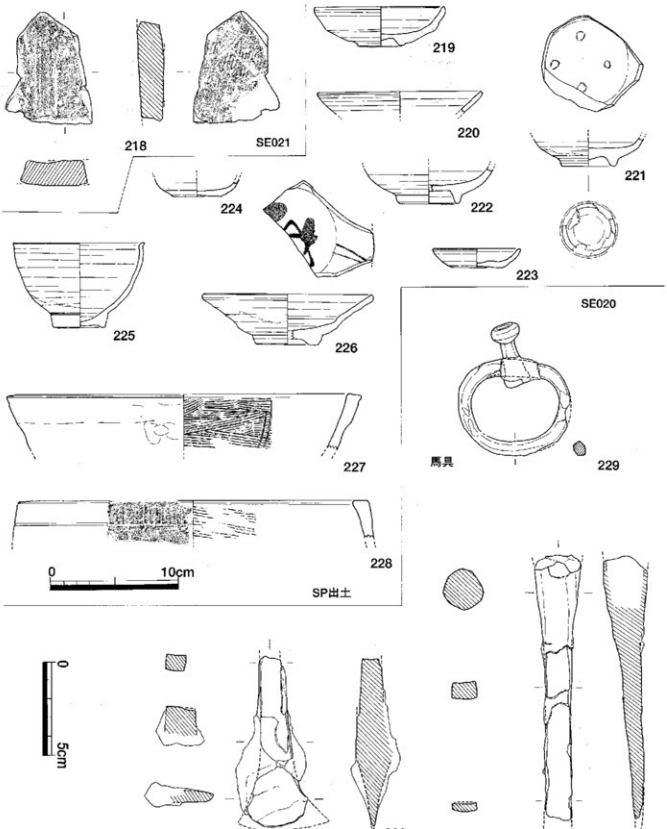


Fig.82　IA区 SE021・SE020、柱穴（SP）出土遺物（S=1/3,鉄 S=1/2）

（柱穴の深浅を強調するため）。また、今回は紙幅の都合上、各建物の説明があまりできないので（桁行×梁間のサイズと方位のみ記す）、詳しくは各図面を参照されたい。ご寛恕を請う。各建物の

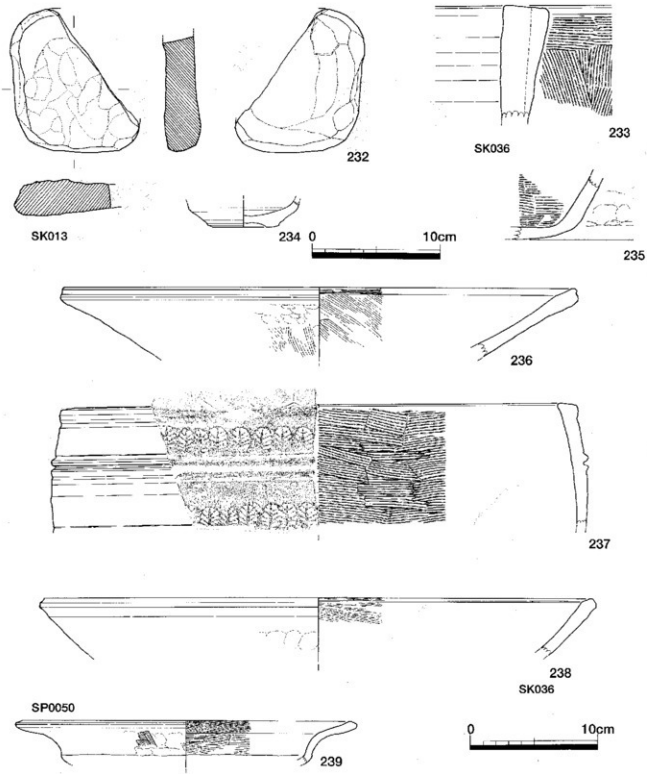


Fig.83 IB区 土坑（SK）、柱穴（SP）出土遺物（S=1/3）

位置はFig. 4（折込み）を参照されたい（SB01～10・SB12～19・SB41はⅠA区、SB22・SB25・SB27～40・SB42はⅠB区、SB11・20・21・23・24・26はⅠA区とⅠB区にまたがる）。

SB01（Fig.27）は、6.7×4.5m、N－84°－W（以下、Nは磁北である）。**SB02**（Fig.28）は、6.25×

表17. Fig.80出土遺物観察表(2)

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
210	247	ⅠA	SE021	際下(下層上)	瓦質土器・播鉢			(13.2)	(5.7)	密・石英、長石を含む	外2.5YR5/1黄灰 内2.5YR7/1～5/1灰白～黄灰		
211	258	ⅠA	SE021	下層(中～下)	瓦質土器・捏鉢	(30.3)			(6.7)	N3暗灰・精良	10YR8/1灰白		
212	259	ⅠA	SD021		土師器・坏			5.5	(1.5)	金雲母粒子わずかに含み精良	外7.5YR7/4鈍い橙 内7.5YR6/2灰褐		
213	256	ⅠA	SD021	下層(中～下)	土師質土器・鍋	(47.2)		(35.9)	(7.1)	精良・1～3mmの石英、長石少量含む	10YR4/1褐灰		

表18. Fig.81出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				木取	色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
214	1056	ⅠB	SE021	下層(中～下)	木製品・黒漆塗り椀			6.5	(2.85)	板目材			PL.8-10
215	1054	ⅠB	SE021	下層	木製品・黒地赤漆塗り椀	(13.0)		(7.1)	(3.8)	板目材	黒漆の地に赤漆を塗る		黒漆を用いて二重丸文
216	1065	ⅠB	SE021	下層	曲物底板	(13.45～)	厚0.7			針葉樹・板目材			PL.8-9
217	1095	ⅠB	SE021	下層	杭	長(16.3)	径6.2			芯持材			

表19. Fig.82出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
218	260	ⅠA	SE021	下層(中～下)	平瓦	長(9.95)	幅(6.8)	厚2.05		2.5YR8/1灰白・精良・やや軟質	N5灰		
219	296	ⅠA	SP1059		肥前系陶器Ⅰ期?皿	(10.35)		3.7	3.3	7.5Y/1灰白・精良・緻密薄明黄色	2.5GY6/1オリーブ灰不透明釉・氷裂	16c末～17c初	PL.8-6
220	323	ⅠA	SP13110		肥前系陶器Ⅱ期・皿	(12.1)			(1.8)	7.5YR5/4鈍い褐・やや粗	7.5Y8/1灰白不透明釉・表面ざらつく	17c前～中	
221	303	ⅠA	SP1142		肥前系白磁・碗			4.5	(2.35)	N8灰白・精良	10GY8/1明緑灰半透明釉・氷裂	17c初?	見込・畳付内輪上釉
222	319	ⅠA	SP1507(SK001)		肥前系陶器Ⅲ期・碗			5.0	(3.0)	10YR8/6黄橙・やや粗く軟質	7.5YR7/3鈍い橙不透明釉・内面氷裂	17c中～後	見込蛇の目釉剥ぎ
223	295	ⅠA	SP1041		土師器・皿	(6.9)		4.0	1.55	1～2mmの石英、長石、金雲母多く含みやや粗	7.5YR7/2明褐灰		
224	305	ⅠA	SP1195		土師器・皿			(3.8)	(1.45)	1mm前後の石英、金雲母微粒わずかに含む・精良	10YR7/3鈍い黄橙		
225	313	ⅠA	SP1342		肥前系陶器Ⅱ期・碗	(10.4)		4.1	6.75	5Y8/1灰白・やや粗	2.5GY8/1灰白不透明釉	17c前～中	PL.9-1
226	308	ⅠA	SP1246		肥前系陶器Ⅱ期・鉄絵皿	(13.4)		5.0	4.0	10YR8/1灰白・やや粗	5Y7/1灰白不透明釉(長石釉)	17c前～中	PL.9-2
227	310	ⅠA	SP1289		土師質土器・把手付鍋	(28.0)			(4.55)	精良	10YR5/2灰黄褐		
228	307	ⅠA	SP1239		瓦質土器・火舎	(27.7)			(3.15)	10YR8/2灰白・やや粗	10YR4/1褐灰		

表20. Fig.83出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
232	1040	ⅠB	SK043		石鍋?	幅(10.15)	長(11.4)	厚2.65		石材:石英斑岩?	やや赤味がかった淡灰色・大粒の石英、長石を主体とし、わずかに金雲母含む		
233	423	ⅠB	SK006	No2	瓦質土器・大鉢				(8.9)	10YR7/1灰白・石英、長石、金雲母を含む・精良	2.5YR6/1黄灰		
234	431	ⅠB	SK013		肥前系陶器Ⅱ期・碗			(5.6)	(2.15)	5YR5/4鈍い赤褐・白色粒子含みやや粗	2.5YR8/1灰白不透明釉・素肉粉っぽい・外面露胎	17c前～中	
235	421	ⅠB	SK036	中・上	瓦質土器・火舎?				(5.2)	10YR8/1灰白・やや砂質	10YR6/1褐灰		
236	422	ⅠB	SK036	中・上	土師質土器・鍋	(40.8)			(5.4)	10YR8/3浅黄橙・2mm前後の石英、長石、金雲母少量含む	10YR5/1褐灰		
237	420	ⅠB	SK036	中・上	瓦質土器・火舎	(40.9)	(42.5)		(9.55)	10YR8/1灰白・やや砂質	N5灰		
238	425	ⅠB	SK028		土師質土器・鍋	(43.8)			(4.5)	1mm前後の石英、長石、金雲母少量含む・精良	外7.5YR4/3褐 内10YR8/1灰白		
239	442	ⅠB	SP0050		土師器・高坏	(26.9)			(3.35)	1～3mmの石英、長石、金雲母を少量含む・精良	外7.5YR6/6橙 内7.5YR7/2明褐灰	弥生後期	

表21. Fig.84出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
240	326	ⅠB	SB001	東西ベルト上層	肥前系陶器Ⅱ期・皿	(13.8)			(2.06)	2.5Y8/2灰白・やや砂っぽい	5Y8/1灰白不透明釉	17c前～中	
241	329	ⅠB	SB001	東上層	陶器・瓶?	(6.7)			(1.25)	N7灰・やや砂質	5YR4/4鈍い赤褐不透明釉		
242	327	ⅠB	SB001	東上層	肥前系?白磁・皿			(4.9)	(2.0)	N8灰白・精良・緻密 7.5YR8/4浅黄橙	5GY8/1灰白透明釉・氷裂	17c前?	見込砂十目?
243	330	ⅠB	SB001	東上層	瓦質土器・足釜				(12.7)	1～2mmの砂粒わずかに含む・精良	10YR8/1灰白～N3暗灰脚部のみ残存		PL.9-4
244	333	ⅠB	SB002	上層	白磁・平底皿(口禿げ)			(7.3)	(1.3)	5Y8/1灰白・やや粗・黒色粒子含む	2.5GY8/1灰白透明釉外底部露胎	14c	
245	334	ⅠB	SE002	上層	土師質土器・釜				(4.03)	精良	10YR6/3にぶい黄橙		
246	335	ⅠB	SE003	井筒内下	土師器・坏			6.5	(1.45)	金雲母の微粒をやや多く含む・精良	10YR6/2灰黄褐		
247	336	ⅠB	SE003	井筒内下	土師器・皿	(5.7)		4.9	1.6	金雲母・石英の微粒子を含む・精良	10YR7/2鈍い黄橙		PL.9-8

4.75m（縁ないし庇も含む）、N－2°－W。**SB03**（Fig.29）は、2.85×2.7m、N－61°－W。**SB10**（Fig.30）は、3.3×2.0m、N－18°－E。**SB04**（Fig.31）は、3.85×2.35m、N－78°－E。**SB06**（Fig.32）は、3.95×2.0m、N－87°－E（以上は14頁）。

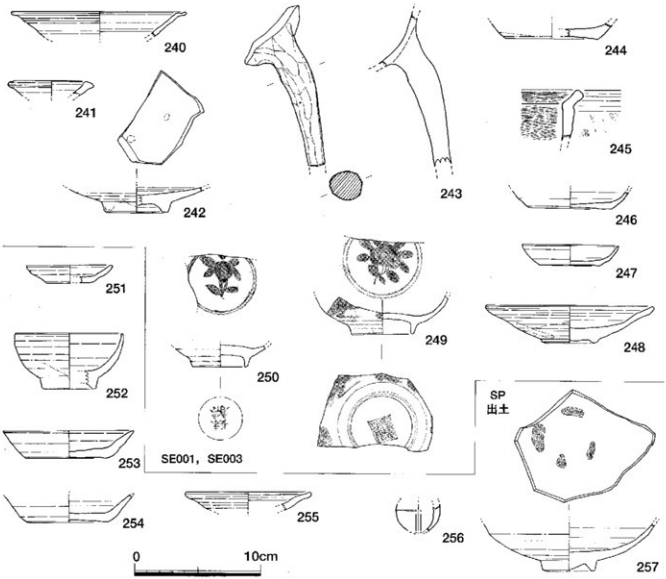


Fig.84 IB区 井戸（SE）、
柱穴（SP）出土遺物（S=1/3）

SB09（Fig.33）は、5.15×4.3m、N−88°−E。**SB08**（Fig.34）は、5.15×3.85m、N−64°−W。**SB05**（Fig.35）は、4.9×2.25m、N−71°−E。**SB07**（Fig.36）は、3.0×2.2m、N−88°−W。**SB12**（Fig.37）は、2.75×2.25m、N−84°−W。**SB41**（Fig.38）は、3.15×2.95m、N−88°−W。**SB27**（Fig.39）は、2.8×2.6m、N−5.5°−W（以上は15頁）。

SB11（Fig.40）は、3.75×3.65m、N−10°−E。**SB18**（Fig.41）は、3.1以上（南北が桁行と推定）×3.6m、N−9°−E。**SB16**（Fig.42）は、3.9×3.8m、N−6.5°−E。**SB17**（Fig.43）は、4.0×2.65m、N−70°−W。**SB15**（Fig.44）は、4.0×3.55m、N−19.5°−E。**SB13**

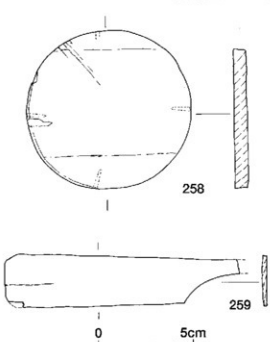


Fig.85 IB区 SE003出土木製品（S=1/2）

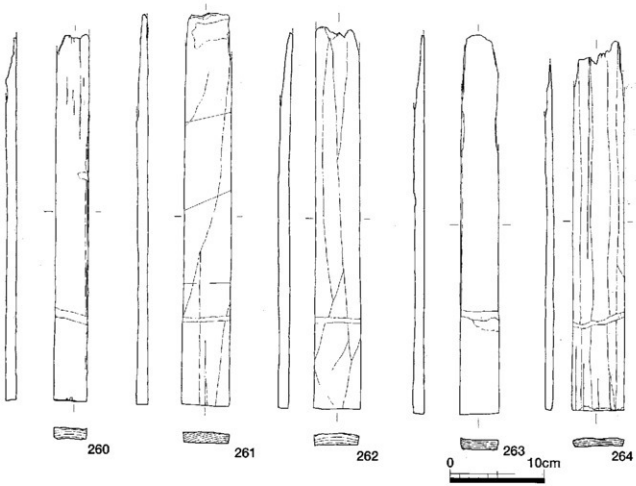


Fig.86　IB区 SE001井戸枠桶組板材（S=1/4）

（Fig.45）は、2.45×2.2m、N−87°−W（以上は16頁）。

SB20（Fig.46）は、7.25×3.42m、N−5.5°−E。**SB30**（Fig.47）は、4.85×3.9m、N−10°−E。**SB32**（Fig.48）は、5.2×2.75m、N−69°−W。**SB14**（Fig.49）は、2.8×2.7m、N−5°−E。**SB36**（Fig.50）は、3.3以上×2.0m以上、N−59°−W（以上は17頁）。

SB24（Fig.51）は、6.9×1.4m以上、N−7.5°−E。**SB22**（Fig.52）は、6.4×2.1m以上、N−16°−E。**SB25**（Fig.53）は、2.6以上×1.65m、N−53°−E。**SB19**（Fig.54）は、3.75×1.95m、N−4.5°−E。**SB37**（Fig.55）は、2.8×2.35m、N−31°−E。**SB42**（Fig.56）は、3.5以上×1.8m以上、N−57.5°−W。**SB28**（Fig.57）は、4.7（以上）×1.6m以上、N−54°−W。**SB21**（Fig.58）は、2.15×1.65m、N−85°−W。**SB35**（Fig.59）は、2.35×1.75m、N−61°−W（以上は18頁）。

SB31（Fig.60）は、3.65×2.35m、N−45°−W。**SB26**（Fig.61）は、4.55×2.4m、N−80°−W。**SB40**（Fig.62）は、1.9×0.65m、N−28.5°−E。**SB23**（Fig.63）は、3.6（以上？）×1.35m以上、N−45°−W。**SB38**（Fig.64）は、2.75×2.0m、N−29°−E。**SB34**（Fig.65）は、3.2×2.25m、N−28°−E（以上19頁）。

以上の建物の時期については、柱穴の遺物を詳しく検討していないので正確なことは言えないが、その大部分が16世紀後半から17世紀中頃までのものとみて大過ない（ⅠA区柱穴出土遺物はFig.82に、ⅠB区柱穴出土遺物はFig.84に一部を図化提示している）。方位の傾向によってグルーピングできるようであり、時期類別は溝状遺構の方位と合わせて検討すべき課題である（なお建物方位は長軸＝桁行を基準とした）。ただし、ⅠA区の多くの建物と、ⅠB区の多くの建物は方位が異なる群でも同一時期があるとみられ（17世紀前半～中頃）、同じ村落内でも屋敷地により建物方位が異なる可能性が

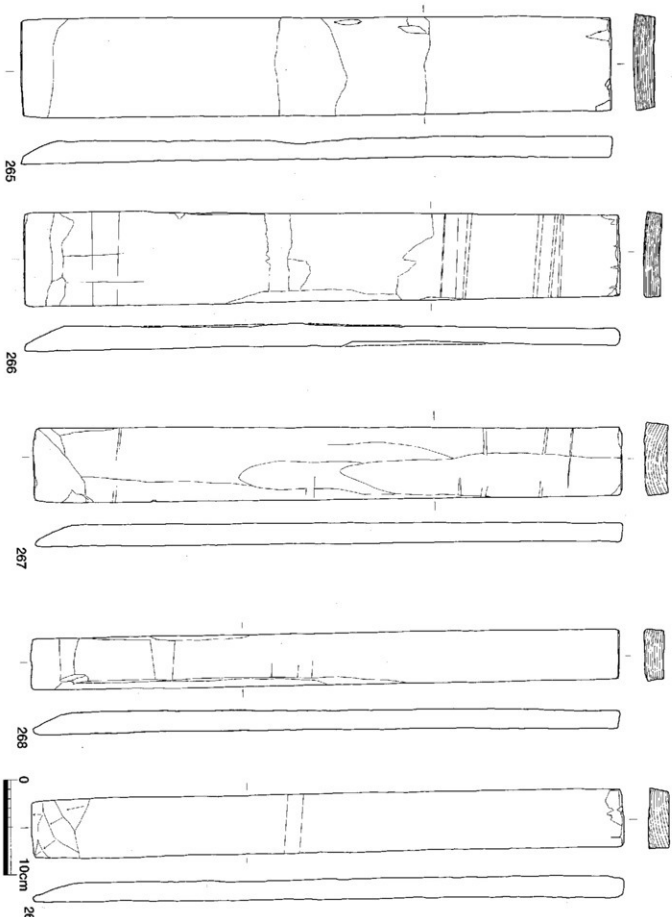


Fig.87　IB区 SE003井戸枠桶組板材（S=1/4）

表22. Fig.84出土遺物観察表(2)

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
248	325	ⅠB	SE004	井筒内下	肥前系陶器Ⅱ期・皿	(13.4)		3.4	3.0	5YR6/8橙・精良	5Y8/1灰白不透明釉(白いナマコ入る)	17c前～中	PL.9-6
249	342	ⅠB	SE003	井筒内下	染付磁器(青花)・碗			3.0	(3.15)	N8灰白・精良	7.5GY8/1明緑灰透明釉	16c末～17c初	高台内乃銘 PL.9-5
250	341	ⅠB	SE003	井筒内下	染付磁器(青花)・碗			4.4	(1.75)	N8灰白・精良	わずかに青味を帯びた灰白色透明釉	16c末～17c初	PL.9-7
251	357	ⅠB	SP004		土師器・皿	(6.8)		(3.4)	1.45	金雲母微粒を含む・精良	10YR8/2灰白		
252	437	ⅠB	SP0030		肥前系陶器・碗	(8.5)		(4.2)	4.45	2.5Y8/2灰白・やや粗	2.5Y8/2灰白透明釉・細かな氷裂		
253	427	ⅠB	SP0006		土師器・坏	(10.3)		4.9	2.2	金雲母の微粒をやや多く含む・精良	10YR8/4浅黄橙		PL.9-8
254	436	ⅠB	SP0006		土師器・坏			6.5	(3.2)	精良・金雲母の微粒をやや多く含む	7.5YR7/4鈍い橙		
255	440	ⅠB	SP0033		肥前系陶器Ⅱ期・皿	(10.0)			(1.5)	2.5YR7/1灰白・やや粗く砂っぽい	7.5YR7/2灰白不透明釉	17c前～中	
256	434	ⅠB	SP010	掘り	土鈴		(3.6)		(2.1)	精良	7.5YR8/3浅黄橙		
257	441	ⅠB	SP0049		李朝陶器?鉢			4.2	(3.9)	2.5Y8/2灰白・精良・軟質	2.5Y8/2灰白不透明釉・見込に溶けきらず散る・畳付釉削り取り	17c	見込砂目

表23. Fig.85出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	木取	色調	時期	備考
258	1067	ⅠB	SE003	井筒内	曲物底板(柄杓?)	8.75×8.4	厚0.75			針葉樹・柾目材			4箇所に竹釘及びその痕跡。PL.10-3
259	1058	ⅠB	SE003	井筒内	板状木製品	長(12.45)	幅2.9	厚0.25		広葉樹			PL.10-4

表24. Fig.86出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 長	幅	厚	木取	色調	時期	備考
260	1089	ⅠB	SE001		桶・側板(井筒)	(38.7)	3.55	1.2	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る
261	1090	ⅠB	SE001		桶・側板(井筒)	(41.45)	5.15	1.3	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る
262	1091	ⅠB	SE001		桶・側板(井筒)	(40.3)	5.0	1.2	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る
263	1093	ⅠB	SE001		桶・側板(井筒)	(40.0)	4.15	1.2	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る
264	1094	ⅠB	SE001		桶・側板(井筒)	(39.15)	5.6	0.9	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る

表25. Fig.87出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	幅	厚	木取	色調	時期	備考
265	1084	ⅠB	SE003		桶・側板(井筒)	62.7	10.5	2.3	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る
266	1085	ⅠB	SE003		桶・側板(井筒)	63	10.0	2.5	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る
267	1086	ⅠB	SE003		桶・側板(井筒)	62.45	8.0	2.3	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る
268	1087	ⅠB	SE003		桶・側板(井筒)	62.4	5.6	2.2	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る
269	1088	ⅠB	SE003		桶・側板(井筒)	62.7	6.5	2.2	針葉樹・板目材			外面に箍痕跡残る

表26. Fig.88出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
270	349	ⅠA	SD004	2区瓦礫	肥前系陶器Ⅱ期・皿			(4.7)	(3.7)	2.5Y8/2灰白・やや粗	10YR8/2灰白不透明釉	17c前～中	見込砂目
271	270	ⅠA	SD004	2区	染付磁器(青花)・皿	(10.0)		(3.1)	2.85	5Y8/1灰白・精良	5GY7/1明オリーブ灰透明釉厚くかかる・光沢強い・氷裂	16c末～17c初	
272	273	ⅠA	SD004	2区	肥前系陶器Ⅱ期・皿	(14.0)			(2.4)	7.5Y8/1灰白・精良	5Y7/2灰白透明釉	16c末～17c初	
273	276	ⅠA	SD004	1区	陶器・碗(茶子)			4.5	(1.2)	10YR7/2鈍い黄橙・精良	5Y7/2灰オリーブ半透明釉		
274	271	ⅠA	SD004	2区	土師器・皿	(7.0)		(5.5)	1.2	金雲母の微粒をわずかに含む・精良	7.5YR8/3浅黄橙		
275	280	ⅠA	SD004	最終ベルト	瓦質土器・片口擂鉢	(29.7)			(3.85)	2.5Y4/1黄灰・精良	10YR7/2鈍い黄橙		
276	274	ⅠA	SD004	2区	土師質土器・盃	(14.2)			(5.75)	粒子細かく精良	5YR7/3		
277	281	ⅠA	SD004	3区	丸瓦	長(10.5)	幅(6.7)	厚1.8	高(2.8)	精良	2.5Y7/1灰白		
278	279	ⅠA	SD004	畦畔ベルト	弥生土器?壺			(12.4)	(5.7)	2～3mmの石英、長石やや多く含む	7.5YR6/6橙	中期後半?	
279	283	ⅠA	SD012	上層	肥前系青磁・皿	(12.6)		4.6	3.2	5Y8/1灰白・ややざらつく	7.5GY7/1明緑灰半透明釉・細かな氷裂	17c前	高台内砂付着
280	1032	ⅠA	SD012	西	砥石?	長(5.3)	幅(6.0)	厚(2.1)		石材:石英粗面岩?	黄色っぽい淡灰色・粒子細かく密・流状構造・軟質・使用痕無し		
281	284	ⅠA	SD012	東	弥生土器?支脚?			(15.6)	(5.9)	2mm前後の石英、長石少量含む・精良	7.5YR8/3浅黄橙		

表27. Fig.89出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
282	354	ⅠB	SD004		肥前系陶器Ⅱ期・擂鉢	(30.3)			(6.75)	5YR5/4鈍い赤褐・やや粗	2.5YR3/2暗赤褐不透明釉(鉄釉)	17c前～中	
283	360	ⅠB	SD004		瓦質土器・擂鉢	(26.0)			(8.1)	砂粒を少量含み精良・やや軟質	10YR8/2灰白		
284	350	ⅠB	SD004		肥前系陶器?大甕				(4.3)	2.5Y8/1灰白・やや粗く軟質	2.5YR3/4暗赤褐不透明釉		
285	344	ⅠB	SD004	Ⅱ区	染付磁器(青花)・碗			6.0	(2.2)	5Y8/1灰白・精良	10BG7/1明青灰透明釉・やや発泡	16c末～17c初	PL.9-9

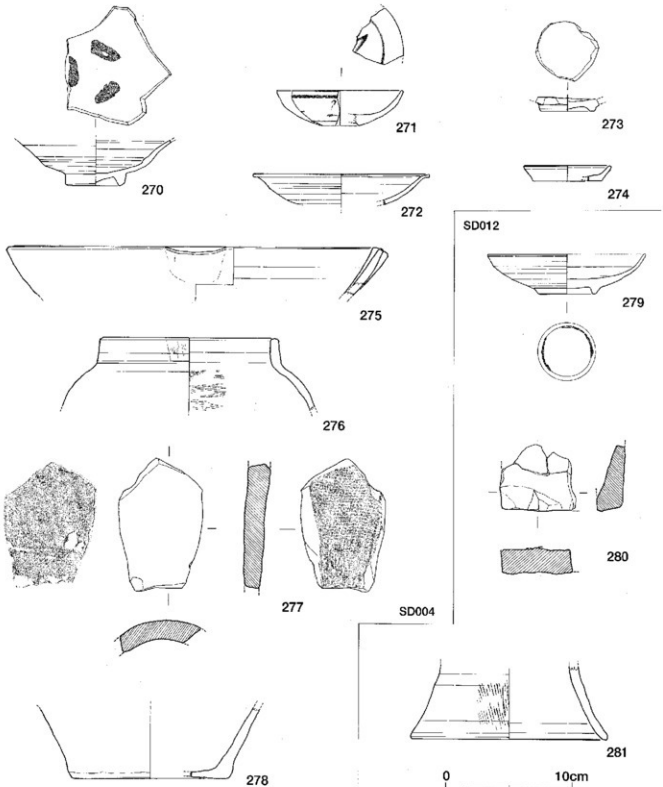


Fig.88 IA区 溝状遺構（SD）出土遺物（S=1/3）

高いことに注意が必要と思われる。また建物の機能で言えば、規模的に大きいSB01、SB02、SB09、SB08、SB18、SB16、SB20、SB24、SB22は母屋（主屋）になる可能性がある。SB40は周囲の溝との関係から門柱であろう。他については納屋などの他の機能の建物であろう。（→14～19頁）

4．Ⅱ区の検出遺構（Fig.67、20頁）（PL.6-7～9、PL.7-1～2）

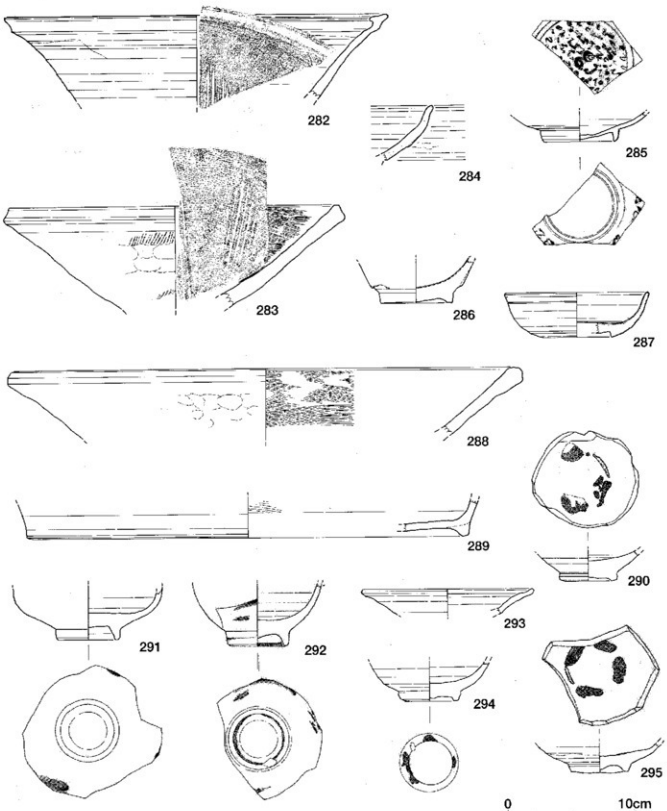


Fig.89　IB区 SD004出土遺物（S＝1/3）

Ⅱ区は、削平されているためか検出遺構は少なく、検出時に遺構の可能性ありとして掘削した黒色上のピット状の多くは植物の生痕などの自然のシミであった（Fig.67では、明らかに遺構ではないも

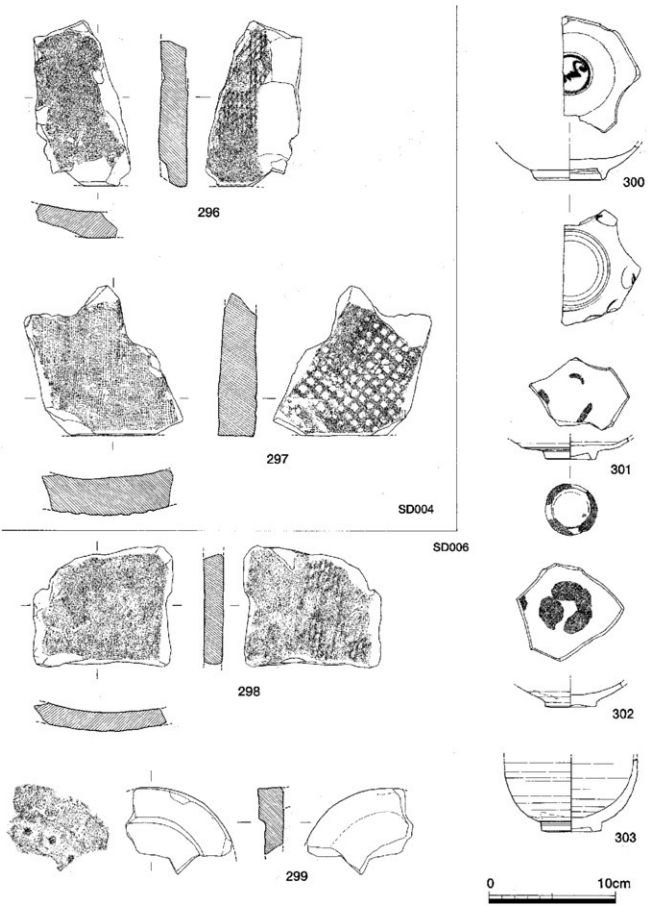


Fig.90　IB区 SD004・SD006出土遺物（S=1/3）

表28. Fig.89出土遺物観察表(2)

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
286	353	ⅠB	SD004	Ⅰ区北	陶器・碗			5.7	(3.45)	10YR7/4にぶい黄橙・やや粗く軟質	茶褐色透明釉をベースに灰色のナマコ流れる・氷裂・厚く剥がれやすい		
287	348	ⅠB	SD004	Ⅱ区北部	龍泉系青磁・皿	(11.5)		(5.5)	3.55	7.5Y8/1灰白・精良	5GY6/1緑灰透明釉	16c	
288	358	ⅠB	SD004	Ⅲ区	土師質土器・鍋	(40.7)			(5.45)	1mm前後の石英粒わずかに含む・精良	外7.5YR5/6明褐 内10YR5/1褐灰		
289	350	ⅠB	SD004	ベルト3	瓦質土器・火鉢?			(34.8)	(2.95)	精良・やや軟質	外7.5YR7/3にぶい橙 内 7.5YR6/2灰褐		
290	352	ⅠB	SD004	Ⅱ区	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.5	(2.45)	7.5YR6/3にぶい褐・精良	10Y7/1灰白不透明釉	17c前～中	見込砂目
291	347	ⅠB	SD004	Ⅲ区	肥前系染付磁器・碗			5.0	(4.15)	N8灰白・やや砂っぽい	5G7/1明緑灰半透明釉	17c中	
292	345	ⅠB	SD004	Ⅲ区	肥前系染付磁器・碗			4.8	(4.95)	7.5Y8/1灰白・精良	10Y8/1灰白透明釉・氷裂	17c中	
293	369	ⅠB	SD004	Ⅰ区	肥前系陶器Ⅱ期・皿	(13.7)			(2.0)	7.5Y7/1灰白・精良	2.5GY7/1明オリーブ灰半透明釉・氷裂	17c前～中	
294	346	ⅠB	SD004	Ⅱ区	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.6	(3.05)	5Y7/1灰白・精良	7.5Y7/2灰白不透明釉	17c前～中	高台砂目
295	277	ⅠB	SD004	4区北	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.5	(2.35)	2.5Y7/1灰白・精良	5Y6/2灰オリーブ半透明釉・氷裂	17c前～中	見込砂目

表29. Fig.90出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	器高	胎土	釉・外面色調	時期	備考
296	362	ⅠB	SD004	Ⅳ区	平瓦	長(13.15)	幅(7.55)	厚2.25		精良	7.5YR8/1～8/2灰白		
297	361	ⅠB	SD004	Ⅱ区	平瓦	長(11.9)	幅(12.5)	厚3.0		わずかに石英粒を含む・精良	5Y8/1灰白		
298	366	ⅠB	SD006	Ⅱ区	平瓦	長(9.6)	幅(11.0)	厚1.55		2～3mmの石英、長石やや多く含む・やや軟質	N6灰		
299	378	ⅠB	SD006	Ⅲ区	軒丸瓦	長(6.9)	幅(8.4)	厚2.05	径(13.1)	1～3mmの石英粒やや多く含む	10YR5/2灰黄褐		
300	369	ⅠB	SD006	北(SK023下)	染付磁器(青花)・碗			5.7	(2.8)	2.5Y8/2灰白・精良	2.5Y8/1灰白不透明釉・十分に融けきらず濁っている	17c前?	見込蛇の目釉剥ぎ PL.9-10
301	382	ⅠB	SD006	Ⅲ区(石上)	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.0	(1.8)	7.5Y8/1灰白・精良	7.5Y8/1灰白半透明釉・氷裂	17c前～中	高台・見込砂目
302	370	ⅠB	SD006	Ⅲ区石群下層	肥前系陶器Ⅱ期・皿			4.1	(2.05)	2.5Y7/1灰白	10Y7/1灰白不透明釉	17c前～中	見込砂目
303	383	ⅠB	SD006	Ⅲ区石群下層	肥前系陶器Ⅲ期?・碗			4.3	(5.8)	2.5Y7/1灰白・精良・黒灰色粒子含む(露胎部赤褐色)	10Y7/1灰白半透明釉(石灰釉)・細かい氷裂	17c中～後?	

のを排除し、遺構の可能性のあるものを図示したが、残りのピットも人為的遺構としては怪しいものもなお含んでいる)。以下、主要な遺構について記述する。

・**Ⅱ区SE003**（Fig.66、19頁）（PL.6-7）は、2.5×2.1mの長方形、深さ200cmを測る。深さ135cmの部分で北側にテラスを作り、南側1.2×1.3m方形部分のみさらに落込むのは、井戸側があった痕跡とも考えられるが、井戸側自体の痕跡は分からなかった（土層から、井戸側を全て外してから埋戻した可能性がある)。出土遺物は非常に少ないが、上層から肥前系陶器が出土し（Fig.97-358)、17世紀前半頃の遺構である。また下層（テラス面以下）の黒色粘土層土壌の花粉分析を行なったが（自然科学分析の章参照)、その特徴から、より古い時代の包含層の土が、再堆積したものと考えられる。

・**Ⅱ区SP002**（Fig.67中央、20頁）（PL.7-2）は、径40cmの黒褐色土を覆土とする柱穴。上面で古式土師器の甕の破片を出土（Fig.97-359)。古墳時代前期後半。風倒木SX001を切り込む**SP023**が同覆土で対応するか。削平が著しいが、竪穴住居の二本主柱かもしれない。

・**Ⅱ区SD006・SD007**（Fig.67、20頁）は、途中で途切れるが同一線上であり、南西から北東へ延びる同一の溝が削平されたものと考えられる。幅は50cm前後だが、深さは残りが悪く10cm未満。黒褐色土の覆土で、古墳時代から古代のものであろう。包含層SX010・011を切ると考えたが、関係性は微妙である。SD007は北側で西へ屈曲する可能性がある。出土遺物はほとんどない。

・**Ⅱ区SX001・SX004・SX008**（Fig.67、20頁）（PL.6-8,9）は、検出時不明確であったが、周囲の地山より暗く汚れた土であったり、黒色土がドーナツ状にプラン縁辺にみられたりしたもの。縄文時代の遺構の可能性も考え、ベルトを残しながら十字にトレンチ掘削をした。覆土は全体的にかなりしまっており、土層を観察すると地山の黄褐色土と黒色・暗褐色土が逆転していたりしたため、土層図のみ残し、風倒木の痕跡と判断して全掘はしなかった。なお、**SX005**はSX004の複雑な堆積の一部

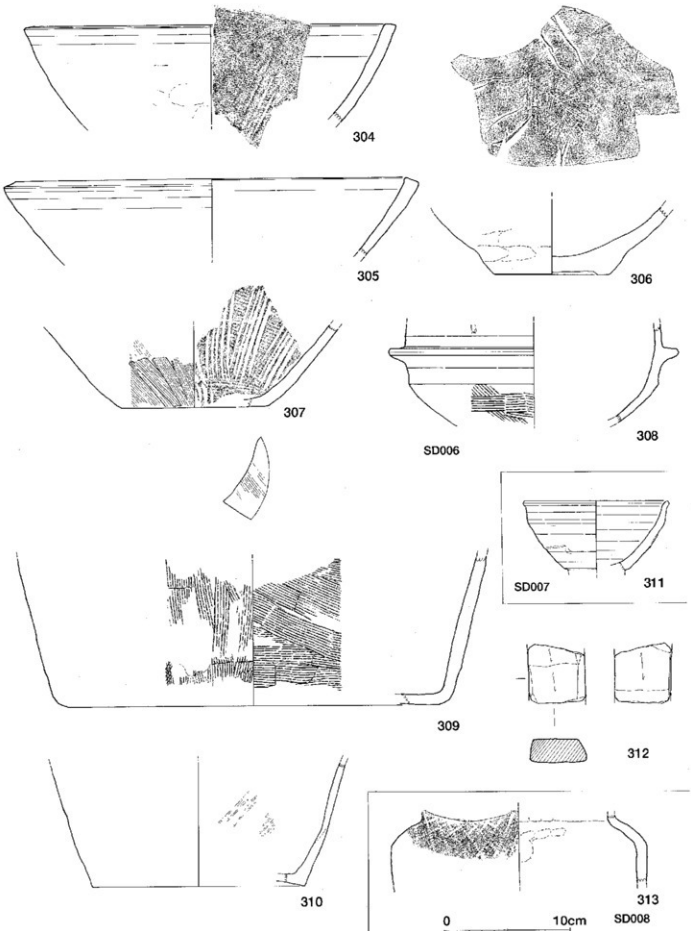


Fig.91　IB区 SD006・SD007・SD008出土遺物（S=1/3）

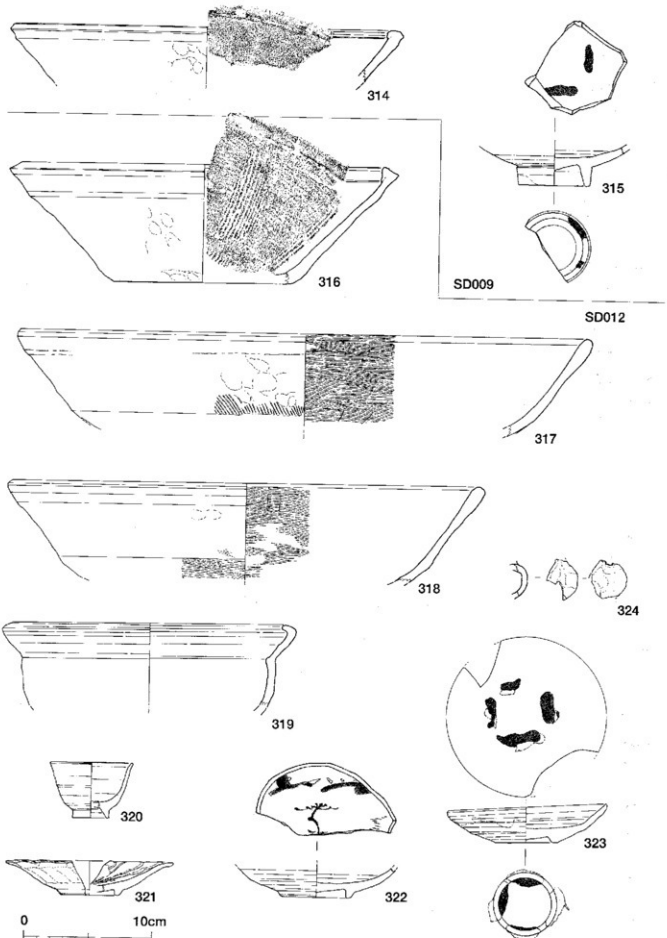


Fig.92　IB区 SD009・SD012出土遺物（S=1/3）

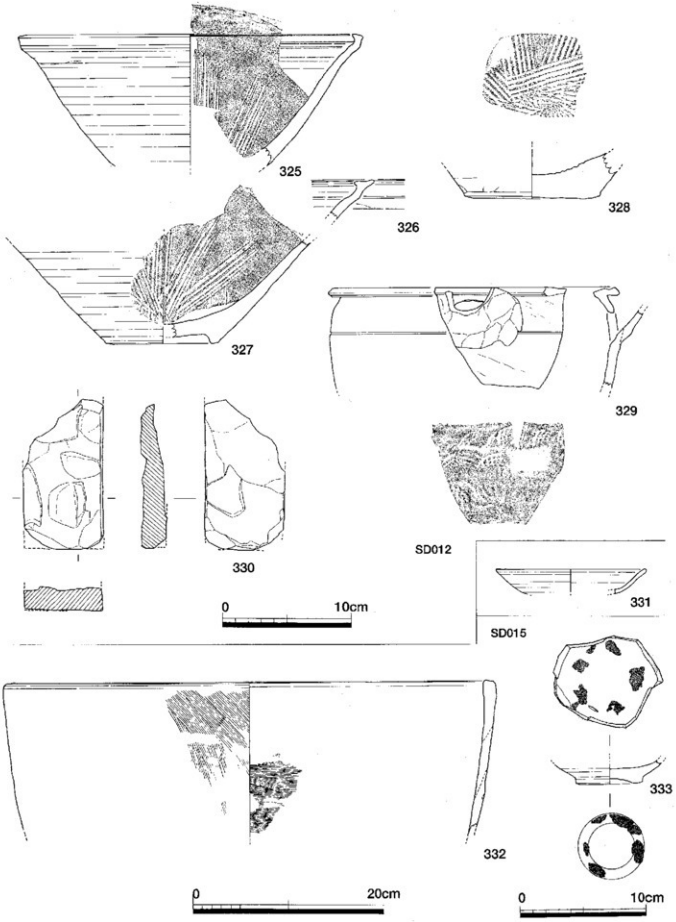


Fig.93　IB区 SD012・SD014・SD015出土遺物（S＝1/3,一部 S＝1/4）

（暗褐色土）を掘ったもの。いずれも出土遺物は認められない。

・Ⅱ区SX010・011、SX019・020（Fig.67、20頁）は、暗褐色土～黒色土の遺物包含層。SX010とSX011はⅡ区中央北側の、SX019とSX020はⅡ区西側に広がる。いずれも地山との境界が不明瞭で、わずかな凹みである。遺物は縄文時代の石器・土器、弥生土器、古墳～平安時代の土師器・須恵器を含むが、いずれも小片で図示に堪えるものは少ない。近世の肥前系陶器片もわずかに含み（検出時の混入のおそれもあるが）、推定古墳時代の遺構の削平状況や、近世以降の旧水田層直下であることも考慮すると、これらの大部分は二次的な包含層である可能性が高い。

5．出土遺物（Fig.68～99、21～58頁）（PL.7～10）

本調査の出土遺物の多くは、16世紀末から17世紀中頃にかけてのものであるが、本地域（福岡市城）では、この時期の資料の提示は意外にまだ少なく、今回の調査では良好な資料を得ることができたので、なるべく多くの遺物を図示しようと試みた。しかしそのために、遺構の報告の頁数とのバランスを欠くことになり、各文章と挿図（Fig.）の位置が大幅に食い違ってしまうという編集上の不手際を生じてしまい、非常に読みにくくなってしまった点をお詫び申し上げたい。なお、紙幅の都合から（これも編集上の不手際であるが）、各遺物の詳しい説明は省略し、その代わりとして詳細な観察表を掲載した（表1～37、23～58頁）。以下の報告は、特記すべき遺物や観察表を付加しなかった遺物についてのみ記述する。また、各主要遺構の報告において、遺物の出土状況と出土遺物の時期的傾向はすでに記述している。なお、図版PL.7～10と巻頭図版３（カラー）には主要遺物の写真を掲載した。写真

表30. Fig.91出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
304	375	ⅠB	SD006	Ⅱ区	土師質土器・擂鉢	(29.3)			(7.8)	2mm前後の石英、長石わずかに含む・精良	7.5YR8/3浅黄橙		
305	374	ⅠB	SD006	Ⅱ区(石上・下層)	土師質土器・擂鉢	(32.7)			(6.25)	2mm前後の石英、長石、角閃石少量含む・精良	10YR7/3にぶい黄橙		
306	379	ⅠB	SD006	Ⅱ区(石上・上層)	陶器・擂鉢			9.3	(5.5)	やや粗	無釉　7.5YR7/3にぶい橙		
307	368	ⅠB	SD006	北(SK023)	瓦質土器・擂鉢			(10.3)	(6.45)	細かな砂粒わずかに含むが精良	外2.5Y5/1黄灰 内5Y8/1灰白		
308	377	ⅠB	SD006	Ⅱ区(石上・上層)	瓦質土器・釜		(23.0)		(7.8)	粒子細かく精良	外2.5Y5/1黄灰 内2.5Y7/1灰白		
309	372	ⅠB	SD006	Ⅱ区(石・下層)	瓦質土器・火鉢			(31.0)	(11.8)	2.5Y8/2灰白・精良・やや軟質	2.5YR6/1黄灰		
310	371	ⅠB	SD006	Ⅱ区石層下	肥前系陶器・甕			(16.8)	(9.75)	2.5YR6/2灰赤・精良	5YR3/3暗赤褐不透明釉・光沢無し		
311	384	ⅠB	SD007	南(SD006下)	陶器・天目碗	(11.6)		(4.5)高台径	(5.6)	7.5YR8/2灰白・やや粗く軟質	2.5YR2/3極暗赤褐～2.5YR4/4にぶい赤褐不透明釉・釉下白化粧		瀬戸か? PL.10-1
312	1038	ⅠB	SD006	Ⅱ区石群下層	砥石	長(4.7)	幅4.6	厚2.35		石材は石英粗面岩?	灰色味を帯びた灰色・粒子細かく密		
313	395	ⅠB	SD008	Ⅰ区南	瓦質土器・湯釜		(20.3)		(5.4)	精良	7.5Y2/1黒		

表31. Fig.92出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
314	387	ⅠB	SD009	Ⅱ区	瓦質土器・擂鉢	(31.0)			(4.3)	粒子細かいがやや粉っぽく軟質	外N4灰 内2.5YR8/1灰白		
315	386	ⅠB	SD009	Ⅱ区	肥前系陶器Ⅱ期・鉢			5.7	(3.25)	10YR7/4にぶい黄橙・精良	10YR8/3浅黄橙不透明釉	17c前～中	高台畳付・見込砂目
316	391	ⅠB	SD012	Ⅰ区	瓦質土器・擂鉢	(30.6)		(14.1)	9.4	2mm前後の石英やや多く含む・精良	外5Y4/1灰 内10YR8/1灰白		
317	393	ⅠB	SD012	Ⅲ区	土師質土器・鍋	(45.4)			(7.85)	精良・やや軟質	外7.5YR4/1褐灰 内2.5Y8/1灰白		
318	403	ⅠB	SD012	Ⅲ区	土師質土器・鍋	(37.7)			(7.6)	7.5YR7/4にぶい橙・精良・2mm程度の石英粒含む	5Y5/1灰		
319	397	ⅠB	SD012	SD012・014・SE001検出	瓦質土器・足釜	(23.1)			(6.55)	2.5Y8/2灰白・精良	2.5Y7/1灰白～N3暗灰		PL.10-6
320	398	ⅠB	SD012	SD012・014・SE001上	肥前系白磁・壺	(5.5)		(2.9)	4.4	7.5Y8/1灰白・精良	2.5GY8/1灰白透明釉	17c前～中	
321	433	ⅠB	SD012	Ⅳ区上層	白磁・皿	(13.2)		(4.8)	2.7	N8灰白・精良	青味を帯びた灰白色透明釉・畳付釉剥ぎ取り		輪花状口縁
322	400	ⅠB	SD012	Ⅳ区下層?	肥前系染付磁器・皿			5.7	(2.5)	N8灰白・精良	わずかに緑色を帯びた灰白色透明釉	17c前	
323	408	ⅠB	SD012	Ⅲ区	肥前系陶器Ⅱ期・皿	12.7		5.0	2.55～3.15	10YR5/1褐灰 素地部7.5YR5/4にぶい褐	10YR4/2灰黄褐不透明釉(灰白色のナマコ入る)	17c前～中	見込内・見込砂目 PL.10-5

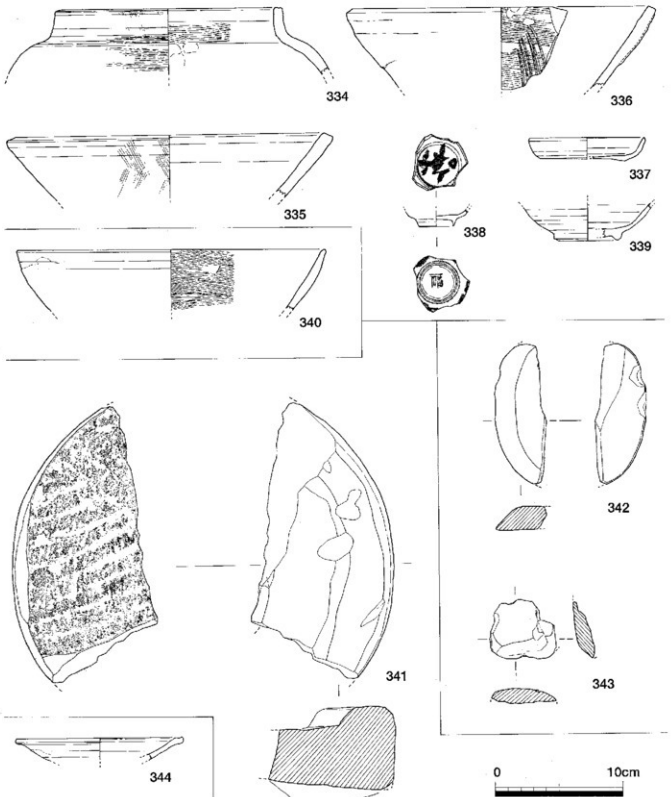


Fig.94　IB区 SD020・SD004、検出時出土遺物（S=1/3）

において、例えば「82-229」とあるのは、「Fig.82」の番号「229」の遺物である。また観察表において「整理番号」とあるのは、将来的に埋蔵文化財センターへ収蔵される場合の遺物収蔵番号である。

出土遺物の全体的な概要は以下の通りである。I区の出土遺物は、中世後期から近世前期（15～17世紀）の土師器、瓦質土器、輸入陶磁器（明代の染付、龍泉窯系青磁、朝鮮陶磁など）、国産陶器

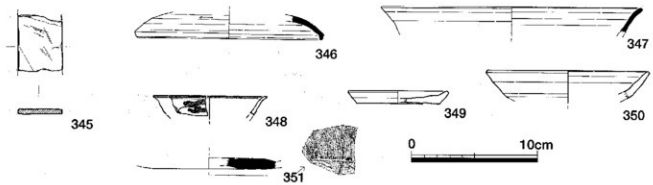


Fig.95　IA区 西側水田・灌漑施設出土遺物（S=1/3）

（初期肥前陶磁など）、石製品（砥石、台石、石鍋、石臼）、鉄製品、青銅製品（煙管）、木製品（井戸枠部材、板状製品、井堰杭材など）があり、一部古代から中世前期の土器・陶磁器が出土している。なおわずかに古墳時代後期の円筒埴輪片が1点出土している（Fig.77）。次に、Ⅱ区の出土遺物は、主に包含層から、縄文土器、縄文時代の石器、古墳時代の土師器、古代の須恵器を検出し、井戸からは近世の陶磁器を検出した。なお、出土総量は調査区全体でパンケース50箱程度である。大部分はⅠ区の出土であり、Ⅱ区の遺物はパンケース2箱程度である。

Fig.68～77はＩＡ区SX001の出土遺物である。遺物は中世末（16世紀後半）から近世前期を主体とし、盛土途中では少数が散漫に出土するが、やや多く出土するのは上下の礫群層とその直上の層である。出土状況を見ると、すでに地山（旧表土）直上の下部礫群にわずかながら17世紀末から18世紀前半までの遺物を含み、この上の古い盛土は18世紀を遡らないことになる。ただし、大部分は17世紀前半から中頃（肥前陶磁Ⅱ期）であり、集落廃絶（17世紀中頃）直後に礫の寄せ集め（下部礫群形成）が始まった可能性はある。上部礫群および新相の盛土も大部分は17世紀中頃までの遺物だが、やはり少数だが18世紀の遺物を含む。新古の盛土は、構築過程はともかく遺物の差はない。**Fig.76-166は青銅製の煙管**で、17世紀以降。また、**Fig.74～75**のように、弥生時代から奈良時代の遺物も混入する。**Fig.77**は明らかに古墳時代の**円筒埴輪**である。窯窯焼成であり、東光寺剣塚（6世紀中頃）の埴輪に類似するが、第1段が明瞭なハケメではなく板ナデ状であり、突帯が小さく低いことが異なる。より新しい様相であり、6世紀後半か。胎土は粗砂礫が多く、那珂川上流域の胎土に近い。付近では相当する有力古墳は不明であり、洪水で流れてきたものであろうか。内面には二次焼成による黒斑化部分がある。

Fig.99は、ＩＡ区**SX009**中央部出土の**石臼**。径28.65cm、高さ6.0cm。多孔質の凝灰岩製か。Fig.94-341と類似するが、断面形が異なる。

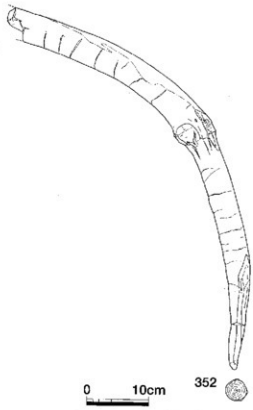


Fig.96　IA区 SX105出土木杭（S=1/6）

Fig.81はＩＡ区**SE021**出土の**木製品**。214と215は

表32. Fig.92出土遺物観察表(2)

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
324	390	ⅠB	SD013	Ⅱ・Ⅲ区	土鈴	幅(2.8)	高(3.1)			精良	10YR2/2黒～7.5YR6/4にぶい橙		

表33. Fig.93出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
325	401	ⅠB	SD012	Ⅳ区下・上?	肥前系陶器Ⅱ期?・擂鉢	(27.1)			(10.5)	5YR4/6赤褐・精良	5YR3/3暗赤褐不透明釉(鉄釉)	17c前～中?	PL.10-7
326	404	ⅠB	SD012	Ⅳ区下層?	肥前系陶器Ⅱ期?・擂鉢				(3.15)	5YR6/6橙・やや粗	5YR3/2にぶい赤褐不透明釉(鉄釉)	17c前～中?	
327	394	ⅠB	SD012	Ⅱ区	肥前系陶器Ⅱ期?・擂鉢			(9.0)	(8.15)	やや粗	無釉・2.5YR4/2灰赤	17c前～中?	
328	392	ⅠB	SD012	Ⅱ区	陶器・擂鉢			(10.7)	(3.65)	N6灰・精良	無釉・外7.5YR5/2灰褐 内5YR5/3にぶい赤褐		
329	395	ⅠB	SD012	Ⅲ区	陶器・片口鉢	(23.0)	(22.4)		(8.1)	2.5Y7/1灰白・精良・やや磁質	7.5YR3/3暗褐不透明釉・内面鉄錆か7.5YR4/4褐		PL.10-8
330	1039	ⅠB	SD012	Ⅳ区	硯?	長(11.9)	幅6.3	厚(2.0)		石材:頁岩或は粘板岩	灰～赤褐色・非常に粒子細かい		
331	406	ⅠB	SD014	Ⅰ区	白磁・皿	(12.0)			(1.96)	N8灰白・精良	10Y8/1灰白透明釉	16c末?	
332	409	ⅠB	SD015	Ⅲ区東	瓦質土器・火鉢	(52)			(15.35)	10YR7/3にぶい黄橙・精良、やや軟質	外10YR5/1褐灰 内10YR7/2にぶい黄橙		
333	407	ⅠB	SD015	Ⅱ区	李朝?陶器・碗			5.3	(1.9)	2.5Y8/2灰白・粗くやや軟質	2.5Y8/2灰白不透明釉・高台の削り出し浅い	17c前?	見込・高台砂目

表34. Fig.94出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
334	415	ⅠB	SD020	Ⅱ区	土師質土器・羽釜	(17.9)			(5.35)	10YR7/2にぶい黄橙・1～2mmの石英、長石、金雲母やや多く粗	N4灰		
335	414	ⅠB	SD020	Ⅱ区	瓦質土器・擂鉢	(25.7)			(5.1)	精良	2.5Y7/1灰白～N6灰		
336	413	ⅠB	SD020	Ⅱ区	土師質土器・擂鉢転用鍋	(24.5)			(6.55)	白色砂粒を含みやや粗	外N2黒 内7.5YR4/3褐		
337	411	ⅠB	SD020	Ⅰ区	土師器・皿	(9.3)		3.9	1.85	金雲母の微粒をやや多く含む・精良	7.5YR7/3にぶい橙		PL.10-10
338	417	ⅠB	SD020	Ⅱ区	染付磁器(青花)・盃			2.8	(1.35)	N8灰白・精良・磁質	7.5GY8/1明緑灰透明釉・やや発泡	16c末～17c初	高台内「福」銘 PL.10-9
339	412	ⅠB	SD020	Ⅰ区	陶器・皿			(5.3)	(2.95)	2.5Y8/2灰白・精良	緑5Y8/3淡黄透明釉 全体に施釉後畳付部の釉削り取り		
340	419	ⅠB	SD0051		土師質土器・鍋	(24.3)			(4.85)	5YR6/8橙・精良・白色砂粒少量含む	5YR2/1黒褐		
341	1041	ⅠB	西側検出時		石臼(上臼)	径(29.4)	幅(11.3)	長(21.8)	厚3.95～5.65	石材:凝灰岩?	灰色・気泡を多く含む		
342	1036	ⅠB	SD004	Ⅱ区	円盤状石製品	長(11.05)	幅(4.1)	厚1.9		石材:角閃安山岩?	明灰色・粒子密・角閃石の八角柱状結晶をやや多く含む		
343	1060	ⅠB	SD004	ベルト3	石斧	長(4.65)	幅(5.2)	厚(1.2)		石材:角閃安山岩?	明灰色・角閃石の八角柱状結晶を含む		
344	430	ⅠB	検出時		肥前系陶器Ⅱ期・皿	(13.2)			(1.8)	7.5Y8/1灰白・やや粗	5Y5/2灰オリーブ透明釉・氷裂	17c前～中	

表35. Fig.95出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
345	1034	ⅠA	水田001		板状石製品	長(4.55)	幅3.45	厚0.4		石材:粘板岩?	灰色・非常に緻密・肉眼で粒状認められない		
346	290	ⅠA	水田002		須恵器・坏蓋	(15.0)			(1.95)	精良	10YR6/1褐灰	8c	
347	267	ⅠA	SD003		須恵器・鉢?	(20.7)			(1.95)	精良	5B5/1青灰	8c	
348	240	ⅠA	SX106		染付磁器(青花)・小碗	(9.1)			(1.6)	N8灰白・精良・硬い作り	青味を帯びた灰白色透明釉	16c末?	
349	266	ⅠA	SD003	下層	土師器・皿	(8.0)		(6.7)	1.05	1mm前後の石英、長石、焼土粒やや多く含む	7.5YR6/3にぶい褐		
350	265	ⅠA	SD003	西坑	土師器・坏	(13.0)			(2.25)	金雲母の微粒をわずかに含む・精良	7.5YR6/3にぶい褐		
351	236	ⅠA	SX106	西	須恵器・坏(蓋?)				(0.8)	緻密	N5灰	6c	「×」ヘラ記号

表36. Fig.96出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・色調	時期	備考
						長	幅	径					
352	1094	ⅠA	SX105	西側・南から5本目	杭	(57.8)	(39.4)	5.0		自然木・枝を打ち払った後樹皮を剥ぎ先端部のみ鉈状工具により加工			

表37. Fig.97出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
353	459	Ⅱ	SX020		須恵器・皿	(13.1)		(10.4)	1.4	0.5～1mmの白色砂粒少量含む・やや粉っぽい	5B5/1青灰	8c	
354	463	Ⅱ	SX020		須恵器・高台付坏			(9.2)	(1.05)	精良	外7.5YR7/1明褐灰～5Y7/1灰白 内5YR6/2灰褐	8c	
355	457	Ⅱ	SX020		土師器・甑把手	接径3.65	幅(7.0)	短径3.0	高(3.8)	1～3mmの石英、長石を多く含み粗	2.5Y8/3淡黄		
356	465	Ⅱ	SX020		弥生土器・甕			(8.2)	(3.4)	1～3mmの石英、長石を少量含む・やや粗	外10YR8/3浅黄橙 内10YR8/2灰白	中期	

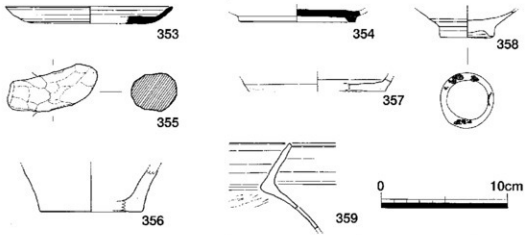


Fig.97　Ⅱ区出土遺物（S=1/3）

漆塗の木製椀で、特に215は黒漆地に赤漆を塗る（巻頭図版3-12）。216は曲物の桶の底板。Fig.85はⅠB区SE003出土の木製品。258も曲物の底板だが、大きさから柄杓か。四方に竹釘痕がある。259は木札状で半円形の抉りがある。用途不明だが指物などの部材か。

Fig.82-229～231はⅠA区SE020出土の鉄製品。229は馬具引手金具。立間は楕円形環部に鋲状に付く。230は鑿（タガネ）、231は鑿（ノミ）であろう。

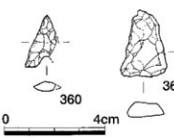


Fig.98　Ⅱ区出土石器（S=2/3）

Fig.100はⅠB区SK036出土の瓦質土器大甕（Fig.83-233は同一か）。復元口径64.0cm、残存高60.5cm。胎土や色調（表面は暗褐灰色）は233と同じ。内外面ともにタテハケ→口縁部ヨコハケ。Fig.83-233～237の他の瓦質土器片とともに埋置されていた。いずれも破片がかなり不足し完形にならない。

Fig.98は、Ⅱ区包含層の黒耀石製石鏃。359は長さ20.5mm、残存幅12.5mm、厚さ4mmを測る。360は未製品か。長さ26.5mm、幅18.5mm、厚さ6mmを測る。

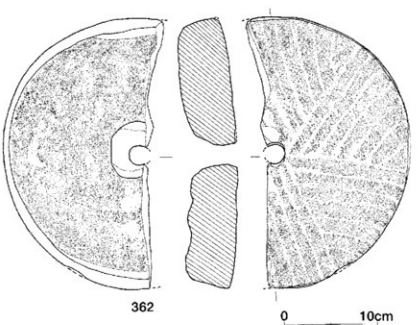


Fig.99　IA区　SX002出土石製品（S=1/4）

表38.　Fig.97出土遺物観察表(2)

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(平均cm)・()内は復元・残 口径	最大径	底径	高	胎土	釉・外面色調	時間	備考
357	435	Ⅱ	SX030-SX041		陶器・鑿			(10.7)	(1.15)	2.5YR5/3赤褐・鉄釉	7.5yR7/3釉小梢不透明釉・光沢(ハ)	17cc	
358	448	Ⅱ	SE005	南上層	肥前系陶器・Ⅱ類・鉄			4.2～4.4	(2.15)	N7Bk/1・鉄釉	7.5YR/1Bk不透明釉	17cc中	高台砂目
359	446	Ⅱ	SP002		土師器・鑿				(6.3)	1～2mmの石英、長石をやや多く含む	外10YR8/3浅黄橙～10YR4/1黒灰 内10YR5/1黒灰	4c後	

第３章　自然科学分析報告

野多目Ａ遺跡群第７次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

那珂川沿いに分布する七隈台地と下白水台地には、更新世の須崎層および阿蘇４火砕流堆積物により構成される須玖面と呼ばれる段丘面が認められる（唐木田ほか，1994；下山，1998など）。野多目Ａ遺跡は、那珂川中流左岸の七隈台地の須玖面に位置する。これまでの発掘調査により、縄文時代、古墳時代、鎌倉時代、近世の遺物・遺構が確認されている。今回の調査では、主に16世紀後半ー17世紀中頃の木田跡・溝跡・掘立柱建物跡・土坑・井戸・塚状盛土などが検出されている。また、調査区東側に南北へ走る溝が検出され、村の東境にあたると推定されている。これらは、江戸時代に書かれた「筑前国続風土記拾遺」の「野多目村」の「古村」にあたると考えられている。

今回は、水路の堆積環境を明らかにするため珪藻分析を、周辺での稲作や古植生を検討するために花粉分析・植物珪酸体分析を、塚状盛土ＩＡ区SX001が墓として利用されていたか検証するためリン分析をそれぞれ実施する。

１．試料

試料は、１Ａ区西の木田から２点（試料番号１・２）と護岸遺構SX105から１点（試料番号３）、１Ｂ区の溝状遺構SD020から１点（試料番号４）、２区の井戸SE0001から１点（試料番号５）、１Ａ区の塚状盛土SX001の基底面中央落ち込み部から１点（試料番号６）、合計６点が採取された。

これらの試料について、珪藻分析１点、花粉分析３点、植物珪酸体分析２点、リン分析１点を行った。なお、各分析項目と試料については、まとめて表１に示す。

表１　分析試料の一覧

番号	調査区	地点	性格	層位	土色	土質	分析項目				時代
							D	P	PO	リン	
1	１Ａ区西	木田001	水田跡	水田面	2.5Y4/2　暗灰黄色	砂質シルト		○	○		16～17世紀
2	１Ａ区西	木田003	水田跡	水田面	10YR3/2　黒褐色	砂質シルト			○		16～17世紀
3	１Ａ区西	SX105	護岸遺構	裏埋＋９枚	10YR2/1　黒色	砂質シルト	○				16～17世紀
4	１Ｂ区	SD020	溝状遺構	溝埋土	10YR3/1　黒褐色	粘混じりシルト		○			16～17世紀
5	２区	SE0001	井戸	下層黒色粘土	2.5Y3/1　黒褐色	砂質シルト		○			17世紀
6	１Ａ区	SX001	塚状盛土	基底面中央落ち込み部	2.5Y5/3　黄褐	シルト質砂				○	17世紀中頃

注）上色は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

２．分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer, K.（1992）、Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1986,1988,1991a,b）などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、

産出個体数200個体以上の試料については、産出率2％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出した化石が現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai, K. & Watanabe, T.（1995）の環境指標種を参考とする。

（2）花粉分析

試料約10ｇについて、木酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

（3）植物珪酸体分析

試料を湿重約５ｇ秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。これを400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は検出される種類とその個数の一覧表と植物珪酸体群集の層位分布図で表示する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

（4）リン分析

リン酸含量の測定は、土壌養分測定法委員会（1981）に基づき、硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法で行う。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）を求める。

３．結果

（1）珪藻分析

結果を表２、図１に示す。産出分類群数は15属57種である。珪藻化石は200個体以上産出する。淡水生種が優占し、全体的には貧塩不定性種（小量の塩分があってもこれによく耐えることができる種）、pH不定性種（pH7.0付近の中性水域で最もよく生育する種）、流水不定性種（止水域にも流水域にも普通に生育する種）が多産する。また、陸生珪藻が全体の約40％を占めるが、流水性種も約30％産出する。

表2　珪藻分析結果（1）

種類	生態性			環境	SX105
	塩分	pH	流水	指標種	3
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	1
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1
Achnanthes clevei Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	2
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	1
Achnanthes inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1
Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	4
Achnanthes rostrata Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	12
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	T	8
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		4
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Amphora pediculus (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	2
Aulacoseira italica var. valida (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph		1
Aulacoseira spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	3
Caloneis largerstedtii (Lagerst.) Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	1
Ceratoneis arcus var. recta (Cl.) Krasske	Ogh-ind	ind	r-bi	T	8
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	2
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	11
Cymbella gracilis (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph	T	2
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	1
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	3
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	6
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1
Eunotia fallax A.Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3
Fragilaria bicapitata A.Mayer	Ogh-hob	ind	l-bi		1
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	2
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	3
Fragilaria exigua Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph		1
Fragilaria parasitica (W.Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	5
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind		1
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		3
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	1
Navicula bryophila Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	4
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	3
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1
Navicula lapidosa Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	9
Navicula placenta fo. obtusa Meister	Ogh-ind	al-il	ind		1
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	2
Navicula pusio Cleve	Ogh-hob	ind	ind		1
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1
Navicula saxophila Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	41
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	2
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		4
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	11
Pinnularia borealis var. scalaris (Ehr.) Rabh.	Ogh-ind	ind	ind	RA	2
Pinnularia braunii (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		3

表2　珪藻分析結果（2）

種類	生態性			環境	SX105
	塩分	pH	流水	指標種	3
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	1
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1
Pinnularia pisciculus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		2
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		4
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1
Stauroncis legumen var. elliptica H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2
Surirella angusta Kuctzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1
海水生種合計					0
海水～汽水生種合計					0
汽水生種合計					0
淡水～汽水生種合計					2
淡水生種合計					203
珪藻化石総数					205

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
Ogh-Mch　：淡水～汽水生種
Ogh-ind　：貧塩不定性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi　：真アルカリ性種
al-il　：好アルカリ性種
ind　：pH不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi　：真酸性種
unk　：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群

K:中～下流性河川指標種，O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）
S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上はAsai，K.& Watanabe，T.，1986）
R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI群，伊藤・堀内，1991）

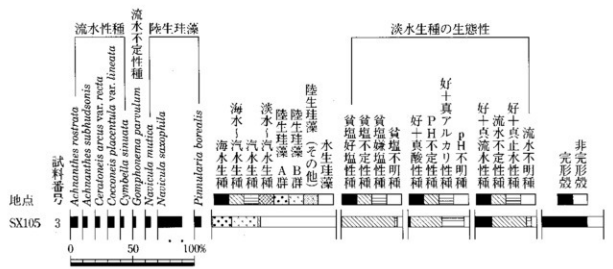


図1　主要珪藻化石群集の層位分布

海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。

主な産出種は、陸生珪藻B群（伊藤・堀内, 1991）のNavicula saxophila が約20％、A群（伊藤・堀内, 1991）のPinnularia borealis、流水性種のAchnanthes rostrata 、Achnanthes subhudsonis 、Cocconeis placentula var. lineata などが約10％近く産出する。

なお、陸生珪藻とは、多少の湿り気のある乾いた環境に生育する珪藻であり、特に乾燥に耐性のある種がA群、また陸生珪藻A群に随伴して湿った環境にも本中にも生育する種がB群とされる。

（2）花粉分析

結果を表3、図2に示す。試料番号1では花粉化石・シダ類胞子の産出は良く、保存状態も良好であった。産出した本本花粉についてみるとマツ属が優占しており、8割以上を占める。検出されるマツ属は、複維管束亜属が多く認められる。草本花粉ではイネ科が多く認められ、この中にイネ属型を呈する花粉も認められた。また、ガマ属・ミズアオイ属・アカウキクサ属などの水生植物や、栽培植物であるソバ属なども認められた。この他、カヤツリグサ科・サナエタデ節ーウナギツカミ節・キク亜科・タンポポ亜科などが産出する。

試料番号4は花粉化石が全く産出せず、イノモトソウ属などシダ類胞子が僅かに認められた程度である。

試料番号5では花粉化石の産出量は非常に多く、木本花粉の占める割合が高い。木本類ではモミ属・ツガ属・トウヒ属・マツ属・クマシデ属ーアサダ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属ーケヤキ属・シナノキ属・イボタノキ属・スイカズラ科などがみられる。マツ属では単維管束亜属が多い。また、絶滅種であるハリゲヤキ属も低率であるが認められた。草本花粉は少ないながらもイネ科・カヤツリグサ科・バラ科・ヨモギ属・キク亜科などが認められ、水生植物のミクリ属も産出した。

表3　花粉分析結果

種類 ＼ 試料番号	水田001 1	SD020 4	SE0001 5
木本花粉			
モミ属	5	—	27
ツガ属	9	—	54
トウヒ属	1	—	5
マツ属単維管束亜属	3	—	33
マツ属複維管束亜属	104	—	2
マツ属（不明）	121	—	42
スギ属	1	—	1
ヤナギ属	—	—	2
ヤマモモ属	—	—	1
サワグルミ属	1	—	—
クマシデ属ーアサダ属	3	—	14
カバノキ属	1	—	3
ハンノキ属	—	—	11
ブナ属	1	—	10
コナラ属コナラ亜属	2	—	67
コナラ属アカガシ亜属	2	—	—
シイノキ属	2	—	—
ニレ属ーケヤキ属	1	—	43
ハリゲヤキ属	—	—	4
エノキ属ームクノキ属	2	—	—
モチノキ属	—	—	1
カエデ属	—	—	2
ツタ属	1	—	—
シナノキ属	—	—	13
グミ属	—	—	1
ウコギ科	3	—	1
ツツジ科	1	—	1
イボタノキ属	—	—	16
トネリコ属	—	—	2
スイカズラ属	3	—	15
草本花粉			
ガマ属	1	—	—
ミクリ属	—	—	1
イネ科	173	—	11
カヤツリグサ科	7	—	16
ミズアオイ属	1	—	—
クワ科	4	—	—
ギシギシ属	4	—	—
サナエタデ節ーウナギツカミ節	18	—	1
タデ属	—	—	1
ソバ属	9	—	—
アカザ科ーヒユ科	2	—	1
ナデシコ科	1	—	—
カラマツソウ属	—	—	2
キンポウゲ属	—	—	1
キンポウゲ科	—	—	1
バラ科	—	—	10
マメ科	1	—	—
キカシグサ属	1	—	—
アリノトウグサ属	2	—	
セリ科	—	—	5
オミナエシ属	1	—	—
ゴキヅル属	2	—	—
ヨモギ属	2	—	4
キク亜科	8	—	6
タンポポ亜科	12	—	—
不明花粉	6	1	10
シダ類胞子			
ヒカゲノカズラ属	5	—	1
イノモトソウ属	23	9	—
アカウキクサ属	1	—	—
他のシダ類胞子	187	25	30
合　計			
木本花粉	267	0	371
草本花粉	249	0	60
不明花粉	6	1	10
シダ類胞子	216	34	31
総計（不明を除く）	732	34	462

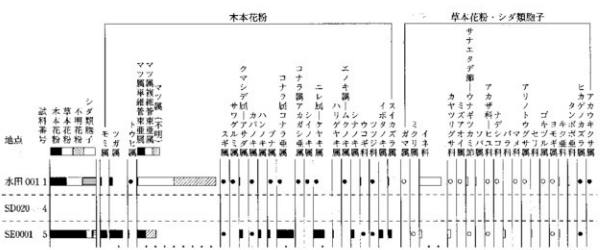


図2　花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

（3）植物珪酸体分析

結果を表4、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

各試料とも栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。試料番号1のイネ属の出現率は、短細胞珪酸体が約7％、機動細胞珪酸体が約18%である。また、試料番号2のイネ属の出現率は短細胞珪酸体が約11%、機動細胞珪酸体が約14%である。

また、いずれの試料もタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属やススキ属を含む）、シバ属、イチゴツナギ亜科などが検出される。

イネ科起源の他に樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループが検出され（近藤・ピアスン、1981）、特に第Ⅲグループの産出が目立つ。近藤・ピアスン（1981）によると、第Ⅲグループは維管束細胞の節部に形成され「Y」あるいは「く」の字状の形態を示し、また第Ⅳグループは維管束細胞の周辺部にみられる網目模様の付いた紡錘形を呈する珪酸体である。

表4　植物珪酸体分析結果

種類 / 試料番号	水田001 1	水田003 2
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属	18	24
タケ亜科	105	108
ヨシ属	7	7
ウシクサ族コブナグサ属	4	—
ウシクサ族ススキ属	5	4
イチゴツナギ亜科	10	7
不明キビ型	53	40
不明ヒゲシバ型	28	25
不明ダンチク型	26	13
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	21	30
タケ亜科	44	90
ヨシ属	6	16
ウシクサ族	14	39
シバ属	2	8
不明	27	30
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	256	228
イネ科葉身機動細胞珪酸体	114	213
総　計	370	441
組織片		
イネ属短細胞列	3	4
その他		
樹木起源（第Ⅲグループ）	73	157
樹木起源（第Ⅳグループ）	5	3

（4）リン分析

分析の結果、塚状盛土のリン酸含量は、1.03P_2O_5mg/gであった。

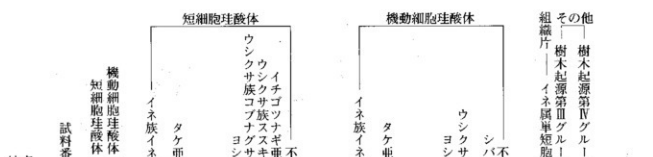


図3　植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、組織片とその他の産状を検出個数により＋の記号で示す。

4．考察

（1）古植生の検討

今回花粉分析を行った3点中、試料番号4の溝状遺構SD020からは花粉化石が検出されず、シダ類胞子が僅かに産出された程度である。堆積が酸化状態であるような場合、堆積する花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている。また、一般的に花粉よりもシダ類胞子の方が腐蝕に対する抵抗性が高いとされている（中村，1967；徳永・山内，1971）。これらのことから本地点の花粉化石は、堆積過程の段階、および堆積後に分解・消失したものと推測される。

他の2試料では、比較的良好に花粉化石が検出された。ただし、両遺構とも16～17世紀頃の遺構覆土とされているにもかかわらず、その花粉化石群集は両者で全く異なる。特に試料番号5の2区SE001ではモミ属・ツガ属・マツ属単維管束亜属・コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属などが認められた。九州地方北部の植生変遷史は、黒田・畑中（1979）、Hatanaka（1985）を参考にすると、20,000年前頃に成立していた亜寒帯性針葉樹林が、15,000年前頃から衰退し、これに変わって落葉広葉樹が分布・拡大したとされている。さらに低率ながら検出された絶滅種のハリゲヤキ属は、大型植物遺体の研究などから最終氷期頃まで日本に分布していたとされる（檜井，1996）。これら既存の調査例と、完新世に分布拡大したと考えられるアカガシ亜属やシイノキ属などの照葉樹に由来する花粉化石が本試料において検出されないことなどから、この花粉化石群集は約10,000年前以前の群集組成を反映している可能性がある。本遺跡が更新統の古い地層から構成される段丘上に位置することから、本遺構の埋積物は古い時代の堆積物と考えられる。よって、当該期の植生は、試料番号1の水田001で得られた群集組成に基づいて行う。

水田001ではマツ属複維管束亜属が多く認められた。歴史時代以降、マツ属（特にニヨウマツ類）が急増する現象は全国各地に見られており、これは森林伐採による二次林の増加や植林などによる、人類の植生干渉の結果として知られている（例えば，塚田，1981など）。急増する年代は地域により異なり、北九州におけるマツ属花粉の急増は2,000年前以降からであり、50％を越えて卓越するのは500年前頃とされている（波田，1987）。また、当社が福岡平野で実施した植生史研究でも、縄文時代

頃イチイガシ（アカガシ亜属）などからなる照葉樹林が成立していたが、古代以降になるとマツ林（ニヨウマツ類）へと変化したことが明らかにされている（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表）。したがって、16−17世紀頃、周辺はマツ属を主体とした植生が存在していたと推測される。また、植物珪酸体において樹木の葉部に由来する植物珪酸体も検出された。特に検出個数の多かった第Ⅲグループは、九州・沖縄地方において表層あるいは埋没土壌中に特徴的に認められるとされている（近藤，1976）。これより、後背地などには、これらの珪酸体を形成する広葉樹も存在していたと考えられる。ただし、総花粉・胞子数に対して木本花粉の占める割合が低率であることから、遺跡近傍には森林と呼べる林分が存在しておらず、むしろ開けた空間が存在していたと考えられる。

（2）稲作について

1A区西で検出された水田の上壌では、イネ科花粉が多産し、その中にイネ属型を呈する花粉も認められた。また、植物珪酸体でもイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出された。現水田の調査による水田土壌中の植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の出現率が9％、また稲藁を堆肥として与えている水田で16％という結果が得られている（近藤，1988）。今回の機動細胞珪酸体の出現率は試料番号1で約18％、試料番号2で約14％であり、現在の水田耕土とほぼ同様な出現率を示す。また、植物体の存在を示唆する組織片も検出されている。これらの産状を見る限り、調査地点の近傍において稲作が行われており、本遺構は水田として利用されていたと考えられる。なお、試料番号1からは、抽水植物のミズアオイ属、浮水性シダ類のアカウキクサ属に由来する花粉・胞子が検出されている。これらの種類は、水田内に生育し、水田雑草と成り得る種類である。したがって、当時もこれらが水田雑草として生育していた可能性がある。

ところで、試料番号1では、畑作植物とされるソバ属に由来する花粉が検出されている。ソバ属花粉は、栽培地から離れると出現率が極端に減少することが知られており、中村ほか（1981）によるとソバ属花粉が1％以上検出されるならばその地点あるいはあまり離れていない場所でソバ栽培が行われていたとみなすことができると述べている。これを考慮すると、本遺跡の近傍でも稲作だけでなく、ソバ栽培などの畑作が行われていたことが推定される。

（3）SX105の埋積過程

SX105の9層は、乾いた環境に生育する陸生珪藻が約40％を占める。しかし、陸生珪藻の中で最も多く産出するNavicula saxophila はB群に分類され、湿った環境にも水中にも生育する種である。また、Achnanthes rostrata などを初めとする流水性種が全体の約30％近く検出されている。発掘調査所見より9層にラミナ構造が認められることを考慮すると、9層は基本的に水成堆積であり、流水環境下であったと推定される。また、産出する陸生珪藻A群が周辺の乾いた土壌に生育していたものに由来していると考えられることから、SX105には周囲の土壌が崩落し堆積、または周囲の土壌が削剥され堆積していると考えられる。

なお、発掘調査所見より、9層〜10層が堆積する溝の下部は、別の溝である可能性が指摘されている。今回は9層のみの調査であったが、7層や5層などの上下層を調査することで、溝の埋積過程の変化を明確にすることができると思われる。

（4）塚状盛土の用途

塚状盛土SX001の基底面中央落ち込み部のリン酸含量は1.03P_2O_5mg/gであった。今回の調査では、周辺の土壌のリン酸含量が不明であるため、土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量と比較する。リン酸の天然賦存量は、Bowen（1983）、Bolt & Bruggenwert（1980）、川崎ほか（1991）、天野ほか（1991）などの調査事例がある。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約

3.0P_2O_5mg/g程度である。また、化学肥料の施用など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地では、5.5P_2O_5mg/g（川崎ほか，1991）という報告例がある。これまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌の場合、6.0P_2O_5mg/gを越える場合が多い（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表）。これらの値を著しく越える土壌では、外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の富化が指摘できる。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP_2O_5mg/gで統一した。

今回の測定結果は、上記の天然賦存量よりも極めて低い値である。発掘所見によると、墓よりも祭祀施設の可能性が指摘されており、今回のリン分析結果はそれを支持する可能性がある。ここで、土坑墓等の調査などを行うと、同一遺構内でもリン酸含量の測定値に偏りが見られる場合がある（例えば、中根，1992）。このことから遺体埋納箇所に近いほど高い値のリン酸含量が得られることが判明しており、遺構内部における遺体埋納箇所が推定できる場合がある。したがって、同一遺構内において複数の試料の分析調査を行うことが、より効果的な遺体埋納の検証、さらには遺体埋納箇所の検証につながると考える。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敏・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

Asai, K. & Watanabe, T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom，10，p.35-47.

Bowen,H.J.M.（1983）「環境無機化学 ―元素の循環と生化学―」．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen,H.J.M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.（1980）「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309p.，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）SOIL CHEMISTRY］，p.235-236.

土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」．440p.，養賢堂.

渡田善夫（1987）松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究 ―松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の撹乱とその動態について―．資料集，p.41-49，日本自然保護協会.

原口和夫・二友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527-600.

Hatanaka K.（1985）PALYNOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WRM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B)，18，p.29-71.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

唐木田芳文・富田寧臣・下山正一・千々和一豊（1994）福岡地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），192p.，地質調査所.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27．

近藤錬三（1976）樹木起源の珪酸体について．ペドロジスト，20，p.176-189．

近藤錬三（1988）十二遺跡土壌の植物珪酸体分析．「銅師屋遺跡群十二遺跡ー長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書ー」，p.377-383，御代田町教育委員会．

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64．

近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について．帯広畜産大学研究報告，12，p.217-229．

Krammer, K.（1992）PINNULARIA. eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1986）Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mittelcuropa. 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1988）Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von：Die Suesswasserflora von Mittelcuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1991a）Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von：Die Suesswasserflora von Mittelcuropa. 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1991b）Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. Band 2/4 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

黒田登美雄・畑中健一（1979）花粉分析よりみた北九州の過去２万年間の植生変遷．花粉，13，p.3-8．

中村　純（1967）「花粉分析」，232p.，古今書院．

中根秀二（1992）１号方形周溝墓の自然科学的分析．「田園調布南２　都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.133-149，都立学校遺跡調査会．

中村　純・畑中健一・三好教夫・山中三男（1981）農耕史の花粉分析学的研究．「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学　昭和55年度年次報告書」，p.147-153，文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班．

楡井　尊（1996）更新統産ハリゲヤキ属（ニレ科）の花粉形態．第四紀研究，35，p.333-338．

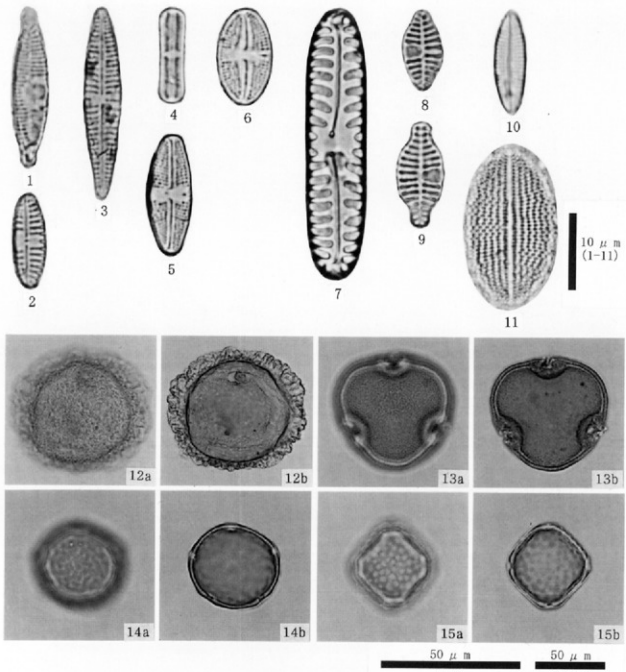
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖．

下山正一（1998）福岡平野の縄文海進と第四紀層．「福岡平野の古環境と遺跡立地　ー環境としての遺跡との共存のためにー」，p.11-44，（財）九州大学出版会．

徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子．「化石の研究法」，p.50-73，共立出版株式会社．

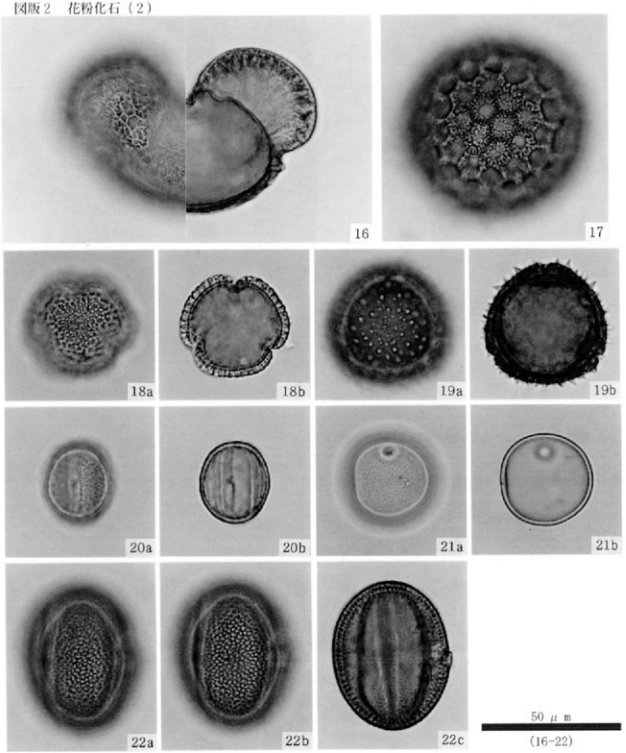
塚田松雄（1981）過去一万二千年間ー日本の植生変遷史Ⅱ　新しい花粉帯．日本生態学会誌，31，p.201-215．

(自然科学分析)
図版1　珪藻化石・花粉化石（1）



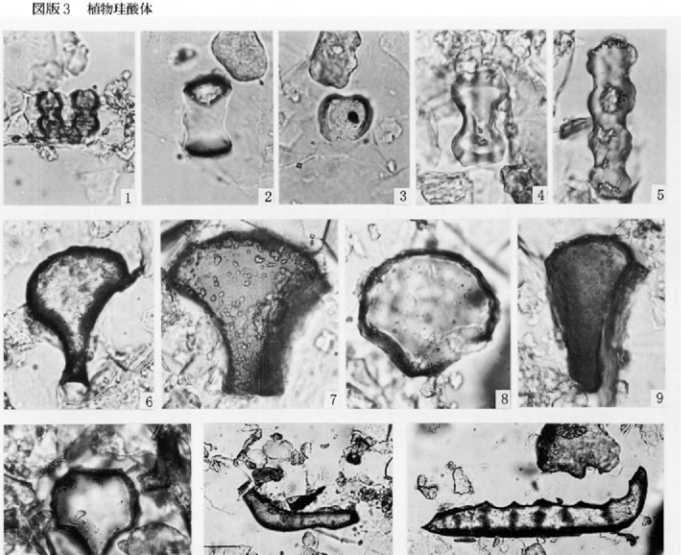
1. *Ceratoneis arcus var. recta* (Cl.) Krasske(試料番号3)
2. *Cymbella sinuata* Gregory(試料番号3)
3. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(試料番号3)
4. *Navicula contenta* Crunow(試料番号3)
5. *Navicula mutica* Kuetzing(試料番号3)
6. *Navicula saxophila* Bock(試料番号3)
7. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(試料番号3)
8. *Achnanthes rostrata* Oestrup(試料番号3)
9. *Achnanthes rostrata* Oestrup(試料番号3)
10. *Achnanthes subhudsonis* Hustedt(試料番号3)
11. *Cocconeis placentula var. lineata* (Ehr.) Cleve(試料番号3)
12. ツガ属(試料番号5)
13. シナノキ属(試料番号5)
14. ニレ属ーケヤキ属(試料番号5)
15. ハリゲヤキ属(試料番号5)

(自然科学分析)
図版2　花粉化石（2）



16. マツ属(試料番号5)
17. サナエタデ節ーウナギツカミ節(試料番号1)
18. イボタノキ属(試料番号5)
19. スイカズラ属(試料番号5)
20. コナラ属コナラ亜属(試料番号5)
21. イネ科(試料番号1)
22. ソバ属(試料番号1)

（自然科学分析）
図版３　植物珪酸体



1. イネ属短細胞列(試料番号1)
2. タケ亜科短細胞珪酸体(試料番号1)
3. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号2)
4. コブナグサ属短細胞珪酸体(試料番号1)
5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号2)
6. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号2)
7. タケ亜科機動細胞珪酸体(試料番号1)
8. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号1)
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号2)
10. シバ属機動細胞珪酸体(試料番号2)
11. 樹木起源 第Ⅲグループ(試料番号2)
12. 樹木起源 第Ⅳグループ(試料番号1)

第４章　調査のまとめ

１．中世末から近世前期の集落について

本調査のＩ区の遺構の大部分は、出土遺物から中世末期から近世前期のものである。肥前陶磁の編年では（九州近世陶磁学会2000、例言参照）、Ⅱ期（1610年代～1650年代）までの遺物が多くあるが、次のⅢ期以降はごくわずかであり、1650年前後に集落が実質的に廃絶するとみてよい。これは、第４次調査の成果（福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集）における「第２期」集落の終焉と

·致する。第4次報告では、江戸時代の『筑前國続風土記拾遺』の「那珂郡　野田目村」の項における、「民居一所に在。むかしハ村の寅（東北東）の方三町（300m強）斗（ばかり）に在。正保元年（1644年）に今の所に移せり。今其所を古村といふ。」（青柳種信編著『筑前國続風土記拾遺上巻』福岡古文書を読む会校訂（株）文献出版、より引用。ただし（　）内は今回補う。以下同じ。）とある記述の「古村」に比定するが、集落移転の時期が合致し、異論はない。近世以降の野田目村は、近現代の野多目集落（Fig.1の野多目B遺跡群の位置）に続くものであり、『続風土記拾遺』の「照天神社」（野多目大池東側の小丘陵上に鎮座）の項に、「村の西に大堤あり。水面八町三反あり。」とあり、野田目村の西に野多目大池（「大堤」）があり、その東北東が野多目A遺跡群である。

次に出土遺物について述べておく。陶磁器では、肥前陶磁は雑釉陶器が比較的多く、磁器は少なく、碗・皿類が主体で、大皿などの優品がない。これらは、野多目A集落が、一般農民層の集落であることを物語る。ただし、瓦類が少ないが一定の出土があり（ⅠA区SX001、ⅠB区SD004・SD006など）、少なくとも部分的な瓦葺建物があったと思われる（有力農民層か）。一方、摺鉢では肥前焼などの陶器が少なく、瓦質土器が多数を占め（他の大鉢や火鉢も同様）、経済的に裕福ではなかったことも考えられる。これに関して、摺鉢などの瓦質土器がかなり多く出ることから（第4次報告では未使用品が多いとされる）、それらの生産集落であることが示唆されている。しかし、焼成遺構の可能性がある遺構（ⅠA区SX002）もあるが、その出土状況は陶磁器の日常雑器とともに廃棄され、破片が主体で考古学的完形は少数であり、本調査では未使用品が特に多いとは思えない。したがって、生産地である可能性は否定しないが、経済的・階層的要因も含めて検討すべきであろう。

2．塚状盛土ⅠA区SX001について

SX001の盛土・礫群内には、17世紀初頭～中頃の遺物が大半だが、少数ながら18世紀前半までのものを含む。集落廃絶（17世紀中頃）後、旧集落部分を水田化する際に、耕作で掘り起こしたり、その後流れてきたものを寄せ集めた結果であろう。当初は地元の方々の話から、塚がタブー視されている伝承があり、例えば何らかの異常事態により集落が廃絶し、旧村を鎮魂・顕彰するために作られた祭祀施設ではないかという可能性を考えたが、遺物出土状況などからは祭祀的要素は見出せない。結論的には、盛土SX001は、開墾や水田経営にあたり、邪魔な土砂や礫、ゴミ（遺物）を片付けた「島畠」であり、18世紀前半以降に形成されたものと考える（下部礫群の形成開始は17世紀中頃の可能性がある）。

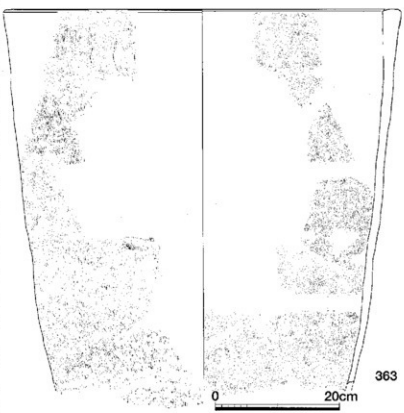


Fig.100　IB区 SK036出土遺物補遺（S=1/6）

図　版

1．IA区全景（東から）

2．IA区 SX001礫群出土状況（南から）

図版目次

（カラー巻頭図版）

巻頭図版1　1．Ⅰ区全体写真（合成）

巻頭図版2　2．ⅠA区東側～中央写真（空撮）

　　3．ⅠB区全体写真（空撮）

巻頭図版3　4～12．出土遺物写真

（第3章　自然科学分析）

図版1　珪藻化石・花粉化石（1）

図版2　花粉化石（2）

図版3　植物珪酸体

図版扉　1．ⅠA区全景

　　2．ⅠA区 SX001礫群出土状況

PL. 1　1．ⅠA区西半珪藻群写真（空撮）

　　2．ⅠA区東半水田・灌漑施設・堰SX00

　　（空撮）

　　3．ⅠA区降雨後現場状況

　　4．ⅠB区全景

PL. 2　1．ⅠB区西半湧群写真（空撮）

　　2．ⅠB区西半珪藻群写真（空撮）

　　3．ⅠB区西半湧群

　　4．ⅠA区 SX001調査前状況

　　5．ⅠA区 SX001表土除去清掃状況

　　6．ⅠA区 SX001上部遺構・撹乱検出状況

　　7．ⅠA区 SX001試掘トレンチ壁面土層

　　8．ⅠA区 SX001東西ベルト土層

PL. 3　1．ⅠA区 SX001東西上層東半

　　2．ⅠA区 SX001東西土層西半

　　3．ⅠA区 SX001南北ベルト上層北半

　　4．ⅠA区 SX001南北ベルト土層南半

　　5．ⅠA区 SX001東西土層中央・南北土

　　層北半中央

　　6．ⅠA区 SX001上部礫群出土状況

　　7．ⅠA区 SX001上部礫群除去面状況

　　8．ⅠA区 SX001下部礫群東側状況

PL. 4　1．ⅠA区 SX001下部礫群出土状況

　　2．ⅠA区 SX001下部礫群出土状況

　　3．ⅠA区 SX001東西ベルト土層下層部分

　　4．ⅠA区 SX001盛土除去後下部遺構

　　5．ⅠA区 SX001・SE020上層

　　6．ⅠB区 SE003完掘状況

　　7．ⅠB区 SE003横組井戸枠出土状況

PL. 5　1．ⅠA区 SE021中層遺物出土状況

　　2．ⅠA区 SE021中層下部遺物出土状況

　　3．ⅠA区 SE021完掘状況

　　4．ⅠB区 SE001上層土層状況

　　5．ⅠA区 SK010礫・遺物出土状況

　　6．ⅠA区 SK010横断土層状況

　　7．ⅠB区 SK036遺物出土状況

　　8．ⅠA区 SX002他出土状況

　　9．ⅠA区 SD013礫・遺物出土状況

　　10．ⅠB区 SD006-Ⅲ区礫・遺物出土状況

　　11．ⅠB区 SD004-Ⅲ区南土層状況

PL. 6　1．ⅠA区 SD006・SK009

　　2．ⅠA区 西半水田・灌漑施設検出状況

　　3．ⅠA区 SX105・SX106出土状況

　　4．SX105中央近景

　　5．ⅠA区 SX105　中央～西半、SX106

　　6．ⅠA区 SX107・SX108出土状況

　　7．Ⅱ区 SE001

　　8．Ⅱ区 SX001風倒木

　　9．Ⅱ区 SX004（左）・SX008（右）風倒木

PL. 7　1．Ⅱ区全景

　　2．Ⅱ区 SP002土器出土状況

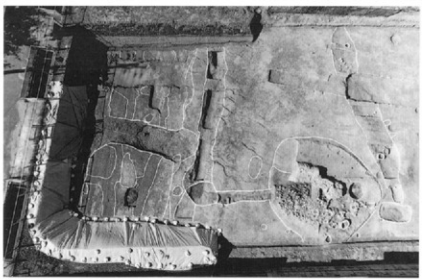
　　3～10．出土遺物写真（1）

PL. 8　出土遺物写真（2）

PL. 9　出土遺物写真（3）

PL. 10　出土遺物写真（4）

1．IA区西半建物群写真（空撮）



2．IA区東半水田・灌漑施設、塚SX001写真（空撮）

4．IB区全景（東から）

3．IA区降雨後現場状況（東から）

1．IB区西半溝群写真（空撮）

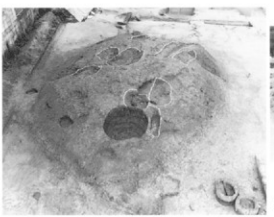
2．IB区西半建物群写真（空撮）

3．IB区西半溝群（北から）

4．IA区 SX001調査前状況（北から）

5．IA区 SX001表土除去清掃状況（北から）

7．IA区 SX001試掘トレンチ壁面土層（西から）



6．IA区 SX001上部遺構・撹乱検出状況（東から）

8．IA区 SX001東西ベルト土層（北から）

1．IA区 SX001東西土層東半（北から）

2．IA区 SX001東西土層西半（北から）

3．IA区 SX001南北ベルト土層北半（西から）

4．IA区 SX001南北ベルト土層南半（西から）

5．IA区 SX001東西土層北半中央・南北土層北半中央

6．IA区 SX001上部礫群出土状況（西から）

7．IA区 SX001上部礫群除去面状況（西から）

8．IA区 SX001下部礫群東側状況（南から）

1．IA区 SX001下部礫群出土状況（東から）

2．IA区 SX001下部礫群出土状況（西から）

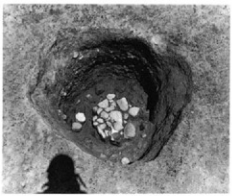
3．IA区 SX001南北ベルト土層下層部分（西から）

5．IA区 SX001・SE020土層（南から）

4．IA区 SX001盛土除去後下部遺構（東から）

6．IB区 SE003完掘状況（南西から）

7．IB区 SE003桶組井戸枠出土状況（北西から）



1．IA区 SE021中層遺物出土状況（南から）

2．IA区 SE021中層下部遺物出土状況（北から）

3．IA区 SE021完掘状況（北から）

4．IB区 SE001上層土層状況（東から）

5．IA区 SK010礫・遺物出土状況（南から）

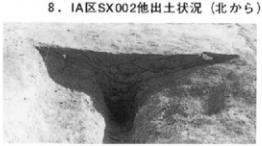
7．IB区 SK036遺物出土状況（西から）

6．IA区 SK010横断土層状況（東から）

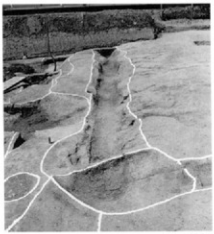
8．IA区SX002他出土状況（北から）

9．IA区 SD013礫・遺物出土状況（東から）

10．IB区 SD006-Ⅱ区礫・遺物出土状況（北から）



11．IB区 SD004 -Ⅲ区南土層状況（北から）



1．IA区 SD006・SK009（南から）

2．IA区 西半水田・灌漑施設検出状況（南西から）

3．IA区 SX105・SX106出土状況（南から）

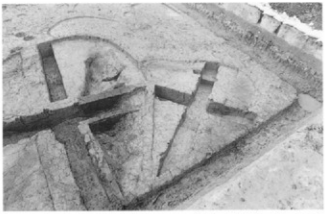
4．SX105中央近景（東から）

5．IA区 SX105中央～西半・SX106（西から）

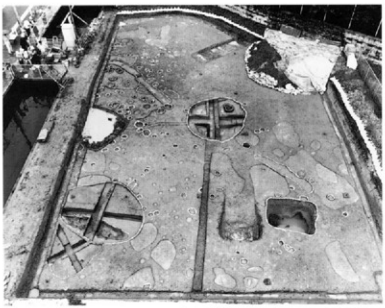
6．IA区 SX107・SX108出土状況（東から）

7．Ⅱ区 SE001（東から）

8．Ⅱ区 SX001風倒木（北から）

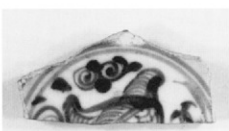


9．Ⅱ区 SX004（左）・SX008（右）風倒木（北から）

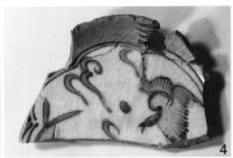


1．Ⅱ区全景（西から）

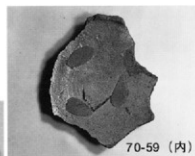
2．Ⅱ区 SP002土器出土状況（西から）



69-18（内）

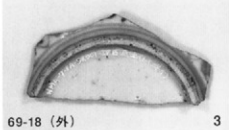


4 69-27（内）

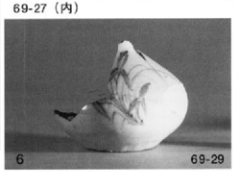


70-59（内）

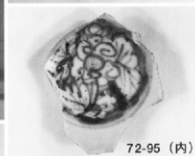
5 70-59（外）



69-18（外） 3



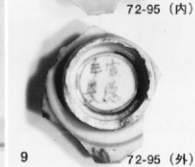
6 69-29



72-95（内）

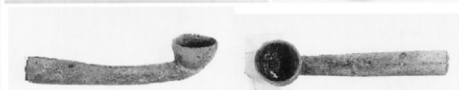
70-73（内）

72-98 7



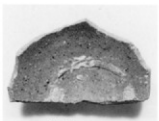
9 72-95（外）

70-73（外） 8



10 76-166 76-166（上）

PL.7（2～10）出土遺物写真（1）


72-96（内）

72-96（外） 1

2 72-93

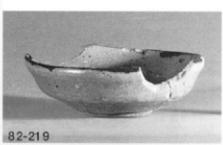
3 72-97

73-114（外）

73-114（内） 4

5 77-167（外）

77-167（内）


82-219

82-219（外） 6

78-168（外）

78-168（断面） 7

79-188 8

81-216 9

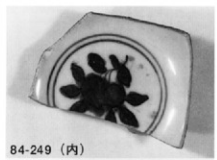
81-215（内）

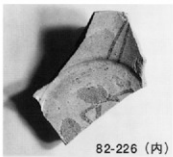
81-215（外） 10

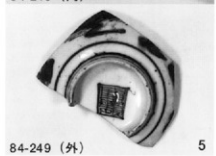
PL. 8 出土遺物写真（2）

82-225 1

84-243 (内)
84-243 (外) 4

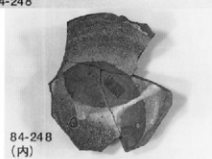

84-249 (内)


82-226 (内)


84-249 (外) 5

84-248

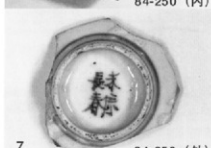
82-226 (外) 2


84-248 (内)

84-250 (内)

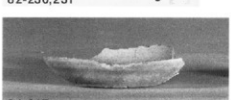
82-230,231 3

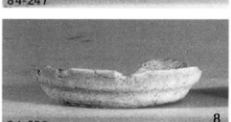
84-248 (外) 6


7 84-250 (外)

89-285 (内)

90-300 (内)

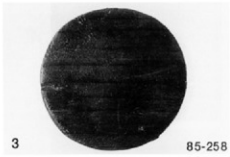

84-247

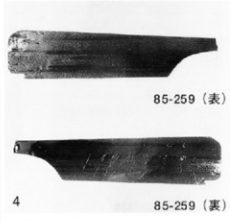

84-253 8

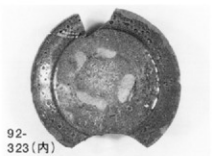
9 89-285 (外)

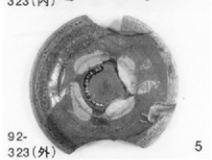
10 90-300 (外)

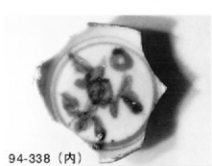
PL. 9 出土遺物写真 (3)

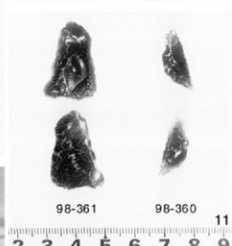


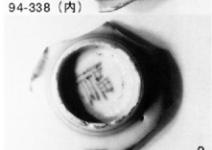












PL. 10　出土遺物写真（4）

調査番号	0014	遺跡略号	NMA－7
調査地地籍	南区野多目1丁目地内	分布地図番号	0141
調査原因	外環状線道路建設（Ⅱ区）	調査面積	1,591㎡
調査期間	2000年（平成12年）5月22日～2000年（平成12年）9月29日		

外環状道路関係文化財発掘調査報告書20
野多目A遺跡
－第7次調査の報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第754集
2003年（平成15）年3月14日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
☎（092）711－4667
印刷　株式会社ナガシマ
福岡市博多区豊一丁目9－18
☎（092）482－7751